

---

# **織斑家の最強お父さん！**

**親バカ最強パパ**

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

織斑家の最強お父さん！

### 【NNコード】

N7710X

### 【作者名】

親バカ最強パパ

### 【あらすじ】

ニート生活満喫してたらマイシスターが子供を残して蒸発しやがった。

仕方がなく引き取り、二人を育てることに・・・。

親父、織斑春樹。娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。取り敢えず頑張ろっ。二人が立派に育つその日まで・・・。

ドタバタ織斑家劇場、ここに開幕也！

親父、始めました。（前書き）

ネギまー。これあるが浮かばなくなつたから息抜き。

もつとつのはまは真面目に書いてるから息抜きにならん。

## 親父、始めました。

本日は晴天なり。

空には憎たらしきほど太陽がさんせんと叫びまくりかんかんと照りて  
おひきます。

自己紹介をしよう。俺の名前は織斑春樹おりむら はるき。

年は三十路、詳しく言えば三十一歳。バリバリのおっさんをしてい  
ます。

ちなみに童貞。仕事はめんどくさいからやめて一ノート生活満喫中。

今日も変わらず家にて溜め込んだゲームをプレイしてたんだが・・・

兄さん。悪いんだけど一人をお願いね。私達では育てられない  
から・・・。

「……………そりゃない  
ぜマイシスター」

「あ、あの・・・よろしくお願いします。春樹伯父さん」

現在の住所は都内の少し高めのマンションの一室。  
玄関の前で肌寒くなつてきた日にマイシスターの娘と息子が手紙を  
持つて現れ、俺絶賛混乱中。

あの馬鹿一人……！子供を押し付けて蒸発しやがったな……！

「…………まあ入れ。寒いだろ」

「は、はい。お邪魔します……」

「荷物寄越せ。重いだろ」

マイシスターの娘から小さな体には似合わない大きな鞄と背中に背負う赤ん坊を受け取ると乱雑した部屋を閉めてリビングにて赤ん坊を寝かせた。

マイシスターの娘はおどおどしながらリビングに入ると何をしたらいいのかとキョロキョロしていた。

取り敢えず手を無理矢理引っ張つてソファーに座らせると温かいココアを飲ませる。

「…………おい。まさか秋枝あきえはお前らを残して消えたのか？」

「…………それは……」

「ああ……いい、いい。無理に話さなくていいわ」

ココアを飲んでリラックスしたマイシスターの娘と話すとやつぱり少し暗い顔して俯いた。

・・・んー、大方秋枝の奴が書き置きだけしてあのクソガキ（秋枝の夫）とどこかに行つたんだろ。

昔に親父に勘当されたくせに俺を頼るとは死にたいのかあの馬鹿は？やはり親父が結婚に反対して正解だわ。あの亭主、働かずに秋枝だけを働かせて金を食い潰してたらしいからな。

秋枝もあんなクソガキのどこがいいんだか・・・。

「んー、行く宛はあるか？」

「・・・ない、です・・・」

どうするか。親父はすでに死んでるし、おふくろも俺が七歳の時に病氣で死んでる。

親戚はいるがどいつもこいつもうへでなしだからな・・・。

・・・仕方がない。

「わかった。あの馬鹿妹に代わつて俺がお前らの親父になつてやるよ

「え、で、でも…春樹叔父さんに迷惑が・・・きやうづー？」

バチンとドーピングをするヒマトイシスターの娘は額を押さえて涙目で見てきた。

わあてれじ。まあは組長とかおやつさんと電話するか。

「なに、するんですか……？」

「子供が遠慮すんな。親父からの遺言で秋枝がもし育児放棄したらお前らを頼むって言われたんだよ……あ、もしもし組長ですか？お久しぶりです、春樹です」

さすが親父。秋枝が育児放棄するのが見えていたようだ。

取り敢えず昔に世話になつた人達に電話をして養子縁組申請せねば。額を押さえながらおろおろする娘に饅頭を渡して電話に集中しながら紙にサラサラと書き込んでいく。

娘は戸惑いながら饅頭をパクリと食べながら俺と赤ん坊をチラチラ見るが取り敢えず無視して電話を掛けまくる。

「はい・・・はい・・・ありがとつやつさん。助かったよ

『気にはんな春坊。死んだオジキからの頼みだからいくらでも言えやー他にする』とないか？』

「それならまた電話するから。うん・・・うん・・・ありがと。じやあな

電話を切るとサラサラとボールペンで簡単にメモするといつていけてない娘に目を向ける。

「おこ」

「は、ひやいーー?」

「出掛けれる。上着を着ろ」

「え?・え?」

ガサゴソと親父の遺品が入った段ボールを漁ると昔に親父が秋枝を背負った時に使われた赤ん坊用のあれが見つかる。のうのうと上着を羽織る娘より早く赤ん坊を背負いつと身分証明書など必要なものを持ち出す。

「養子縁組届けを出すから付き合え。拒否権はない」

「あ、はい・・・わわわわっ」

娘を肩に担いで赤ん坊を背中で抱き、市役所に向かつ。市役所に向かつ。

・・・到着。頭にキングクリムゾンが浮かんだのは気にしない。  
養子縁組届けを書き、身分証明書を出して待合室で待つ。

視線がチラチラ感じるがどこ吹く風で受け流しながら赤ん坊をあやす。

昔から親戚のガキの面倒を見てたから慣れたものだな。

「は、は、春樹が・・・子供を・・・」

「いやああああああつ！－織斑さんが子供を連れてるうううう！」

「！」

「神は死んだ！狙つてたのにいいい！－」

そんな声が聞こえたのは『愛嬌』。

しばらくすると市役所の役員が書類を持ってきて正式にマイシスターの子供は俺の養子となつた。

掴み掛かる知り合いの股間を蹴り飛ばしたりと色々あつたがまではマンションに帰ることにした。

「とこうわけで今日から親父と呼びたまえ」

「い、いや。できたら父さん辺りがいいなつて・・・」

「・・・ま、呼び方は好きにしろ。部屋はまだあるからそこ使つか？そつちは俺が面倒見なきやならんから俺の部屋にするが・・・秋枝の奴、次顔見せたら潰す」

「（・・・あ、あの人人が言つた通りに怖い人だ・・・）」

・・・織斑春樹。一児のパパになりました。

娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。

俺三十二歳、千冬九歳、一夏一歳。

現在住所ちょい高めのマンション。

残金・・・一億七千万。

織斑春樹・・・任侠の四季組組長の息子であり、数々の伝説を築いた“生ける最後の侍”と呼ばれる人類最強。  
現在は無職。

人類最強お父さん、ここに爆誕！

親父、始めました。（後書き）

簡単なプロフィール。

織斑春樹

三十一歳

無職。二ートとも言ひ。

身長は184、体重は58、体脂肪率3%以下の女の敵。体は鍛えてる方。かなりの傷があり。

千冬のように黒髪を後ろで纏めて伸ばしている。目は突然変異のルビーのような赤色。顔は整い、千冬にそっくり。この場合は千冬が春樹にそっくりである。

趣味はゲームに料理。任侠の女性に学ぶ。

“最後の侍”<sup>ラストサムライ</sup>と呼ばれ、人類最強の戦闘力を持つ。IISを素手で破壊するほど。

ちなみに、S。理不沢めりない性格であり、将来は千冬がそれを受け継ぐ。・・・。

## 第一話、親父（前書き）

取り敢えず一話だけ投稿。

といつも一晩過ぎてお気に入りが増えてるのにビクつて珈琲吐き出しだぞ。

前話にて千冬の年齢を七歳から九歳に変更。  
こちらの方が何かといい気がしたんで。

前話のプロフィールは春樹は千冬っぽい。でわかつていただければ。  
体脂肪率3%は可笑しいか？うちの叔父なんかリアルに体脂肪率3%に近いんだけど。  
しかも元自衛隊。

## 第一話、親父

本日は晴天なり。

ぽかぽかと陽気な口差しにより、パパは眠気がパネエです。  
とこうか田差しに当たりながら寝顔をしております。

デフォで隣にはマイシスターの娘、千冬が俺の腕を枕にして爆睡。  
涎が冷たい。

本日は日曜日。全国のパパさん達は家族サービスをしたり、息子に  
サンドバッグにされてるでしょう。

ちなみにN e wパパさんであるわたくしは育児のめんじくさんだ  
ウンして死んでおります。

甘かった・・・夜に一夏はギヤー、ギヤー泣くし、腹が減つてもギヤー、ギヤー泣くし、俺がいないとギヤー、ギヤー泣く・・・。

軽くノイローゼになりそ�だ。マイシスター、貴様はこれが嫌で逃げやがつたな。

「・・・すー・・・すー・・・」へへ

「・・・涎がダラダラやん。これ、お気に入りのシャツなんだがな

隣で寝る娘、千冬は涎をだらしなく垂らしまくってシャツに染みを作りまくってやがります。

だが許す。寝顔が可愛いから・・・」とメモしておこう。

二人、千冬と一夏を引き取つてからすでに一ヶ月。秋枝の馬鹿は姿は見せないから徐々に説教のレベルを上げようと思うこの頃。千冬は最初は遠慮していたが餌付けにより、なついた。お気に入りの料理はきんぴらごぼうである。

お前は年寄りか。

一夏はまだベビーボーテーなのでミルクを飲ませてる。

昔にやつたことはあるが久しぶりで不安だったが問題なし。一夏は会社帰りのサラリーマン並みにガブ飲みしていた。

「千冬、は・・・離しそうにないな。足で取るか・・・ほつ

千冬にはシャツをがつしりとホールドされてるため、寝ながら足を伸ばしてテレビのリモコンを蹴り落として孫の手でファッショング。テレビをポチッとつけてお昼の定番の笑つていいかもを試聴。

司会のママさんとゲストのトークを聞きながら欠伸をする。田曜日なので平田元出たゲストのトークとCM中の裏話を爆笑しながら試聴試聴。

「・・・へへへ・・・お父さん・・・」

「ああっ！千冬の奴、さらばに涎をー？」

定番のいいかもーーーを言つた途端、千冬の顔が緩みまくり、涎が増幅。マイシャツに湖の染みが広がり始める。長袖のシャツを着ているため、二の腕から間接部分まで染みが広がり、冷たさに体がブルリと震える。

ぐいぐいと千冬の頭を押して退かせようとするがさらにも千冬は頬擦りをし、腕だけでなく胸部部分にも染みが浸透中。

「離せ千冬ー冷たいんだよ、コリコリ・・・ああっ！洗濯物干さなきやー！」

「でへへへ・・・」

仕方がない、千冬をおんぶして洗面所に向かい、洗濯機から俺の服や千冬、一夏の服を籠に入れてベランダに直行。ちなみに一人に買い与えた服は二桁を越えていた。正直、服なんかわからんから適当に買つた。

予算はユ クロにて買つたため、一万以内。

一夏はベビー らすで服やらガラガラやらオモチャを購入。計四万七千也。

他にも食材やら増えた家族により予算は倍増。我が家のが金が消えていきます。

駄菓子菓子ーー！

親父が残してくれた金をおやつさんがくれたので口座の金の桁が跳ね上がるーー！

・・・最初見たときは田を疑つたね。〇の桁が一つ上がつてたもん。

親父エーーーてめえどんだけ貯めてたんだよゴリラマ・・・。

「今日は天氣がいいからもう少し干すか。というかいい加減にシャツを変えたい・・・水で、涎が気持ち悪い・・・」

洗濯機から出した洗濯物を全て干すと背中にセリふじくべぱりつく千冬をどうしようか考え中。

いい案が浮かばないため、シャツにへばつつへ千冬」とシャツを脱いで新しいシャツを着る。

シャツを洗濯機に放り込もうと手を伸ばすと固まる。

千冬、俺の涎（生産元、千冬）おみれのシャツを抱き締めながら寝てやがった。

それを見て千冬の将来が心配になるこの頃。

アホーツ、アホーツ

というわけで夕食。寝ていた千冬も涎を垂らしながら起床。自分の現状に気付くとトマトのように赤くなつて暴れる。顎を殴られる。ちなみに昇拳より完璧なアッパーだった。

落ち着いた千冬に麦茶を出して夕食開始。

今日のメニューは寒いから一人で鍋をつくりました。

一夏はあーあー言いながら鍋に手を伸ばすがベビーにはまだ早い。  
ミルクを飲んでいたまえ。

「あーお父さん、それは私が育てた肉だ！」

「知らん。俺のシャツを涎まみれにしたくせにそれはないだろ。それに世の中は弱肉強食、食うのも食われるのも当たり前なのだよ千冬ー！」

「ー? し、知らなかつた・・・・さすがお父さん！ 勉強になるー！」

・・・ふつ。チョロいな・・・ガキなんぞこれにて封殺できるのさ。

大人気ないな俺。

そして将来、千冬を再教育するのに苦労するのはまた別の話。

夕食のシメにラーメンをどつぶり入れて完食。一人分だから腹はちよつといいくらい。

皿洗いをしている際、千冬はテレビでナーコレ？奇想天外写真集と日曜日特番の番組を見ていた。

おーとかあーとかうわーとか言つ千冬の後ろにはバタバタ手足を動かす一夏。大人しくしる。

皿洗いを終わらせるとテーブルに座つて緑茶を飲みながらホツと一息。

千冬はいまだにナニコレ？奇想天外写真集をガン見しながらみかんを食べていた。

もう完全に冬モードだな。千冬なだけに。

そんな冗談は置いとしてテレビを見る千冬をそのままに、一夏を連れて入浴することにした。

髪は少しづつ生えてるがまだクソ坊主のツルテカハゲ頭のように髪は薄かつた。

・・・親父の知り合いのクソ坊主、あの頭は凶器だ。日光を反射して紙を焼き尽くすなんてどんな人間だ。よくよく考えたら親父の知り合いにはまともな奴いない気がする・・・。

パシヤパシヤとシャツの長袖を捲り、ズボンも膝まで捲った状態で一夏の体を入念に洗う。

・・・まだチ 口は小さいな・・・俺は大口径マグナムだが。

「うー、あー、あー」

「ん？ もう出るのか・・・って眠たそうだな。頭がカツクンカツクン動いてるぞ一夏」

下らない事を考えてると一夏がうとうとし始めたため、冷めないよ

うにて寧に拭いてから服を着させてベーベッドにダイブイン。

一 夏は眠りについた！

脱力しながらテレビをいまだに見る千冬に風呂に入れと言った。なのに千冬は一緒に入る！と言つて聞かないため、仕方なく入浴。俺は口リコンではないため、欲情はしないが。

「あ、お父さん。今度の木曜日に授業参観があるんだが・・・大丈夫？」

「んー？暇だから行けるぞ。一夏なら姉さんに預けたら大丈夫だし・・・」

「そ、そう・・・やつた・・・」

湯船に一人で浸かりながら話すと予定ができた。

こういうのを話していると千冬が成長してると実感できる気がする。

こうして織斑家の日曜日は幕を閉じた。

千冬はいつものことく俺の布団に潜り込んで俺を抱き枕にしながら熟睡開始。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

今日も元気に遊びました。まる。

## 第一話、親父（後書き）

じめいくはまのせのと書きます。

この頃の千冬は捨てられてああなりましたが春樹がいるため改变。  
原作の千冬の正確には近いが少しあれ。みたいな感じに。

ちなみにヒロインはいません。今のところは。  
一夏ラヴァーズを応援する立場になりそひ。

## 第一話、親父（前書き）

なんかお気に入りがスゲーんだが・・・

感想でよくあつた体重の件ですがこれはいわゆるフラグです。

また詳しく書きますが出来たらそれには触れないでほしいです。

といつかアクセス一日で八万とかパネエな・・・

## 第一話、親父

本日は曇りのち晴れなり。

お天道様は雲に隠れ、洗濯物が乾きにくいい日である。実際にリビングのベランダに続く窓やらには洗濯物が干してあります。

そして本日は火曜日。千冬の授業参観から三週間過ぎた頃。我輩はパパさんなので家にて一夏と遊戯中。

「あー、あー」

「いてててー！髪を引っ張るなー夏ー！」

きやつきやつと笑うベビー・ボーテーのマイサンは俺の髪を引っ張つて遊んでおります。

髪を切るのはめんどくさいから簡単に整えて縛つてポニー・テールにしている。

そのため、一夏の一夏お気に入りのオモチャとなっていた。なぜだ。

そして娘は小学校にて頭が痛む勉強をしている。

前の木曜日に参加した授業参観の保護者面談では千冬はリーダーシップを發揮して皆を引っ張るから助かる。などと担任に言われた。俺が義理の父親になつたことを聞いてきたがはぐらかして保護者面談を済ませて千冬と手を繋いで帰宅。千冬は終始笑顔だった。

授業参観でも千冬は特に勉強がわからなって事はなかつたのでパパとしては一安心一安心。

「まむまむ」

「あああああー？一夏、俺の髪を食べるだなー！」

ボーッと一夏を組んだ脚の中にすっぽり埋めて平田の笑つていいかも見ていると一夏がポニーテの俺の髪を口へくわえてもむもむ食べていた。

離せよ！とすれば」なるため、何かないかと周りを見渡す。

司会のママさんとの声と観客の笑い声が聞こえるのを傍田にて、部屋を物色する事にした。

赤ちゃん用のしゃぶり器は一夏が気に入らないから駄目。オモチャ・

・却下。

・・・一夏つて・・・なんなん？

「あー！あー！」

「いだだだだだっ！」

どうするか考えていたら、一夏に思いつきり髪を引つ張られ、一夏を見た。

そしたら物欲しそうな目をしてジーッと見てくるため、理解。

ミルクか。こいつ、ミルクを要求してやがる。

「あー・・・わかったわかった。準備するから待てや」

「あー！あー！あいー！」

「・・・・・・・・・・・なんだこの胸のトキメキは・・・

両手を上げて喜びを表現する一夏を見て心がなぜかトキメいた。

・・・ああ・・・親父・・・刻が見えるよ・・・。

“いちかせんよう”と書かれた瓶に粉を入れていつものようにミルクを作ると手で少し温度を調整する。

出来上がったそれを一夏の前に置くと一夏はハイハイしながら瓶を持つてぐびぐび飲み始めた。

「あーいー！」

「…………一夏のバッくに銭湯の脱衣場が見えた……」

銭湯の脱衣場がもやもやと一夏の後ろに浮かぶと「はー」と牛乳瓶を飲むサラリーマン風の男が見えた。

・・・疲れてるのか俺は。今から寝た方がいいのか？

多少げんなりしながら一夏のミルクを作る合間に作った焼きそばを食べながらミルク瓶を持つ一夏を眺める。

「あー！あー！あいー！あーうー！」

「・・・少しは静かにできないのかおのれは。ジャングルのゴリラみたいだぞ」

なぜか一夏はチーターの「きげんようを見ながら発狂してミルク瓶を振り回していた。

・・・将来は親父似だな。おふくろの要素はないわ。  
秋枝はどうちらかといえばおふくろ似だけど堕落したしな。デキ婚なんかするからこうなるんだよバカシスター。

焼きそばを食い終えると一夏からミルク瓶を没収し、一緒に洗う。

「みやーうー！」

「いだだだだだつー痛いー痛いつて一夏ー！」

皿洗いをしていると一夏がいつの間にか台所に来て髪にじぶら下がって遊んでいた。

無論、後ろに引っ張られるから首が後ろに反れ、首が変な音を立てていた。

皿洗いを速攻で終わらせると猿よろしく髪にじぶら下がる一夏を抱き上げて首を回す。

バキバキ鳴った。

「あいー！」

「いたた・・・元気いいな一夏。パパは体が持ちそうにないぜ」

「あーうーー」

「・・・・・もつじじにでもなれ。親父、昔は苦労したんだな・・・  
・子育て大変だ」

一夏を抱き上げてソファーに座ると一夏は手を伸ばして鼻に突っ込んだり、口の中に指を入れたりと好き放題していた。  
なすがままにされていると疲れがどんどん貯まり始め、気のせいか  
げつそりしてきた。

・・・ホームヘルパーか姐さん呼ぼうかな？

ホームヘルパーはやめとこう。仮にも俺は四季組の組長の息子だから誰かが襲いそうだから却下。

姐さんを呼ぶにしても貞操を寄せさせと言われそうだから却下。

・・・・・・駄目だな。親父が生きてればなんとかなつたが一人で頑張るしかないな。

「前途多難だな・・・」

「うー」

膝に大人しく座る一夏とテレビの再放送ドラマを見ながらじつとうかと再び思考に入る。

取り敢えず一夏が幼稚園に入るまでは家にいるようにして、幼稚園に入ればおやつさんのツテで就職するつてのが今考えている事である。

小学校の担任にも仕事は何しますか?つて言われたから働かねば。

二ート生活前には工事現場、四季組の力チコミ応援、外国にてテロリスト狩りをしていたな。

俺がまだ四季組の一員として動いていた頃はこんな苦労はなかつたんだがな・・・親戚のガキつて言っても小学生くらいの奴を世話しただけだしな。一夏みたいな赤ん坊はじめてだ。

そして辛い。死ぬ。疲れる。簡単に引き取ると発言した俺を殴りたい。

・・・でもたまに見せる千冬のはにかんだ笑顔、一夏の喜ぶ姿を見ればそれは無くなつた。

ああ、俺は尊い命を育ててるんだな。と改めて実感させられた。

「一夏、ほれほれ

「あう！あー！あー！あー――！」

考えるのをやめ、自分のポーネテールの髪を猫じゅりじゅりのよつこ一元ひみつで振る。

一夏、絶賛反応中。猫のよつこ髪を掴もつと小さな手でキャッチング中。

しばらく遊んでいると千冬帰宅。

赤いランデセルを背負つてリビングにログイン。

「ただいまお父さん」

「お帰り千冬。今日はどうだった？」

「んー、特には無かつた。でも遠足があるからプリントをもらつてきた」

「・・・ん？遠足？こんな寒くなつてきた時期にか？

ポニー・テールの髪を一夏がギリギリ届くか届かないかの場所に垂ら

すと千冬からプリントをもらい、チョック。

一夏はあーあー言いながら髪に手を伸ばすが届かず。泣きそうになれば触らせてまた・・・といった感じをしながらプリントを読み終える。

「11月7日に遠足・・・よくよく見たら弁当持参って書いてあるな。

・・・あれ?俺が作るのか?

「・・・ん。わかったわ、取り敢えず手を洗つてうがいへー。冷蔵庫にチーズケーキがある」

「いただきますー。」

ダダダッと千冬が洗面所に向かつといまだに髪に手を伸ばす一夏を見てベビーベッドに収納、又は幽閉。泣きそうな一夏を心を鬼にしてチーズケーキを出してホットミルクを出しておく。

千冬が戻ると一皿散にチーズケーキにがぶつつき、完食。

「宿題あるならひとつだ。飯はまだかかるからな

「わかったー!」

「できたら櫻に入ってる一夏の相手もよひしへ。オムツは変えたか  
りやひなくてよー」

そつぱうと包丁でネギをとんとんと切っていく。

千冬はランドセルからプリントやノートを出して宿題を始めた。

「んー・・・味が薄いかな?味噌味噌・・・」

味噌汁の味を確認しながら味を整えて料理を作っていく。

刻んだネギを味噌汁に入れると一回、一回、三回とかき混ぜて火を止めてからテーブルをしつかり拭いて料理を並べる。

並べると千冬を呼ぼうとテレビ前に行くと千冬は一夏と遊んでいた。ポンポンと肩を叩いて千冬とテーブルに座ると茶碗に白米と味噌汁を入れて手を合わせる。

「「いただきます」」

千冬としつかりいただきますを言つとまづは豚のしょうが焼きを食べる。うん。うまい。

千冬を見るとパックパク食べており、嬉しそうにサラダにドレッシングをかけていた。

俺は空の茶碗に盛り盛りと白米を盛る二杯田を食す。

「取り敢えず弁当は作ろつ。何がいい?」

「 もう少し… 」

・ ・ ・ 一 回田だけじ ・ ・ 。

お前は年寄りか。

弁当の中身は決まつたな。

まづは千冬じきんぴりりむ。そして定番の玉子にタコさん  
ウインナー、後は子供らしくハンバーグでも入れとこへ。  
うーむ・・・親父も違うが姉さんも料理得意だからな・・・かなり  
鍛えられてるから何でも作れるが朝早く起きなきやな。

今までは小学校の給食で弁当いらなかつたから朝飯だけでよかつた  
が弁当となれば早起きしなくては。

四季組にいた時は普通に毎前まで爆睡してたんだがな・・・。

夕食完食。皿洗いを再びやる最中に千冬を風呂に入らせる。  
一夏はすでにデコームайнしており、ベーベツで寝てゐる。

「 ・・・遠足か・・・嫌な思い出しかない。千冬には楽しんでもら  
いたいものだな 」

そう考えると昔のあの記憶が蘇つて体がブルリと震えた。

そんなことはお構い無しに千冬は風呂から出で牛乳を飲んでいた。  
・・・これ、親父の遺伝だろ。親父、風呂から出たら牛乳飲むのが  
好きだったからな。

皿洗いを終えると脛に洗った分まで乾燥機に纏めて入れてスイッチ  
オン。明日の朝には終わってるはず。  
着替えを持って脱衣場に行き、入浴。

・・・ああ・・・脛の疲れが癒される・・・！

じつじて一日は終わるのであつた。

織斑春樹、三十一歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

一夏はヤンチャである。まる。

## 第一話、親父（後書き）

赤ん坊ってヤンチャだよね。昔もそりゃうだつて聞かされてたし。

一ート生活、パパ生活しますが一ートは卒業しそう。

だって“僕のお父さん”で一ートと書きたくないもん。

姐さんとおやつさんはヨリでもかなり有名な人になります。

おやつさんは・・・うん。姐さんは間接的、かな？

## 第三話、親父（前書き）

あわわわわ・・・！お気に入りが1000件な上にアクセスが十一万だと・・・！

息抜きで書いてるがメインになつそうな予感。

本日は晴天なり。

気温、湿度共に過ごしやすい日であり、外で活動するに適している。

少し肌寒いが、服を二枚着れば問題はないと思う。

本日は千冬の遠足である。

場所は誰が決めたのか  
動物園と水族館がある大規模な公園である

「あー、あー

「…………眠いんだよ一夏…………少しだけ寝させてくれよ」

「あー！あー！」

• • • • •

そして俺と一夏は家で留守番、といつもいつものせいかだらうた生活をしてくる。

・・・というか一夏痛い。ペシペシ叩くでない。

今日の朝は千冬の弁当作りに早起きしたんだから眠たいの。

リビングのソファーに寝転がる俺の上ではじめ一夏を眠たそつに

見ながら一夏のペシペシを止める。

そうすると一夏はあーあー言いながら髪を再び持つてまむまと口に入れて食べ始めた。

・・・一夏にとつて俺の髪は食い物なのか？前も俺の髪、食われて一夏の涎まみれだつたし。

「・・・なんだよまた電話かよ・・・はい」

『よつす春樹！』

「・・・・・・お客様がお掛けになつた電話番号は現在使われておりません。もう一度、電話番号をお確かめの上、掛け直してくださいクソッタレガ」

『なんで！？春樹、昔からなんでそんなに冷たいんだ！？』

「自分の胸に手を当ててよく考えてみろ。お前、いちいち俺を騒動に巻き込んでるだらづが」

『あー・・・それは・・・すまん。体质だわ』

「余計にタチ悪いわアホウ・・・で？何の用だ？パパさん生活でノックアウトした俺をまた口キ使つのか？ん？」

『・・・いまだに信じらんねえな・・・あの“羅刹”だなんて言われたお前が子育てなんてな・・・組長が知つたらどうなるんだろうな？』

「親父ならまづ一人を溺愛するだらうな。あらゆるシテで大トロやら高級な食い物を用意しまくりそうだ」

『…………言い得て妙だなそれ。組長ならやりそつだが……』

実際に俺は親父に遊園地行きたいって言つたら丸一日貸し切りにして他の客に多大な迷惑をかけたことがあるし。

他にもやることがあつたが秋枝は親父に可愛がられてたからな・・・親父、あのクソガキと駆け落ちした時の怒りつぶりは半端無かつた。

八つ当たりに密漁船とか海賊の船を素手で沈めてたしな。止めるのに苦労した。

『お。そうだ春樹、お前に伝えたいことがあつたんだつた』

「あ？」

『組長がお前と千冬ちゃん、一夏くんに会いたいだと。織斑家の濃い血を継いだ秋枝さんの子供にな』

「・・・ちなみに千冬と一夏はまだ子供だぞ?・組長は一人をじつするつむりなんだよ・・・」

四季組。日本最大の任侠に生きる日本古来から存在する武士の血を継ぐ組織と言わてる。

その組長は代々“織斑”が受け継ぎ、長男が組長となると決まりがある。

そして四季組に生まれ、織斑の姓に生まれた者は名前に四季が入っている。

俺は春樹で“春”。妹の秋枝は“秋”。千冬と一緒に“夏”と“夏”がある。

親父は冬樹ヒトツノキで“冬”を持っていた。おふくろは嫁いできたからないが。

織斑家直属はみな、ある特徴を持つて生まれている。

それは類いまれなる才能。

親父にしろ、俺にしろ、何かしらの人外の才能を持っている。

俺は親父には劣るがあらゆる面で才能を受け継いだ。

おかげで四季組からはバグキャラと呼ばれる人類最強の戦闘能力を持つている。

『ま、仕方がないじゃね? 組長、今の内に一人を抱え込もうとしてるようだし』

「……はあ……一夏はともかく、千冬には才能がある。おそらくは“人の上に立つ”才能がな」

『でもまあ……春樹には敵わんだろう。ワンパンチで戦車を破壊できるしな』

「親父なんか第一次世界大戦で戦艦を四隻も素手で沈めてるだろ。俺なんかじやガキみたいなもんだ」

『……………あのは。どつちもどつちだからな?』

なんで織斑家にはバグキャラしかいないんだ……と電話の向こうから聞こえてくるとブチッと切る。

いつの間にか一夏は寝ているため、久しぶりにテレビでゲームをプレイ。

千冬と一夏が養子になつてから家事やらで忙しかったから久しぶりだな。本当に。

「…………なぜだ。中途半端にやる気が出ないぞ」

話は戻して四季組についてを少し話そつ。

親父で四季組一代目の組長であり、歴代最強の組長でもある。二人しかいないが。

現在の組長は代理組長で俺は組長と呼んでいる。

四季組二代目の親父の息子である俺は組長にならねばならないのだが、親父の遺言で組長にはならなくともいいと言われている。

親父は小さい頃に自由に生きられたからせめて息子だけは。と自由してくれたのである。

これだけを聞けば美談だが昔の親父を思えば感謝する気になれない。

「うー」

「やめやめ。一夏と寝とこ」

小学生の時の遠足で俺は山に行つたのだが、運の悪いことに山で熊に遭遇した。

小学生の時からずば抜けた運動神経で熊を撃退したが全治二ヶ月の怪我をし、入院することになった。

治つたのも束の間、親父は熊に負けるとは何事だ！と叫び、俺を最強の熊であるグリズリーとサシで戦わせた経歴がある。

なんとか生き残つたのだが・・・全治半年の重症の怪我を負い、入院リターン。

死ぬかと思った。小学一年生である当時の俺はグリズリーと戦うのは恐怖以外の何物でもなかつた。

退院すると真っ先に親父に殴りかかつたが見事に返り討ち。再び入院して一躍ナースさん達の人気者になつた事がある。

退院 親父に殴りかかる 返り討ち 入院 ナースさん達のオモチヤになる 退院と永遠にループしてたのが小学校の思い出である。

碌なもんじゃねえな。

中学に上がつてからは親父に勝つために知り合いの道場で鍛えながら親父に挑んだが全戦全敗。

以前は骨を完膚なきまでに叩き折られたが中学一年生から折れなくなってきた。

俺は知らないがボロボロの姿が男らしさと中学のアイドル的な存在になつてたらしい。

中学二年生より道場の剣術を習い始める。

高校に上ると親父と互角に渡り合つていたが、親父は今まで手加減していたため、小学校の無限ループ再来。貞操をナースさんに狙われる毎日を過ごした。

親父と喧嘩しながらも勉強は怠らずにクラストップ10に入るようにはした。

道場で剣術を習いながら部活の最終兵器として活躍。報酬はあんパン七個である。

高校を卒業すると大学には行かずに親父を叩きのめすために四季組の若頭となつた。

当時は日本のヤクザや外国のマフィア相手に暴れに暴れ、詐欺をしてる組織も潰して回つた。

銃弾の雨すら避ける俺を見て四季組はバグキャラ、“最後の侍”だ<sup>ラストサムライ</sup>なんて呼ばれ始めたのもこの頃である。

・・・結局、親父が六十七歳で亡くなるまで俺は勝つことができなかつた。

秋枝が駆け落ちした心労で亡くなり、親父は四季組の全員に見送られながら逝つた・・・が。

絶対に親父、天国にしろ地獄にしろ、神や閻魔相手に暴れているイメージがあるからそれほど悲しんではないけど。

「・・・親父、か・・・俺も親父なんだけどなあ・・・」

眠っている一夏を見ながらそう思つと親父の話を聞かせよつか迷つた。

親父の話は普通の人には聞かせられないからな・・・と思つ。

俺が小さい頃から親父のチートっぷりを誰よりも知つてゐるからな。一夏や千冬に聞かせたら四季組の妙なテンションに染まりそうで怖い。

孫の顔が見たい！

「ぬおつー。」

いつの間にか一夏と熟睡しており、死んだはずの親父の声が聞こえると驚いて寝ていたソファーから飛び起きた。

「いたい・・・！」

「ん？ 帰つてたのか千冬・・・つていま何時だ？」

下を見ると千冬が額を押さえて涙田になつており、ジロコと見えた。

そして時間を確認すると午後五時。どうやら睡前から爆睡してたようだ。

千冬は帰ってきたばかりのようで寝ていた俺を馬乗りになつて覗いてみるとひっくり返り、痛みに堪えてるらしい。

ちなみに一夏は千冬がベビーベッドに乗せており、腹の上から消えていた。

「お父さん、もう夕方だけ寝ていいの？ 一夏もずっとお父さんの腹の上で寝ていたんだけど・・・」

「んあー、悪い。朝に早起しちゃうついい、な・・・」

「うー。一夏、お腹が空いて泣いていたんだぞ？ 気を付けてよお父さん」

あー、それは悪い事をしたな・・・一夏には少し高めのミルクをあげようか。

千冬は一夏の頭を撫でながら言つが反省しないとな。あまり空腹になると成長に悪いって親父が言つてたしな。

拗ねた感じの千冬の要望、“さあーーっと抱きしめて？”により、背骨が折れる勢いで抱きしめる。

まあ、軽く・・・だが。人類最強の俺が本気を出したらスマッシュになるのは見えているから。

「えっとねー今日の遠足は・・・」

「まつまつ」

抱きしめた後、千冬は楽しそうに遠足について語り出す。

動物園でライオンとじゃれた、「リリ」と握手した、水族館でペンギンを触った、イルカに餌をあげた。と話した。

・・・動物園のくだりはシシコミをするべきなのか？

「でねー。ゆうなちゃんが弁当を交換しようってやつでねー。美味しいって言つてくれた！」

「それは嬉しいな」

「お父さん、料理上手だからねー！」

「・・・今日の晩飯は奮発して刺身にするか。ホタテを主にして」

「本當ー?」

千冬、小学生から刺身好きで特にホタテが好物な小学生らしからぬ小学生である。

誉められたのが嬉しいので奮発。まだ時間はあるので千冬と一緒に買い物に行こう。

ジャコでいいか。

そうと決まれば金だ金。財布には諭吉が数十人いるから余裕で買い物はできるだろ?。

部屋着であるジーパンに長袖のシャツの上にパークーを羽織つてから一夏のベビーカーを玄関から出す。

千冬と一夏と外に出ると鍵を閉め、ベビーカーに一夏を入れて寒くないよう毛布をかけた。

「なんかいる？ 好きなもの一つくらい買ってやるぞ」

「・・・むへ。 ありそりでないよお父さん」

「考えとけ。 ジャ行きますか」

「おへー！」

「あいへー！」

ジャコに行き、晩飯の買い物をして千冬にホタテを食わせた。  
ショッピング中は逆ナンが多かつたので疲れた。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

改めて親父がどれだけ規格外かを思い知られた日だった。まる。

## 第三話、親父（後書き）

織斑家のぐだりはオリジナルな設定です。あんまりシッコリしないでもらえると嬉しいです。

親父はこの世界の最強のチートです。また武勇伝書きたい。

## 第四話、親父（前書き）

時間が少し飛びます。

天災と妹、早く出したいな～。

## 第四話、親父

本日は晴天なり。

寒かつた冬も終わり、春、夏と季節は変わって暑い夏から涼しくなつてきたこの頃。

我が織斑家では千冬と一緒に夏で楽しく過ごしております。

なんとなんと！今日は記念すべき日なのだ！

我が息子、一夏の一歳の誕生日であるのだ！

「お父さん、これはここでいい？」

「いいぞ」

「あつーー！」

といつわけで今日は家のリビングを誕生日仕様にして一夏を祝つことにした。

あれから一年近く、千冬と一緒に暮らしが始めたため、一夏はハイハイから立ち上がることができるようになっていた。

去年の冬には千冬の誕生日があり、その時は一夏と同様、盛大に祝つた。

ちなみにだが千冬は十一月七日、一夏は九月二十七日、俺は九月十五日が誕生日である。

織斑家では生まれた季節によって名前を決めるのだが、俺は異端で夏に生まれたのに“春”を与えられた。

親父曰く、わしの親父と雰囲気が似てたから。らしい。

まあ、つまりは俺の爺ちゃん、初代四季組組長の事である。

「それよつお父さん？一夏のプレゼントつてあるの？」

「ん」

「？・・・まさか、あれ・・・？」

一夏にとんがり帽子を被せながらあるものを指差すとそこには大量のラッピングされた箱が積み重なっていた。

千冬はそれを見て顔をひきつらせ、指を指していた。

・・・まあ、これは四季組からのプレゼントなんだが。

組長代理や昔に親父にお世話になった奴等、おやつさん、姐さん、四季組の幹部メンバーが一夏に贈つてきたのだ。

若様にプレゼントを…ってな。

千冬の時もあいつら、一夏と回じくらこのプレゼントを贈つてきたからな。

千冬が唖然としていたから予想なんかつかなかつたんだろつな。

取り敢えず中身を確認したら出るわ出るわでさすがの俺も呆れ果てた。

ドスやら日本酒せりチャカ（拳銃）せりと子供たるまじかアレントがあった。

それよりは四季組で體に返して體つた奴等を血祭りしたが。

「……お父さん、また変なの入ってないよね？」

「…………不安す、あらわす」

プレゼントの中には髪飾りや櫛など、千冬に似合つものがあつたが  
どれも高級品のため、少しあれである。他にも洋服や着物を贈つてきたがそれは大事に仕舞つてある。

準備を終え、プレゼントの山を千冬と眺めていると不安のせいいか、  
プレゼントから真っ黒なオーラが噴き出している気がする。

「…………お父さん、やつしよ」

「…………千冬に譲る

「…………」

手をプレゼントに向けながら俺達は見つめ合つて固まる。

「…………じやん、けんー」「…………」

「ほんー。」

「ほおおんー。」

俺、パー。

千冬、チョキ。

勝者、千冬。

「・・・・・神は残酷だ・・・」

「やつた！去年みたいな事はしなくて済む！」

「・・・変なものを見つけたらもれなく地獄への片道切符を贈つてやる。オプションで本気のグーパンだ」

喜ぶ千冬に俺はげんなりしながらプレゼントの山の中を調べる。  
・・・うん。去年の千冬のプレゼントの中にパンダの子供とかいたのは驚いたな。

一時、ワシントン条約でショッピカレそうになつたし。

四季組は日本の警察には不可侵の組織だが国際組織相手ではじつは元ひぐらし。  
國を巻き込んだ陰謀をしたテロリストとかマフィアを潰した借りはあるがワシントン条約じゃあ・・・ねえ？

国を巻き込んだ陰謀をしたテロリストとかマフィアを潰した借りはあるがワシントン条約じゃあ・・・ねえ？

「…………案外マトモだな」

「あれ?」これっておしゃぶり?

「他にはオムツやらなんやらベビーグッズが多いな」

プレゼントを開けに開けるとベビーグッズしか出でこない。今年はヤバいものはないのか?と思しながらさりにプレゼントを確認していく。

七割方終わると合計120ほどの中のプレゼントが開けられた。  
その中には浴衣やらなんやらと着るものや将来に使いそうなものが  
わんわんかってきた。

去年みたいなドスやら刀とかはなくて安心・・・したところにとんでもないものが出てた。

「金ぴか・・・！」

やたらと重い箱を開けると金塊がぎつしりと詰まっていた。  
差出人の名前は・・・あの変態ロリコン幹部かつ!!

「返せや。いろんなのもらつても役に立たん。贈り返せ贈り返せ」

「・・・はあ・・・重い・・・」

千冬は両手で金塊のひとつを持つと嘆息しながら元に戻した。取り敢えずその金塊の山はきつちり返すことにした。お詫びに地獄への片道切符付きで。

んー、祝ってくれるのは嬉しいがむづやめさせよう。某大晦日の例のあれに出る山を出しを開けるみたいにアキアキ感はござる。

「おとうへ、しあわせー。」

「ん?」

下に軽い衝撃があり、見てみると一夏が小さな体で足に抱きついていた。

上目遣いで俺を見てため、抱き上げて一夏と皿を合わせる。

「どうした一夏」

「あ、なか・・・しゅいたー!」

「・・・さすがは親父の孫・・・成長が早すぎるな」

この一年で一夏はかなり成長し、舌つ足らずだが少しほ喋れる。

第一声は“おとうじゅ”だから俺は舞い上がり、千冬は地味に落ち込んでいた。

びつやら密かにお姉ちゃんつて呼ばれるのを楽しみにしてたらしく。まあ、今は“ねえちゅ”で千冬を呼んでいるけどな。千冬のやつ、俺にかなり自慢してた。

今日は運がよく、日曜日。なので千冬と一緒に遊びながら一夏の誕生日の準備をした。ミルクを飲んでいた一夏は離乳食を食べるようになり、もつ少しで三人でケーキを食べられそうでパパは樂しみです。

「・・・よし。千冬、そろそろ食べようか。時間もいい頃だしな」

「わかったー私はお皿を出すー。」

「みやーーー。」

「一夏も楽しみか?でもまだケーキは食べさせられないからな・・・来年辺りには大丈夫だから。な?」

「みやーーー。」

ズルいぞ!と言いたいのか、一夏は手を上げて叫ぶ。

一夏はまだ“おとうじゅ”“ねえちゅ”“おなかすいた”しか喋ることができない。

余談だが、おなかすいたは千冬を真似したようで千冬はかなり気ま

ずをひであつた。

それは置いといて。ヤバいので贈り返すプレゼントと保存するプレゼント、今から使う予定のプレゼントと分けると邪魔にならない場所に置く。

それから一夏をベビー用の椅子に座らせると千冬もまた、椅子に座る。

「一夏はこれで千冬はこれ。後は……これでいいか」

「うわ・・・またすぐこな・・・」

「あいこー！」

「当たり前。息子を祝うんだから遠慮はせんぞ俺は」

「でも一夏は食べられないよね？」

「・・・・・・」

千冬のメスのようすに鋭いツツミヨリによつ、俺沈黙。

それを見た千冬はハッとして慰めるようにわたわだと手を振る。  
・・・確かにそうだけどさ・・・・祝うくらいいだろ？・息子のはじめての誕生日なんだからさ・・・・。

「・・・で。お父さん？また食べないの？」

「…………いや。俺は食べなくても大丈夫なんだが……」

「駄目！しつかり食べてよお父さん！」

そんなこんなで一夏のバースデーケーキの火を千冬が代わりに消すと一人で料理を食べ始める。

しかし、千冬のジト目により空気が凍るのを感じた。

ビシッと俺を指差す千冬は誕生日用の手羽先をぐいぐいと押し付けてくる。

正直、俺は食べるは好きじゃないんだがな……。

一日に一回の食事で持つし、一ート生活では丸一週間も食べなかつたことがあった。

そのせいで知り合いや四季組のみんなに心配されたが死なないからいいだろ？って思つ。

だが娘となつた千冬により、食事は必ず三食食べるようになつた。おかげで58？だった体重が67？まで増えてしまつたし……。

「…………めんどくさいな……食わなくとも死なないから俺は

「駄目！」

昔に親父にグリズリーとサシで戦わせた時のためにジャングルやら雪山に放り出されたせいでサバイバル技術がプロ以上になり、食事も取らなくていいよつになつた経歴がある。

そのせいか、親父が死んで一ート生活をしていても餓死はしなかつたのだ。

なのに戦闘力は変わらずといったまさにバグキャラなのである。俺は。

全盛期時には身長は変わらないが体重は65?と痩せ体型ではあるが体は引き締まる。といった人外の肉体を持っていたのである。

これは親父の遺伝であり、なぜかを一度聞いてみると。

「氣合いだ」

と理論完全無視なお言葉をいただいた。  
取り敢えず、見た目とは反して俺の肉体はスゴい。と思えばよし。

・・・誰に話してんんだ俺?

「あつー。」

「も、もう食えないー!食えないからー。」

「まじめお父さん。手羽先はまだまだあるよ?」

「千冬・・・謀ったなー?」

「ううん。お父さんの分も食べて太つたからって……オコッテルワケジヤナイヨ?」

・・・すまん千冬。今度から量を減らすわ。

だからその手羽先を置け!一夏はポテトを鼻に入れるな!

そんな風にして一夏の誕生日は楽しく過ごせた。

一夏、誕生日おめでと!。これからまた元気になくな。

織斑春樹、三十三歳。

織斑千冬、十歳。

織斑一夏、二歳。

取り敢えず次の日に金塊贈つた馬鹿を血祭りにした。まる。

## 第四話、親父（後書き）

とこうわけで、いざります。春樹は食べなかつたからこそ、瘦せていたわけです。

とこうか調べてみたんだが、184?で70~80?でデブの領域に入るらしいです。

普通は67。低くても64らしいです。

医者によつて意見が違つみみたいだけど、親父はそつひつてた。

## 第五話、親父（前書き）

一ート脱退宣言。

アクセス、二十五万越えました。ISすげーと改めて思った。

原作まで何話かかるか・・・。

後書きまで続く。あんまり信じないでね？

## 第五話、親父

本日は曇りのち雨なり。

空は灰色に染まり、雨はポツポツと降つてゐるが俺はとある場所に来ている。

ちなみに今日は平日。千冬は学校、一夏は幼稚園に入つて預けている。

「採用」

「はやいなおいつ！」

とある場所、それは・・・

「じゃあ明日からお願ひしますね。制服とかはこちらで用意しますから。あ、休日は水曜日と土曜日に日曜日でいいですか？」

「ええ、まあ・・・」

「大変ですねえ・・・二十歳で子供一人を・・・」

「ちょっとストップ。・・・年齢、書いてますけど・・・読みました？」

「せつせつせつせーもむらんじやありませんかー」十・・・え? 二  
十・・・四歳・・・?え、まさか嘘ですよね?」

「なぜ嘘と呼ばれなければならぬんだ……嘘言つても仕方ないでしょ?」

「・・・ええええええええええつー?」

静かなオフィスにて面接官の女性の甲高い声が響き渡った。

つまり、俺は現在・・・とある会社の面接に来ております。仕事内容は清掃。姉さんのツテで探してもうつて今日、こいつして来たわけである。

「じゃあ今の通りにお願いします・・・とにかく今日の夜はお暇ですか?よかつたら私とホテルに行きません?」

「死ね」

会社の正社員だから、部長だからと遠慮はしない。

食事ではなくやううと面接官の女性部長に笑顔で“死ね”と言つた。

・・・なのに何かに悶える姿はまづきつい言つて気持ち悪い。  
説明は受けて大体は理解したので清掃員用の備品庫に向かう」とこ  
した。取り敢えずこの部長とは関わりたくない。

『えられた仕事はビルの清掃やトイレの清掃に備品補充。

「まあいいか

めんどくさいがやううか。姐さんがわざわざ紹介してくれた仕事だ  
し。

仕事は明日からなので一夏を迎えて行くか。

親父、移動。幼稚園到着

「あ、おとうやんー」

「よひ」

「い、こんにちは織斑さんー」

「どうも先生。一夏を預かってくれてありがとうございます」

「は、はう・・・」

一夏がいる幼稚園に着くと真っ先に一夏は俺を見つけ、抱きついてきた。

そこに一夏を担当する先生が挨拶をしてきたので返す。

するとなぜか女性の先生は顔を赤くして俯いてしまった。

「あれ？せんせー、かおあかいよ？」

「な、なんでもないわよ一夏君ー…？織斑さん、これー伝達用のプリントです！」

「はあ・・・どいつも・・・」

「で、では私はこれにて失礼しましゅー」

わたわたと先生はプリントを俺に渡すと建物の中に走っていった。それを俺と一夏は呆然と見ていると顔を合わせて同時に首を傾げた。  
・・・なんなんだ？

「・・・帰らうか」

「うんー」

帰る」とこした。

帰る途中で一夏と幼稚園の　君は絵が上手とか、　ちゃんはかわいいとか、　先生がよく俺の事を聞いてきたと話してくれた。  
なんで先生方は俺の事を聞いたんだ？なんかしたか俺は？

「でねー、ほつわちやんがおれにたま『』やをくれたんだよー。」

「ほー、ほつわちやんねえ・・・可愛いのか?」

「うふー、おとこひまにかじかわいこよほつわちやんはー。」

れいわから“ほつわちやん”の事を話す一夏は楽しそうだった。  
好きなのか?と聞いたら好きって何?と予想外の返答がされた。  
しまった・・・一夏はまだ幼稚園だからそういう感情は理解できな  
いのか・・・。

まあ、ゆっくりと教えていくか。

「で? そのほつわちやんの上の名前はわかるか?」

「ん、ん、ん~・・・し、しの・・・しの・・・しののぬ?」

「東雲? また変わった名前だな」

織斑も大概だが。

それより東雲と似たあの姓を聞くとなんか嫌なんだよな。  
おやつさんもその姓名を名乗ってるが息子が・・・なあ?

何かと俺がおやつさんの道場に入った頃から田の敵にされて毛嫌い

されたし。

まあ・・・返り討ちにして全戦全勝だけじゃね。そのせいでさうに田の敵にされることがあるんだが・・・。

「・・・まあいいや。ほしきちやんと仲良くな?」

「わかった!」

話を切り上げて一夏と手を繋ぎながらマンションのエレベーターに乗る。

話しながら歩いているとすぐに着くもんだな。今まで、一人がいな

い間は家にいることが多いし、こんな風に話すこともなかった。

新しい日常、千冬と一夏と暮らす人生は新鮮で楽しいものだ。

二人はこんな俺を“父”と呼んでくれるのが嬉しく思つ。

「おとうさん、ちふゅねえはまだかな?」

「もう帰つてるだろ。時間も四時回つてるしな・・・で?今日は何が食べたい?」「

「ハンバーグ!」

「よしあた」

一夏は喋れるようになると“ねえひや”から“ちふゅねえ”と呼ぶ

よつになつた。

千冬も満更ではなく、千冬姉と呼ばれるのは嬉しいみたいだ。

まあ・・・それと同時に千冬も俺をお父さんから父さんと変えたから少し寂しい。

「ただいまー！」

「あ。おかえり一夏、父さん」

「ただいま。早かつたな」

「うん。今日は特に用事も無かったから・・・でも明日は委員会があるから遅くなりそうだよ」

「五時くらいとか？」

「それくらいかな？もつちよつと早い気もするけど

玄関まで迎えに来た千冬の頭を撫でながらリビングに入ると一夏は真っ先に冷蔵庫を開けてケーキをかぶりついた。

あの馬鹿め・・・手を洗つてから食えと言つたのにそのまま食べやがつて！

取り敢えずケーキを食べる一夏に拳骨をお見舞いする。

頭を押さえて踞る一夏を洗面所に首根っこを掴んで猫のように連れていき、手を洗わせた。

「いたい・・・いたいよおといひかさ・・・・・」

「黙れ。帰つてきたら手を洗えと言つただろうが」

「へへーりふじんだよーーりふゆねえもそいつおもうでしょーー。」

「・・・残念ながら一夏が悪い。父さんは毎日手を洗つようになつていただろう?」

手を洗わせるとテーブルの椅子にそれぞれ座ると一夏は半泣きでケーキを食べ、千冬は学校からもらったプリントをズズイツと渡してきた。

えーっと・・・懇談会?またやるのか?

「それで父さん、面接はどうだったの?」

「開始五分で採用された」

「・・・なんで?」

「俺に聞くな」

「?」

千冬はマジかよ?みたいな顔をし、一夏はフォークを口にくわえた

まま首を傾げていた。

まあそりなるわな。開始五分で採用なんて普通は不採用だと思つよな。

なんでだらうな？まさかとは思つが顔で選んだ訳じゃないよな？あの女性部長さんは。

俺の顔、童顔以外に特徴ないはずだぞ？

「・・・いやいや。カッコいい顔してゐるのにそれはないぞ」「なんか言つたか？」

「なんでも。それより父さん？今度の日曜日に用事があるんじゃなかつた？」

「ん？実家に顔出す予定だがキャンセルしたからないぞ」

「・・・そ、それなら友達の家に遊びに行つていいかな？」

「いいぞ。友達は大事にしないとな・・・誰の家に行くんだ？」

「束つて同じクラスの女の子なんだけど」

「ああ・・・千冬がよく話していた束ちゃんか・・・」

束ちゃんとは千冬が新しくできた友達らしい。

小学校なのに頭がいいけど孤立していたから話し掛けて友達になつたとは千冬から聞いている。

・・・お父さん、優しい子に育つて嬉しい。

友達は多い千冬だが、あんな風に楽しそうに話すのは初めてのため、仲良くなはしてほしいものだ。

千冬の才能の影響か、友達はたくさんできるからなあ・・・特に下の子は千冬を“お姉さま”とか呼んでるのを先生から聞いた事がある。

「気を付けてな。家に入ったらお邪魔しますはきちらと言へよ

「わかつてゐる」

「ねどりつてこーおれもせりつけられやんとあそびたい!」

「・・・んー、また聞いておくよ

担当の先生に聞けば教えてくれるだろ。

しばらく話すと俺は晩飯の用意をする事にした。

一夏も手伝いをしているため、Hプロンをつけて一緒に料理中。千冬はリビングのソファーに座つてテレビを見ている。

だつて・・・千冬が料理をすると暗黒物質<sup>ダークマター</sup>ができるもの。

最初は頑張つて教えたのだが、きちんと材料とかも調理も完璧なのにできるのは暗黒物質。

こんなに今まで親父に似なくていいのに・・・親父も料理や家事は

壊滅的だつたからな・・・。

反対におふくろは料理や家事は完璧であり、俺はそれを遺伝している。

「ちふゆねえ、せなかからなにかでてる」

「・・・見るな一夏。俺でも見ていて辛い」

リビングでテレビを見る千冬の背中には年に似合わない哀愁感が漂っていた。

・・・親父より秋枝の遺伝かもしけんな。あいつも家事は壊滅的だつたし。

才能チートといい、いろんなどこで親父似だな。千冬は。一夏はどちりかと言うとおふくろ似だな。料理とか瞬く間に吸収するから。

取り敢えず千冬のハンバーグにはチーズを入れておこひ。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

チーズ入りハンバーグを食つた千冬は嬉しそうだった。まる。明日から仕事も頑張る。まる。



## 第五話、親父（後書き）

おわかりでしょうか？原作では千冬と朧は高校生の時に出会いましてが少し早めます。

あと篇も。一夏に恋をするのでしょー！

おまけ

「は、はははううう・・・／＼＼＼

今日、織斑一夏君の父親である織斑春樹さんと話した。  
はじめて会つたのは一夏君が入園した次の日。担当として会つた時にビビビッ！と来ました！

黒く女性も羨むような美しい長髪、見据えるは宝石のような赤い瞳。  
一枚目より二枚目と言えそうなルックス・・・。

「や、今日も織斑さん……か、カッコよかつたな……／＼／＼

プリントを渡してお礼を言う時の笑顔……ダメ！顔が赤くなっち  
やつー。

「……またか。美弥先生、またなのか」

「織斑君との父親らしいよ。シングルファーザーらしい……  
私も狙つてるけどね」

「ああ、わかるわかる。あんなカッコいい人、滅多に見ないもんね」

「せうせうー家事もできるみたいよー！」んな優良物件は百年に一度  
の逸材よー。」

他の先生方が何か言つていたが私は織斑さんとデート（妄想）して  
いるので聞こえなかつた。

は、はわわわ……そんな、ここの……。

わやー！織斑やーん！

「おい。誰か美弥先生止めろ。気持ち悪いぞ」

えへへ……いつか織斑さんを“あなた”と呼べる日が来るんでし  
ょうか……。

「いえ！自分でその未来を勝ち取ります！」

「美弥先生が暴走した……誰か止めろーー！」

「つあああああっー？書きかけの報告書があああああっーー！」

待つていてください織斑さん！私は貴女をゲットしてみせます！  
私・・・山田美弥が！！

「ふえっくーー！」

「あれ？ねどいつわざとかぜ？」

「かな？風邪薬飲んど！」

なんて事があつたりなかつたり（笑）。

あくまでもフィクションなので氣になさらず www

## 第六話、親父（前書き）

ちよつと早いナビ。

風邪が治らん。しばらく執筆できないので妄想しながらお待ちを。

## 第六話、親父

本日は晴天なり。

少し雲が出てきているが雨は降らないよつなので洗濯物を干している。

今日は千冬に言われ、滅多に出ない外に一夏と外出している。

俺がとある会社の清掃員として働き始めて三週間ちょっと。  
千冬は小学五年生、一夏は幼稚園に馴染み始めている。  
まあ、一夏は月、火、木、金しか幼稚園には行かないが。

「おとうさん、ちふゆねえはいつかえてくるかな？」

「んー、もう少しじゃないか？ 時間的にもそろそろ学校は終わる頃  
だし」

俺は左手、一夏は小さな右手で手を繋いで歩きながら右手でポケットから携帯を取り出して時間を確認。

現在は午後三時半である。

「いへーあとなにかたべたいー！」

「・・・迎えに行くか？」

「 な、ひ、ロ、ロ、シ、ケ、か、な、ん、か、を、食、べ、歩、あ、す、る、か。場、所、は、・、・、商、店、街、の、お、つ、り、や、ん、か、ら、も、り、ね、」

「 ハロ、シ、ケ、ー、？ お、れ、だ、い、す、き、な、ん、だ、！ 」

「 も、う、ひ、じ、や、あ、行、こ、ひ、か。千、冬、の、分、も、買、つ、て、な、」

「 う、さ、ー、」

一 夏は二歳。大体は喋れるよつになり、歩くことも出来るよつになつたのでこゝしてたまに散歩をするのが新しい日常になつた。

散歩の途中にて食べ歩きをするのが一夏の楽しみになつてたつする。

・ 千冬に言われてから外に出るよつにしたつまたもや体重が増えた。原因は食べ歩き。

よくわからんが一般より少し重い体重になつてしまつ、絞るのも苦労した。

昔から親父に体重はなるべく減らしておけ。と非人道極まりない発言と肉体的用語による発言によつ、染み付いた習慣になりつつあつた。

千冬のおかげでもうそれは無くなつたがまだ断食の習慣は直つそうにはない。

「 お、と、う、れ、ス、？ あ、こ、て、る、の、？ 」

「 あ、あ、す、ま、ん。聞、い、て、な、か、つ、た、」

「もう！ちゃんとときいてよ！おれ、ショウラーニはちふねえやおと  
うさんをまもれるヒーローになりたいんだよ！」

「ん。なれるんじゃないか？・・・親父の遺伝なら間違いなくチー  
トな戦闘力ありそつだし（ボソッ」

実際に俺は一夏の年、いや、五歳から才能の片鱗が現れたことがある。

本格的にそれが目覚め始めたのは遠足の熊戦。そこから急激に伸びて今じゃ、親父に次ぐ人類最強なわけだ。

一夏はふんふんと怒つて『どうだがコロッケを買いたい』えて機嫌を直した。

「じゅあ行こうか」

「おーー！」

所変わつて千冬が通う小学校の校門。一夏と手を繋ぎながら待機。

「・・・ちふゅねえ、まだかな？」

「もつ終わつてゐはづだからもつ少し待てば来ると思つよ」

もむもむとコロッケを食いながら千冬を待つ親父と息子。視線がバシバシ感じます。

「ねえ、あの入力ツコよくない?」ひそひそ

「うん。モデルさんみたいだね」ひそひそ

「結婚するならああいう人がいいね」ひそひそ

「わたくし、の方に求婚しますわ!田中!の方の経歴を調べなさい!」

「かしこまりましたお嬢様!」

「… 会話は一人には聞こえなかつたが親父は間違いなく最後のお嬢様に狙われるだう。」

「… あーちふゅねえだー。」

「ん？」

時間にして七分待つていると校舎の玄関から千冬と変わった髪色の少女が出てきた。

「… 千冬、なんか嫌そうな顔してんや？ どうしたんだ？」

「… おとうさん、あいつだれ？」

「… なんだあのガキは…」

千冬と少女は足早に玄関から出で、机の上に歩いてくるが後ろから一矢二矢とここからでもはつきりとわかる気持ち悪い笑いをしたガキが追いかけていた。

「… 取り敢えず殺すか。」

「おー千冬ー。」

「… 父さん？ ビーフレーズ… 一夏まで」

「どうしたんだ千冬？」「こいつ、お前の知り合いか？」

「あ、？ガキ、年上には敬意を払え。親から教わらなかつたのか？」

千冬を呼ぶとランドセルを持ち直して少女と走つてくると後ろからまたもやガキが追い掛け、俺を指差しながら千冬になれなれしく話していた。

千冬も少女も嫌そうにしているのがわからないのかこのガキは？

一夏を肩車すると千冬の手を取つてそこから離れるように歩き出す。千冬は少女の手を取つて歩くがガキが回り込んで邪魔をしてきた。

「おじオッサン、俺の千冬になれなれしくしてんじゃねえよ。てめえ、誰だ？」「

「・・・喧嘩売つてんのかクソガキ。年上には、敬意を、払えと、親から、教わらなかつたのか？あんまりしつことお前の親に話すぞ。うちの千冬をつけ回してるつてな」

「はつ！嫁と話していくて何が悪いんだオッサン？俺は選ばれた者なんだから何をしようつと勝手だらうが」

なんなんだこのクソガキは・・・いいよな？殺してもいいよな？

親もろとも、ぶつ殺していいよな？

ブルブルと震える手を見た千冬が慌てて止めるが止めるな。殴り殺してくれる。

「おじオッサン。その手はなんだ？俺を殴つていいのか？俺は“如月”一ポレーション”の御曹司だぞ！！」

「…………如月”一ポレーション？…………あいつの息子か……」

目の前でドヤ顔をしてるクソガキを無視して顔を改めて見てみる。  
・・・似てない。金髪に黒と赤のオッドアイだなんてまるで似てない。養子を引き取ったのか？

如月”一ポレーションとは日本有数の大企業のひとつではあるが、  
残念ながら四季組の下にある会社である。  
そこの社長とは親父を通して知り合いのため、顔は知っている。

・・・さて。如月”一ポレーションの御曹司と言っていたが四季組  
組長息子である俺の方が立場は上。どうしてくれようか・・・。

「父さん、もうここから行け。こんな奴を相手にしても時間の無駄だよ」

「……同感だな」

いまだにドヤ顔をするクソガキを押し退けて一夏、千冬、少女は学校から離れる。

「おいオッサン！俺の千冬に手を出すなと・・・」

「ああ、クソガキ。自己紹介がまだだつたな・・・」

ガシツとクソガキの頭を掴むと顔を覗いて低い声で齧すよつに言つ。

「織斑春樹。千冬の父親だ・・・次に千冬に近付いたら・・・わかつてゐるな？」

「なつ・・・！？千冬に父親はいないはず・・・ぶべつー？」

クソガキを離すと尻餅をつく。

その間に三人を連れてそこから離れると通学路を真っ直ぐ通り、帰路につく。

「なんであんなクソガキと会つたんだ？」

「知らない。転校してきた時からなれなれしくしてきたから」

「・・・なぜ相談しなかつたんだ？」

「最初はただ単に話をしたいだけだと思つた。でも転校して一週間経つとあんな風にエスカレートしたんだ・・・」

帰路、商店街を通る道で俺は千冬から話を聞いている。

あのクソガキは二ヶ月前に転校してきたようで千冬を見た時から何かとつけ回したりしているらしい。

取り敢えずそれを学校側に電話しておいた。仮に如月コーポレーションから圧力が掛けられても潰すから問題はない。

「それで・・・君は千冬のお友達かな?」

「うるさいよ。ちーちゃんの父親だからって『安く話しかけるな』

ビキッ

千冬の隣を歩く紫色の髪をした少女に話しかけると拒絶される。罵声はプラスアルファ。

「束ー!」めん父さん、束は人見知りが激しくて・・・

「イインダイインダ。オレハオコツテナイカラネ?」

「おどりどり、なんかへん」

「ナニカイツタカイチカ?」

「なんでもありませんぐんそいー。」

ピシッと敬礼する一夏。失礼だな・・・俺はイツモドオリダゾ？千冬は紫色の髪をした少女に何かを話しているが、俺とは違つてしまふかり話を聞いていた。

・・・なぜだ。千冬の才能<sup>チート</sup>の毒牙にやられたのか？

「いいか束？いくら束でも父さんを馬鹿にしたり、無下にすんな」とは許せない。私は父さんが好きだし、尊敬してゐるからな」

・・・千冬、父さんは嬉しくて涙が出そうです・・・。

「・・・あいつが・・・ちーちゃんを・・・」

「む？ どうした束？」

束<sup>たばね</sup>と呼ばれた少女は俯いており、千冬が話し掛けるとガシッと肩を掴む。

髪が垂れてるため、顔は見えないがこれを俺は知つてゐる。

姐さんの病みモードの空氣だ・・・。

「た、束？ 痛いんだが・・・」

「ちーちゃん」

「いっ・・・・」

「束さんはね。ちーちゃんが大好きなんだよ。他の奴なんてどうでもいいくらいにだよ?あ、篠ちゃんは別だよ?束さんにはちーちゃんと篠ちゃんがいれば地球が滅んでも人間が死んでも構わないんだよ?あ。でもそれじゃあ地球には住めないね。ちーちゃん、束さんと篠ちゃんと宇宙に行こつ。誰もいないちーちゃんと篠ちゃんと束さんだけで一生一緒に暮らそう!できたらちーちゃんの子供も欲しいな。男の子はいらない、女の子が二人欲しいよ。あ、大丈夫だよ。ちーちゃんの愛があれば束さんは妊娠できるからね!んー、少しだけ待つてて。束さん達が学校を卒業するまでには宇宙船と人類を滅ぼすウイルスを作るから。でも核もいいかもね。それなら綺麗さっぱり消えるから・・・ウフフフフ。ちーちゃん、君は・・・束さんだけのものだよ・・・?」

・・・百合か?

「お、おとうさん!」わい・・・・・

「ああ大丈夫大丈夫。怖くない怖くない」

束ちゃん・・・だったか?見事に歪みに歪んでるな。  
姐さんの病みモードもあれだがこの子も似たり寄つたりだな。

まさかこの年でヤンクトとす・・・千々の将来真つ暗だな。

「だからね

「・・・ん?」

束ちゃんは俺の田の前に立ち、狂氣を孕んだ虚ひな田で俺を見てくる。

・・・似ている。かつての俺のよつて世界から認められなかつた(・  
・・・・・・・・・・)時と同じ田をしてくる。

「お前を殺して・・・ちーちゃんをもつづく

なりませ・・・俺は親父にしてくれたよつての子こも見せよつか。

世界は広いことをな。

「・・・面白い。俺相手にやつまでもうつとはな・・・いいぜ。相手になつてやるよ・・・“束”<sup>たばね</sup>」

「気安く名前を呼ぶなーちーちゃんに呼ばれるためだけにあるが前  
なんだー!」

「ヒ、父さんー?」

「心配するな。俺の事は知ってるだろ？死にやしないぞ」

これが・・・世界を変える“篠ノ之<sup>しのの</sup>束<sup>たばね</sup>”との出会い。  
ファーストコンタクトは最悪だが、将来には“天災コンビ”と言わ  
れるのはまだ先。

そして“天災夫婦”とも言われ、娘や乙女に命を狙われるのもまだ  
先。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

帰つたら口ロツケ食べてた」と、千冬に怒られた。まる。

## 第六話、親父（後書き）

束は最初は敵対します。

まあ、『テレるけどね！天災夫婦としていちゃらぶさせたい！』

はまだ未定。ハーレムっぽくはあるけど。

前の山田美弥、出でつか迷ひ。やまやの姉って設定で。

## 第七話、親父（前書き）

苦情は受け付けません。なんか浮かんだもん。

・・・熱に浮かされてるせいかな？

お氣に入り一千件突破しました。ありがとうございます！

アクセスは416739アクセス、83672ユニークを越えました。

すげー上がりようだな。

## 第七話、親父

本日は雷鳴轟く風の日なり。

外の空は雨と雷がじしゃ降りで出られず、家にいる奴もいるだらう。ニコースでも台風つて言つて警報が出でてゐる。

そんな中、俺は・・・。

「あああっーまたやられたかっ！」

嵐の中、港にあるコンテナなどがよくある倉庫の中に頭を掻きながら立っていた。

周りにはじりを縄張りにする不良達が倒れている。

こんな状況になつてゐるのは彼女、束の仕業である。彼女と出会い、宣戦布告されてから早五ヶ月。彼女にあらゆる襲撃を受けている。

十一月に出会いから五ヶ月が過ぎたため、千冬はまたひとつ年を取つた。

今月は四月。だがそろそろそれも終わりそうである。

「・・・取り敢えず帰るか。懲りたらもつシャブ（覚醒剤）なんか流すなよガキ」

「うう・・・くそが、てめえ・・・誰なんだよ・・・」

「名乗る必要はない」

そう言つと倉庫の大きな扉を開けて嵐の中に立つ。

彼女はあらゆる手で俺を亡き者にしようとし、今回は覚醒剤をばら蒔くグループを挑発して俺を殺すように仕組んだ。

返り討ちにはしたが。今回でこのような手は七十八回目である。毎回毎回彼女が誘拐されたと嘘をついて倉庫や廃ビルに行くようにするような事を思いつく彼女の頭脳は凄いな。

・・・そのせいで鈍っていた体を鍛え直されたから全盛期の実力が戻り始めている。

ん?どれくらいかって?取り敢えず大型車を殴り飛ばせるんじゃないかな?

全盛期には戦車を素手で破壊できたから鈍りに鈍りまくったな。うん。

嵐の中、走りながら飛んでくる街路樹を蹴り飛ばしたりする。

「・・・俺もお人好しだな・・・嘘だとわかつても動くからな」

ため息をつきながら自宅を田指して走る。

つーか雨凄いな。ジャングルのスコールみたいだな。

懐かしいな。親父に連れられて鍛えた時もジャングルには行つたな。

・・おかげで半端ないサバイバル技術が身に付いたけど。

他にも氣絶してる間に親父にイカダに乗せられて太平洋に放置されたこともあつたな。

・・・鮫、怖い。

「ただいま」

「おかえりおとうしゃ・・・わわわわ、おとうさんびしょぬれーちふ  
ゆねえーー！」

「なんだ一夏、今私は・・・と、父さん！？なんでびしょ濡れなんだ！？一夏、タオルタオル！」

「わかつたーー！」

「あ、ストップ。風呂に入るからいい」

家、マンションの自宅に帰ると案の定、千冬と一夏は慌てたよう巴巴タバタと走り回る。

それを苦笑しながら見てびしょ濡れになつた靴を逆さまにしてぶら下げて乾かす。

びしょ濡れのまま、風呂場に向かうと廊下に水が溜まつていぐ。

それを千冬と一夏が拭いつとするが自分でやると云ひ、脱衣場にて濡れた服を全部脱ぎ、洗濯機に放り込んで風呂場に入室。

温かいシャワーを浴びながら今日の出来事、彼女について考える。

彼女・・・東は頭がいい。それも同年代より遙かに、大人よりも。そのせいで友人や身近な同年代の子と距離を置かれてるのかもしない。

実際に千冬から聞くとクラスでも孤立しているらしいしな。いじめもあつたようだし。

・・・似ている、な・・・昔の俺に。残酷なほど、切ないほど、何もかもが、全てが俺が悩んだあの日と。

「・・・親父・・・俺はあの子を助けられるだろ?」

かつて親父と姉さんが助け出してくれたあの日、おふくろ・・・母さんが死んだあの日からの地獄から。

母さんは生まれつき、体が弱かった。

でも心は強かった。親父はそこに惚れたと言つていたが今思えば母さんほどの女性は今まで見たことがない。

俺はそんな母さんが好きだった。気高く、優しい母さんが。

そんな母さんに甘えた俺は信じられなかつたのだろう。

母さんの突然の死。

死因は教えてくれなかつたが体が弱かつたせいで死んだと舍弟から聞いた事がある。

まだ四歳の俺は信じられなかつた。母さんの部屋で顔に白い布を乗せられた母さんが寝ているのは。

子供ながらに俺は理解してしまつた。

母さんは・・・もう帰つてこないと。

それが信じられなくて、嘘だと思いたくて泣いた。延々と泣いて暴れて・・・。

その日から俺は誰も信じられなくなつた。

部屋に閉じこもり、飯も食べずにずっと。

親父や舍弟の皆は何かと手を尽くしてくれたが俺は母さんの死が受け入れられなかつた。

「・・・なんで俺はあんなに塞ぎ込んだんだろうな。親父や姐さんもいたのに」

苦笑しながらシャワーを止めると風呂場から出てタオルで水気を拭く。

千冬か一夏が用意したのか、着替えがあり、それをズボンだけ着る

とタオルを肩に掛けてリビングに入った。

「あ、出た・・・父さん! ちゃんと服を着てよ!」

「いいじゃねえか別に。風邪をひくわけじゃないし」

何かを読んでいた千冬は顔を赤くして服を着ろと言つてきた。  
前までは一緒に風呂に入つてたのにな。と思しながら冷蔵庫からビールを取り出して一息で飲んだ。

あの日が変わり始めたのは姉さんと出合った日からだつたな。

『やあはじめまして。君が春樹くんかな? ボクは 。よろしくね?  
?』

そう言って姉さんは笑いながら握手をしてきたが当時の俺は気に入らなかつた。

その笑顔が、母さんとダブつたから・・・。

俺は拒絕し、姉さんを殴つた。

でも姉さんは殴られても止めようとせずにただ俺に殴られ続けていた。

『フフフ・・・君がボクを殴つて気が晴れるならいいからでも殴られてやるや。君のお父さんに頼まれたからね』

そう言つた姉さんにまたも母さんがダブり、辛くなつた。

部屋からは出なかつたがその時は怖くて、母さんがいなくなるような気がして家から飛び出した。

無我夢中に飛び出したため、迫りくるトラックに気付かずに走っていると姉さんに助けられた。

最初は何があつたかわからなかつたが姉さんが俺を抱きながらコンクリートの地面に寝ていたのを見ると親父達が駆け寄ってきたのを見た。

・・・そういえば親父のやつ、トラックを海に向かつて蹴り飛ばしてた気が・・・。

と、とにかく！姉さんは頭を少し打つだけで命に別状はなかつた。簡単な検査で退院した姉さんは真っ先に俺のところに来た。

『春樹くん、君は大丈夫だつたかい？怪我はなかつたかい？』

その時の姉さんは俺が最後に見た母さんの優しい笑顔をしていた。それで感極まつて俺は思いつきり泣いた。枯れたと思つた涙を流した。

姉さんは何も言わずに俺をあやしてくれ、それに甘えた。

まあ・・・それが俺が体験したこと。

彼女、束は俺とは違うが似たような苦しみを持つているだろう。

母さんという支えを失つた俺、本当の支えがない束。似ている。

「それより父さん、何してたの?」こんな風の中で傘も差さず「

「傘は飛んだし、仕事があったし。お前らは休みでいいな……とこつわけでハツ当たりに今日の晩飯は『ローヤチャンプルー』オシリ一だ」

「えー! またあのにがいの! ?」

「理不尽だぞ父さん! セメで『』飯を付けてくれ! 」

「おかゆな。おかゆ

ギヤーギヤー叫ぶ千冬と一緒に夏をにやにやした顔で見ながらテレビをつけた。

嵐の影響か、見にくかつたが『コースは見れた。

『怪奇! 湖を走る女性! ?』

「……なんじや! ?」

「えー、こんなのよりあいぼうーあいぼうがみたい! 」

「人が湖を走るのか? そんなの父さんくらいじゃないのか? .」

「千冬、お前は『ローヤチャンプルー』と納豆を混ぜたものを食え」

「『』めんなさい。私が悪かったです」

深々と頭を下げる千冬。そんなに嫌か。親父はそんなゲテモノ料理を俺に食わせたことがあるんだぞ。

『あ、これです！これが湖を走る女性です！』

「エーハセヒダル。こんな悪戯を誰が信じるんだ馬鹿野郎」

「……でも父さんならできるよね？」

「むしろ海を走れるぞ俺は。密漁船を沈める時にやつたことがある」

沈黙する千冬に訳がわからないといつた一夏。  
俺は一本目のビールを飲みながら再びテレビを見るとその女性がインタビューされた映像が映し出され・・・。

『やつほー。春くん元気かなー?』

「ツ！」

「うわー！」

「ひやうー？」

そこに映し出されたのは姉さんだつた。  
それを見た俺は口に含んだビールを盛大に吹き出した。

な、な、な、な、な、な、なんで！？なんで姉さんがテレビに……？

よくよく見ると映像提供ロシア某局と書かれていた。  
まさか姉さん……ロシアでまたやつたのか（…………）？

『春くん、元気かな？できたら連絡ほしいなー！ボクに君の声を聞かせて？』

『……あの、誰ですかこの人は？』

キャスターが戸惑うが仕方ないだろう。

姐さん、別名は“理不尽女王”だからな。下手に干渉すると心がへし折られるぞ。

テレビには昔、最後に会った時から変わらない姐さんの笑った顔が映っていた。

・・・不老不死の人。俺より十以上年上のはずだぞ。  
なんで二十歳から顔が全く変わってないんだよあの人は・・・親父もだがなんで姐さんも化け物なんだ？

「おとうさん、しりあい？」

「・・・うむ。正確には親父の知り合いで昔に世話になつた人だ」

「お祖父さんの？父さん、でもあの人は二十歳前後に見えるけど」

「あれで十三歳年上だ。俺よりもな

ピシッと固まる千冬。一夏は相変わらずのほほんとホットミルクを飲んでいた。

姐さん・・・偽名だらけでわからんが俺に名乗つたのは安心院なじみ（あじむ なじみ）だったか？

前に立ち読みしたジャンプのキャラに似ているのは間違いない。

確か・・・や、や、や・・・なんだっけ？ロシアにある対暗部用暗部の十六代目の当主だった気がする。

なんだが都市伝説では姐さんはその暗部の創始者で初代当主つて噂があるが・・・どうだろ？

親父にひげを取らない戦闘能力、よく回る頭、絶大なカリスマ・・・それが姐さんである。

なじみさんと昔は読んでいたが姐さんと変わったのはとある舎弟から聞いたことで呼び始めたのである。

・・・まあ、とある舎弟Aは姐さんに折檻されて入院したが。

何を隠そう、俺のファーストキスは姐さんに奪われたのである。小学五年生にして褒美に軽いキスをするはずだったが姐さんに舌まで入れられて喰われる一步手前だったと記そう。

親父に助けられなかつたら大切な何かとお別れをした気が・・・。

「……どういう関係なの？かなり親しいみたいだけど……」

「……そんなに睨むな。何を不機嫌になつてゐるかは知らんがみたらし団子の串が折れてんぞ。

「さつとき言つたがお世話になつた人だ。おふくろが死んでからは母親代わりをしてくれてた」

「……ふーん……本当？」

「……なぜ疑う？そりやあ、ファーストキスの相手は姐さんだが……」

バキイツ！

「ひえつー…？」

「……おい千冬。したんじやなくて無理矢理されたからな？俺からは一切でない」

「……ふ、ふふふ……」いつは敵敵敵敵……

折れた串を握りながら千冬はぶつぶつと呪詛を唱えながらテレビの

姐さんを睨んでいた。

・・・束もそうだが千冬も大概ヤンデレだな。ビリで育て方を間違えたんだ？

延々と呪詛を唱える千冬に怯える一夏と晩飯を作ることにした。その途中で束からどうやったのか、俺の携帯にメールが送られ、脅迫じみた内容が書かれていた。

・・・やつこえれば束って名字何かな？知らないんだけど。

「え？ 束の？ 束は篠ノ之だけどうかした？」

「・・・は？」

「あー、それそれー！ ほつきちちゃんのなまえもそれだよおとつかんー！」

「・・・し、篠ノ之・・・？ 千冬、一夏、マジですか？」

「「「うん」」

・・・うわあ・・・ 束雲じやなくて篠ノ之・・・あの馬鹿の娘かよー。つてことはあの人の孫・・・理解した。生まれるべくして生まれたんだな。彼女は。

「・・・一夏、会いに行くぞ」

「え？」

「篠ノ之なら俺も知つてゐるからな。挨拶するついでに束の話を聞きに行ひ」

「父さん? なんで束の名字でそんなに慌てるんだ?」

「……………。  
篠ノ之とこの先代、つまりは束の祖父なんだが……俺の、師匠なんだよ」

「……………え?」

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

今日の夜、夢に姉さんが出てきて喰われそうになり、怖かった。まる。

## 第七話、親父（後書き）

安心院なじみはめだかボックスのまんまです。

最初は姐さんは哀川潤辺りにしようかと思つたけどめだかボックス見てこつちにした。

まあ・・・暗部の十六代目、といつたらあれです。わかる人はわかるかな？

近い内に出すけどちょっと設定、あります。

次回は篠ノ之神社へゴー。

千冬も大概ヤンデレだな。おい。

## 第八話、親父（前書き）

ちゅうと表め。

オリキヤリ？出ます。

## 第八話、親父

本日は晴天なり。

季節外れの台風も去り、嵐も嘘のように過ぎ去つた。  
雨が降つたせいか、少しジメツとしていたが特に気にならなかつた。

「・・・おとうさん、じいじへ。」

「篠ノ之神社。懐かしいな・・・かれこれ親父が死んでからだから・  
・十二年か。何も変わっていないな」

現在、我ら織斑ファミリーはある神社に来ている。  
名前は“篠ノ之神社”。昔に修行していた時に住んでいたことがある場所である。

今日は束に会つためと一夏の言ひ残しがりやんとやうに会つたために  
ここに来た。

まあ・・・師匠、怒つてそうだな・・・。

「お。じいだじだ」

「・・・道場? 大きいね」

「まあな。かなり昔に建てられた武家屋敷を改装したりしこから広いのは当たり前。た・て・と・・・」

神社の裏。少し分かりにくいがそこには木の扉があり、それを開けると庭があり、その先には道場があった。

千冬と一夏はは～つと感心する。

その間に俺はゆうぐりと道場に近付くと中から僅かな音が聞こえる。なるほど・・・練習中か・・・好都合だな。

一ヤリと笑うと千冬と一夏に待機するよつと言ひ。でもついてくる。と書ひので何があつても手は出せない、口は出さないこと約束をした。

「んじや・・・たのも～～～～～！」

「ゴォンシ～！」

「え、！？」

「わっ！？」

「お邪魔しま～す。道場破りで～す！」

やつたのは道場の扉を蹴り開けてずかずかと中に入る。

中に入れば袴を着た男女が竹刀を持ったまま固まつており、俺は靴を脱いで跨ぐ。

「…………お前か春樹……」

「ういっす！ 柳韻、元気にしてたか？」

苦虫を万単位で食い潰したような顔をするダンディーな男は腕を組みながら俺を嫌そうに見ていた。  
そいつの名は篠ノ之柳韻。篠ノ之神社、道場の現当主である。

「お前は昔から変わらんな。二十歳の時からまつたく老けてない」

「体質だ。親父も似たようなもんだろ？」

「……まあいい。何をしにきた春樹？」

「道場破り。てめえがどんだけ強いかと俺がどんだけ力を取り戻せるか知りたい」

「…………ふん。まあいい……積年の恨み、ここで晴らされてもううづぞ」

「それ、負けフラグだから。俺、カツコいいと思つてゐようだが力ツ「悪いぞお前」

「…………殺す！！春樹、貴様は何も変わってないのか！？」

「変わったぜ？体重と好物が。酒とマグロに加えてケーキをプラスだ」

「べつ……貴様あ……」

「せぬの？やんのか？やんのか」「アリ？」「めえ、一度も俺に勝てなかつたくせにいきがんじゅねえぞ柳韻」

「春樹……」

「あ。千冬に一夏、下がつてな」

ぽかーんとしている千冬と一夏を壁まで押してやると木刀……ではなく真剣を持った柳韻がこちらに向かってきた。

「いいねえ……達人の殺氣、それは衰えていた俺を再覚めさせる。・・・

「はあああああああああああつ……」

「楽しそれでいいが、柳韻……。」

「あ、いちか……あのひとせ~。」

「うひあつ！親父直伝のラコタシトオ……！」

ぐつ・・・・！

「あー、せりやん！おれのおじいさんだよー、まだほんまになしたよね？」

「うん・・・・か！」こ、さわがしいね・・・。」

なんかスゴイパンチ（右v e r）……！

ドッ、「オオオオオン……！」

ぐぬおつ！？道場の壁に穴が！？

「ちーわやん！ 束さんに会いに来てくれたの！？」

「束・・・ほら。父さんだよ、なんかお前の父さんと知り合いみた  
いだぞ?」

「・・・あの腐れ野郎が・・・」

チエストオオオオオオオオ！！

なんの！織斑家必須科目『指で真剣白刃取り』！

カツキイイイイン！！

なんだと！？

くはあつ！！

「え？ いかがのおいづれどおかけつけはしつあいなの？」

「ああ。父さんは君のお祖父さんの弟子と聞いたんだが・・・」

「じいさまの？あの、あなたは・・・」

「あ、すまないな。織斑千冬、一夏の姉である人の娘だ」

「ほ、はじめまして……このお話を伺いたいのです」

親父直伝！『手刀で何もかも叩き斬れ』――

ズッパン――

や、やめろ春樹！道場が崩れる――

ふはははははは――なんか楽しくなつてきた――

「おれ、おつむりこちかーおねえちゃんは？」

「……君、ち一ちゃんの弟？」

「うそーちふゆねえがいつもおせわになつてますー」

「……うん。君はいいかな？私は篠ノ之束。束さんと呼ぶがいい  
じつくんーぶいぶい」

篠ノ之流古武術奥義・・・

わせつかあー織斑家必須科目『骨まで砕けるアラシヤム』  
――

ギチチチチチッ――「キキキキキッ――

「…」

・ 師範代が手も足も出ないって · · · あの人何者？

師範代と仲はいい、のかな？喧嘩して世の事も話してたみたい  
だし。

「東は何か聞いてないのか？」

「興味ないし知りたくもないよ」

「…………うふふ…………」ちか、いちかのねどりんがよこね…………

「うんー、まあ」くまをなぐつゝやしたってこいつてたよー。」

おい、聞いたか？熊を素手で殴り殺したってさー。

まさにバグキヤラ・・・師範代、立場無いね。

ドッ、『オオオオオーン！』

おひやおひやあーー柳韻、弱くなつたんじやねえのか!?

ちよ、まつ、ちよつと待て春樹！

「仮にすんな篠ちやん、父ちゃんあんな感じだから仮にしたら負けだぞ・・・まあ・・・」

「ちーちゃん・・・やつぱり殺そつ。指名手配せられて世界から狙わ  
れぬよつて・・・ぶつぶつ・・・」

ランインパクト!!

著作権が・・・ぎやああああああつ！？

ズドオオオオオオン！！

「・・・いつまでやるのだ父さん・・・」

「うーーー、アーリーがねえーーーとか、アーリーがでたーーー」

「ええ・・・？」

最後！親父直伝裏奥義！『シャイニングウェイザード改』！！

あべっしー！

模擬戦終了。

勝者、織斑春樹。

決め技、シャイニングウェイザード改。

MAX HIT、28 HIT。

被害・・・道場。

門下生三名（ランインパクトの流れ弾に命中）。  
師範代、篠ノ之柳韻。

「あつはつはつはつはー悪い悪いーついやつすぎたわー！」

「春樹貴様あ！道場の修理にいくらかかると思つてゐるんだー！？」

柳韻との模擬戦、もとい俺のワンサイドゲーム終了後、道場は穴だらけになっていた。

他にも門下生数名がランインパクトに当たり、アフロになつてい  
た。

最大の被害を受けた柳韻は軽く頭に包帯を巻いて道場の無事な床に座つて俺を睨んでいた。

当の俺は爆笑しながら柳韻の肩をバシバシ叩いているが。

その近くには千冬に束、一夏に篠ちゃんが道場の穴が開いた場所をつついたり、残骸を持っていた。

「・・・お前、体力が落ちたな？昔ならもつと鋭い動きができるだろ？」「

「あー、お前にはわかるか・・・親父の言つ“氣”も下手になつたし」

「まあ・・・今までサボつていたツケだろ。なのにあの戦闘能力・・・化け物め」

「その化け物と戦つてその程度で済むお前もお前だからな？」

不良やヤクザ相手に暴れたから勘は戻つたが体力等はまだ微妙な感じである。

ランインパクトは某野菜少年が主人公の筋肉バグキャラの技だが、“氣”を使うからな。

昔なら本気でやれば駆逐艦を消し飛ばせたが本当に衰えたな。

柳韻は真剣を鞘に納めながらため息をつく。  
んだゴラア・・・殴り殺してやろうかあん？

「春樹……もう大丈夫なのか？」

「ああ。親父が死んだのは仕方がないと振り切ったよ。くよくよしてたら親父に殴られるからな……それにガキもできたからな」

「……信じられんな。あの春樹が子供を持つとは……昔から子供に好かれていたが……」

なんでこう、昔からの友人は信じられないみたいな顔をするんだ？子供は昔から好きだし、好かれていたし。だから何の問題はないだろ？

少し大きめの竹刀を持つ千冬、篠ちゃんが使っているだろう竹刀を持つ一夏を見ていると柳韻もまた、一人を見ていた。

視線に気付くと千冬は軽く微笑み、一夏は満面の笑顔で竹刀を持ちながら手を振っていた。

それを微笑ましく思い、手を軽く振り返した。

「父親らしくしているな春樹。かなりなついているじゃないか」

「まあな。可愛くて堪らん。邪魔するやつを一分で消し炭にできそうだかんな」

「…………昔みたいに山を消し飛ばすなよ？」

「善処する。あれは仕方がないだろ」

・・・まあ、昔にちよつと・・・ね。俺も若かつたと言つかなんと言つか・・・。

「それより柳韻。てめえに聞きたいことがある」

「なんだ? そんなに改まつて」

「お前の娘、束の事だ」

ピクッと眉が動いたのがわかった。

柳韻は真剣な表情で目を閉じると何かを考えるような仕草をする。

持っていた真剣も床に置いて腕を組むと言ひついで口を開く。

「・・・束は生まれた時から剣の才能が無かつた。代わりにあり得ない頭脳を持つて生まれた」

「別に珍しい事じやないだろ。篠ノ之家も、俺達織斑家にも才能が無い者が生まれるのは不思議じやない」

「わかっている。だが叔父上達がまだ幼い束を・・・」

「・・・あんの腐れジジイ共・・・しぶとく生きてる上に幼い子供に何をしてやがんだ・・・」

痛くなる頭を押さえながら千冬に抱きつく束を見る。

織斑家同様、篠ノ之家もまた昔から存在する由緒ある家系。

最初は神社の巫女としての家系だが、いつからか“篠ノ之流古武術”を編み出した時からそれは変わり、武術家として変わった。

織斑家と篠ノ之家は犬猿の仲だったが、俺の親父と柳韻の父親、篠ノ之總巖しののそうげんの代から仲良くなつた。

まあ反対するものもいたが、織斑家、四季組の幹部に舍弟はみな贊成はしたし、篠ノ之家にも反対するものは少なかつたからいい関係が築けた。

だが少なからず、反対するものがいる。

それは篠ノ之總巖、師匠の第二人。こいつらが頭が固い馬鹿。

總巖師匠は才能など関係なく誰でも愛し、愛されるが第二人は才能があるものしか認めず、俺達四季組を毛嫌いしている。

実際に俺が總巖師匠にお世話になる際に何かと嫌がらせをされたことがあつた。

まあ、お礼にボコボコにして病院送りにしたけどなー！

「……で。たぶんだが束を罵倒したんだろ。落ちこぼれがーってな」

「ああ……正直、お二人は気に入らないんだ。束を落ちこぼれ扱いし、門下生にも手を出したりと。父上も手は尽くしてるけどね・。

・」「

「よし。殺そり」

「待て！話がじられるからやめろー。」

自然とつら上がる口を抑えずに立ち上ると柳韻が必死に止める。あの馬鹿一人・・・病院送りじゃなくて黄泉送りにしてやろう。そうしよう。そして後悔して死ね。

バタバタと暴れているとふと、凄まじい氣を感じ、柳韻の真剣、つまりは日本刀を構える。

「ほっほ。相変わらず勘がいいの」

「ひーせりあひー。」

ガツキイイイインー！

「そして変わらないその鋭さ・・・久しいな

「・・・あなたか師匠・・・脅かすなよ」

「ほほー。ジジイの戯れじや。気にするでない春樹よ」

「へいへい」

後ろから声がしたため、抜刀して斬りかかると髭を生やしたジジイが木刀で防いでいた。

そのジジイこそ俺の剣の師匠、篠ノ之總巣。俺が知る最強の剣士。

總巣師匠は髭を撫でながら木刀を下ろすと俺もまた、日本刀を仕舞つて柳韻に渡した。

「・・・弱くなつたの。昔はもっと氣迫も霸氣もあつたのに・・・」

「仕方ないだろ。鍛えてなかつたから衰えるのは当たり前だジジイ」

「ほほほー。ジジイと呼ばれるのも久しぶりよー・・・して、春樹よ。久しくここに来たが何の用かの?」

「柳韻にも話したが・・・」

## かいつまんで説明

「・・・むう・・・束の事が・・・」

「ああ。あそこまで歪んだ子は世界を回っても見なかつた。だからこそ気になつてな」

簡単に説明をすると役割分担をすることにした。

まずは束が歪んだ原因、ジジイの弟一人を抹殺。息子も追放。

あの一人、俺らより弱いから追い出すのは簡単にできるからな。

「で。束は俺と千冬に一夏が徐々に接して心を開かせる」

「・・・すまんの。我ら篠ノ家の問題なのにの・・・」

「いいひ。親父ん時に世話になつたからな。それに子供はあんなに歪んじやいけない、笑顔でいなきやな」

「春樹……すまん」

「だから謝るな柳韻。俺が好きにやるだけだから。な？」

俯くジジヤヒ柳韻にむづき因人がじかうひ歩こてきた。

「んへ。ゼハッた？」

「えつヒ……父やさん、お願いがあるんだけど……」

「?」

千冬は黙こぼりながら立つ。

あーとかうーとか唸りながらわしながら田を動かすとチワチラヒと竹刀と俺の顔を見る。

「……それで……剣道を習いたいんだ」

「いいじゃ」

「だから……え? いいの?」

「お! 千冬がやつたらこなれやつこよ。俺は止めたりはしない

から

すると千冬はぽかーんとするが言葉を理解するとぱあっと笑顔になる。

基本的に俺は止めたりはしないよ。子供にまでやられたい」と玉川が口にした。

まあ・・・ヤバい事はやらせるつもりはないがな。  
嫁にも出せん。

柳韻に頼むと二つ返事で千冬は篠ノ之道場にて剣道を習うことになつた。

・・・・・  
”を使いこなせそ�だし。  
いすれは縞瑪家の僕術も教えるか、千冬なら“冬の型

・・・・・なんだが・・・。

「ギリギリギリギリ……」

「・・・怖いからやめてくんない?」

束、病みモード。

ハイライトの消えた虚ろな目で、ぶつぶつと俺を睨みながら呪詛を唱える。

ジジイと柳韻、幕ちゃんに「千冬、一夏は去えてこるものついで距離を取つていた。

・・・おーじジイに柳韻。てめえら自分の子にはえんなど。

「・・・む・・・めんじくさこな

「なに? タバネサンとやルつもつ?」

「ハナからそのつもりだクソガキ。必ずお前を認めさせてやるよ

「くすクス・・・オモしろイネ・・・」

前途多難。さらに面倒事が増えたな・・・。  
いい加減に四季組に戻るつか迷うこの頃。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

千冬は剣道をすることがなつた。まる。



## 第八話、親父（後書き）

んー、まあ篠ノ之家のあれは適当。

柳韻は出でるけどその親父は出でないから勝手に出した。

ちなみに春樹、本気ではありません。全盛期には日本列島、消し飛ばせますwww

千冬は篠ノ之道場に仲間入り。束のヤンデレ具合はさらに加速。

## ハロウイン特別企画（前書き）

ちなみにこれ、10／24に予約してありますwww

苦情は受けないよ？少し未来の事なんでネタバレあるよ！

## ハロウイン特別企画

本日は晴天なり。

今日は十月三十一日。ハロウインである。

そんな行事に天気がいい日でパパ・・・親父は嬉しいです。

「・・・よし。できたな」

現在、一児の親父である俺は家にてお菓子作りに励んでいる。  
だって・・・（性的な）悪戯されたくないもん・・・。

千冬は珍しくEHS学園から帰り、束のバカも篠ノ之家・・・ではなく、家に来て何かをしている。  
といふか仮装。

「・・・姉さん来なきゃいいけど・・・マジ、怖い」

以前にハロウインに姉さんにトリックオアトリートしたらお菓子な  
いって言つて・・・ガタガタガタガタ。

悪戯しようとしたらされた・・・しかも（性的な）悪戯を。  
貞操が危うく失う上にハロウインにトラウマができるよ・・・。

「時間、かな？お菓子は大量に用意したから大丈夫なは（ピンポン）ンー）お。やつそく来たか」

クッキーやらマフィンを袋に詰めて纏め終えるとインターホンが鳴らされた。

失敗作のポッキー擬きをかじりながら家のドアを開けると・・・。

「「トリックオアトリートー（お菓子くれなきや悪戯するだー）」「

「おー。一夏に篝ちゃんか・・・なにそれ？」

「俺は狼男！」

「わ、私は魔女っ子です・・・」

まず現れたのは息子の一夏と居候する篝ひやん。どうやら離れの茶室で着替えたようだ。

一夏は銀色の狼男の仮装、篝ちゃんは黒い魔女っ子の仮装をしていた。

一夏は満面の笑顔で手を出しながらお菓子をねだり、篝ちゃんは恥ずかしそうにチラチラと俺を見ていた。

「あれ？父さん年に食べてるの？ポッキー？」

「あ？ ああ、失敗作だよ。勿体ないから食べるだけ……ほれ。  
一夏はマフィン、篠ちゃんはクッキーな」

「ちえ～。悪戯してからお菓子貰おうと思つたのににな～」

「殴るや」

「すいませんでした軍曹一サード！」

「ひっけり笑いながら一夏の頭をホールドするとペシッシュと敬礼する  
一夏。

逆に篠ちゃんはクッキーを食べて嬉しそうに笑つている。

「ほれ。他に行くながら行く、行かないなりロビングに南瓜の料理と  
があるが？」

「食らひづーーー！」

「あ、待て一夏！」

一夏はそれを聞くと真つ先にロビングへと消え、篠ちゃんもまた一  
夏を追いかけた。

・・・うむ・・・一夏は飯の事しか頭にないのか・・・篠ちゃん、  
親父は応援するから恋を実らせなんだぞ。

「ポツキーリビング無くなつたな・・・補充補充」

リビングに行くと案の定、一夏はパンプキンケーキをムシャムシャ食つてた。

篠ちゃんはクッキー食べながらたまにパンプキンケーキを食べて項垂れてるがどうしたんだ？

あれ？ まずかつたか？ 味はいいはずなんだが・・・。

「（うう・・・美味しい・・・春樹さん、私より料理上手・・・はあ・・・）」なんじや春樹さんに嫌われるなあ・・・」

訂正。篠ノ之篠は少年ではなく、その父親に恋をしているようだ。本人は気付かないと一重苦な乙女であった。

「あ、父さん！これ言いね！」

「へへ皿にならいいが・・・」

よかつた。別にまずいってわけじゃないようだ。

一夏は口の周りをクリームだらけにして食べまくっていた。

・・・？ 篠ちゃんは少し残念そうな表情で俺を見ていたが。

「ん？ また来客か・・・一人はそこにいるよ」

「わかつたーー・つまー！」

「あ、はい」

ポツキー擬きを新たに口にくわえるとこくつかの袋を持って玄関へ。ガチャリとドアを開ける。

「「トリックオアトリートー（お菓子くれなきや悪戯するぞー）」」

「トリックオアトリートです春樹さん」

「と、トリックオアトリート・・・」

「・・・・・・あれ？お前らロシアに派遣されてたんじゃ？姉さんはどうした？」

「お姉様なら」ひちに來てるよ。ハロウインだから那様に会いに行くぞー！って

「・・・・・・・・ハロウイン（悪夢）再来！ー！」

やってきたのは更識姉妹、布仏姉妹。

更識家十七代目候補の樋無、その妹の簾、布仏姉妹、姉の虚、その妹の本音。この四人が家に來た。たしか四人は姫さんと一緒にロシアにて修行していたはずなのに來たということはトラウマ發生。

また（性的な）悪戯されるのか俺は・・・。  
親父もいないから今度こそやられるな。

「それよりトリックオアトリート。お菓子頂戴？無かつたらお兄さんでもいいよ？」

「楯無なし。南瓜の皮をかじつてる」

「わーわーーー！そー！冗談だから許してーーー！」

「つたぐ・・・姉さんに似なくていいだろ楯無。俺、心労で死にそうだわ」

「だ、大丈夫？」

「おお簪・・・お前は千冬に次ぐ癒しだ・・・」

楯無と同じ仮装をする簪を抱き締めるとあわわわと簪は真っ赤になつて慌てる。

そんな簪を愛でながら空氣になりかけている布仏姉妹にクッキーを渡した。

「おー、はつやーはお菓子も完璧す。あむ。おいしーーー！」

「あつがとうござります春樹さん。いただきまーす」

「え～！私は私は～？」

「お前はマフィンな。少し南瓜を混ぜたから甘い氣はするが・・・  
ほり。簪も」

簪を愛でるのをやめると一人にマフィンの入った袋を渡す。

「お～。さすが・・・美味しいね。お姉様が喜ぶわけだよ」

「あ、ありがとう春樹兄さん・・・」

「ではお嬢様。前当主様がお待ちですので行きましょう」

「ん？リビングにケーキあるんだがいらないのか？」

「ケーキ！？食べ・・・べえつ」

虚が姐さんに呼ばれてると言うので退散するらしい。  
ただでさえ少ない自由時間を無理矢理使って来てみよいで名残惜し  
そうに帰ろうとする。

ケーキ。と聞くと櫛無と本音が家に入ろうとするが虚に首根っこを  
捕まれて阻止される。

女の子にあるまじき声を出す一人は虚に引き摺られていった。

追記すると更識姉妹の仮装は本人曰く、精靈の姉妹らしいがよくわ  
からん。

本音は裾の部分が異様に長い白いシーツのようなものでおばけ。虚  
はいかにも真面目そうな魔女のような・・・なんで篠ちゃんとかぶ  
る?

「あー、はつきー！ ケーキー！ ケーキー！」

「では春樹さん。私達はこれにて・・・」

おう、暗くなってきたから気を付けてな」

お尻をん! ケリギ取」とい……ぐるぐる

「おやからかのんは矛るな。」（語）といふ。

「二二」

虚に引き摺られる樋無と本音、その後を簪が追い掛けるのを見ると  
パタリとドアを閉めた。

ホケッ！ カクレ煙草を取り出したり（ヒンホーン！）……タイミング悪つ。

「はい」

「トリックオアトリック？」

「…………」

「あ、痛い！痛いよはーくんーお嫁さんの束さんを蹴らないでー！」

インター ホンが鳴ったため、出でみるとエロい格好をしたウサ耳、束が現れた。

取り敢えず蹴つといた。

「トリックオアトリックつて悪戯しかないだろ。あん？俺に何をするつもりなんだゴラア」

「もううんー（性的な）悪戯だよー！あいたつ」

「そつかそつか。お前にはからしと練りわさびを混ぜたクッキーをやるー・・・大丈夫。クッキーに塗るだけだからすぐ元に戻せる

「痛い痛いーちーちゃん助けてーー！」

ゲシゲシと束を蹴つていると後ろから千冬が恥ずかしそうに出でてきて・・・鼻から涙が流れた。

千冬の格好（仮装）は猫耳付きの//スカワニピース+ニーソとかなり際どい仮装をしていた。

娘LOVEな親父には刺激が強すぎる。

「せりひーひやんーはーへんこのおの血葉をぬつて！」

「た、束ーやめてくれーもひ荷ばられんー父さんなんか鼻血を垂らしまくつていいだりづー。」

「ほこねこかーひやん・・・これ見せてもらひいの？」

「――」

いそいと鼻血を拭きながら鼻にティッシュを詰めてこると束は何かを千冬に見せていた。

束はすんごい悪い顔をし、千冬は真っ赤な顔のままもじもじした。

・・・やめて千冬。出血多量で死ぬから。

「と、父さんー。」

「な、なんだ千冬」

「わ、私・・・私に悪戯をして?」

「チッー。

「・・・・・・ちよつと泳いでくる。お土産に鮫かなんかを取つて  
いみづ」

「え？ はーくん！ 何を…」

「リビングに一夏と篠ちゃんがいるから久々に声をかけとけよ」

「父さん！え、まつ、ええ！？」

脇目も振らずに海に向かつて駆け抜けた。

どつぱん！

「てなわけ。疲れたから寝たらそんな夢を見たんだが？ちなみに鮫と鯨を殴り飛ばしたのは覚えてるぞ」

「さつすがはーくん！ 束さんのお嫁さん！」

「婿だ婿。俺は男だ。決して幻の“男の娘”ではない」

リビングにて千冬、束、一夏、篠ちやんで南瓜の料理を食べながら話していた。

まあ、夢は樋無達が来る前辺り。ポッキーを取りに来たらうとうとして寝てしまったのだ。

だつて・・・あの四人には姉さんを通して送ったもん。ケーキにクッキー、マフィンをね。

「篠ちやん元気だった？」めんね、お姉ちやんが一緒にいらっしゃなく  
て

「ううん。春樹さんがいたから寂しくなかつたよ・・・でもお姉ち

やんがいないのは寂しかったな・・・

「 篠ちや

んーー『めんよ

ーーー

束はガバッとHIS学園の制服のまま、魔女っ子の仮装をする篠ちやんに抱きついた。

篠ちゃんは束の大きな胸に埋もれるとびっくりするがすぐにこいつと笑って束を抱き返した。

そんな二人を見ながら俺はポツキーをかじると千冬と一夏にそのポツキーを渡す。

千冬も一夏とは久しぶりに会つから一夏は千冬に色々話している。千冬は微笑みながら「ぐくぐくと頭を振りながら一夏の話を聞く。

「でねー父さんはその先生と話しあつていじめを解決したんだー千冬姉は学園、どうだつた?」

「・・・つむ。女子に“お姉様”だなんて言わされて・・・はあ・・・

」

「・・・お前、またか?またなのか千冬?」

「ひから千冬、 HIS学園でも才能を發揮してるように

テー

「はーくんはーくんー記念撮影しよー。」

「ん? いいが・・・カメラは?」

「束さんのお任せあれ! まけっとなー。」

ウイイインヒ床が開くと脚立付きのカメラが上がつてきた。

「・・・後で直せ。いいな?」

「ひじやーーーーーーーーチッ、はーくんの盗撮ができないな

「なんか言つたか?」

「なんでも? ほりほりこつくんもちーちゃんも入つて入つて!」

束に無理矢理押されると真ん中に一夏と篠ちゃん、その上に俺、束は俺に抱きつき、千冬はペタッと寄り添つように立つた。  
これが構図・・・束、胸を並てるな。

「はい、チーズ!」

「早い! 束、早いぞ!」

パシャッと音がするとフラッシュが叩かれ、その構図が撮られた。

そこには心から笑う四人とひきつった顔をした俺が写っていた。  
ハロウイン・・・トラウマだけどいいもんだな・・。

## ハロウイン特別企画（後書き）

さて・・・これが実現できるかできないかwww

今度はクリスマスかな？やるかわからんけど。

## 第九話、娘（前書き）

親父 春樹視点

娘 千冬視点

息子 一夏視点

というわけで今回は千冬視点！・・・なのに千冬が変態化した。なぜだ！？

あ、教えてもらつたんですが週間アクセスが一位、月間アクセスが二位だそーですね。

・・・マジか？日間アクセスも一時一位だったみたいだし・・・パネエ・・・。

## 第九話、娘

今日の天気は晴れ。

雲もあまりなく、日光がさんさんと穏やかに照る、そんな日。  
今日は祝田で休み。父さんと一夏と家におり、遊びに行く予定だつたが・・・。

「ひー・・・げほっげほっ！」

「38・6・・・風邪ひいたの？」

父さん、風邪ひいたようだ。

いくらバグキャラでも風邪はひくんだねって実感したよ。

「ち、千冬貴様・・・俺を化け物扱いに・・・げほっ、したな・・・？」

「ち、さあ?ほう。薬を飲んで」

訂正。バグキャラは風邪ひいてもバグキャラ。

私はベッドの上で死んでいる父さんに薬を飲ませると頭に冷えピタを新しく張った。

あ、あ、～と情けない声を出す父さんは普段の堂々とした態度とは真反対なので少し新鮮だ。

「ちふゅねえ、おどりかんだいじょひづ？」

「・・・微妙だな。まさか父さんが風邪ひくとは思わなかつたからどうなるかわからなーな。今田は出掛けるのは無理そつだ」

「えーーひせしづりにキャッチボールしたかつたのに～！」

「あ、～、すまん一夏。埋め合わせはするから部屋かリビングで大人しく・・・げほつ、しどけ。風邪移したら大変げほつだからな」

そう言つと父さんはボスッと布団にぐるまると田を閉じた。

・・・なんか色っぽい・・・げふんげふん！

「ちふゅねえ、かおがきもちわるいよ」

「・・・い　ち　か　？」

「いめんなさいちふゅねえ！～」

ヒヒヒと笑いかけると一夏はなぜか頭を下げて謝る。なぜ？

「（・・・無意識だとしたら姉さん以上の恐怖にならうだな・・・  
頭痛い）」

「じゃあ父さん、私と一緒にジングルこるから何かあったら呼んでね？」

「んー」

父さんはのろのろと布団から手を出ると力無く手を振った。  
本当に珍しい。父さんはほとんど風邪や病気にかかったことないつて言つてたのに。

それにたぶん風邪は前の季節外れの台風の時かな？びしょ濡れで帰つてきて上半身裸でうつりついていたから風邪になるのは仕方ない気がする。

シャワー浴びても意味ないよ父さん。

「ちふゆねえ、こまからなにある？おとつせんせぬひけなにみたいだしね」

「一人で出掛けるのは駄目って言われてるし・・・私は父さんの看病するつもりだ」

「ならおれも！おれもかんじゅうするー！」

・・・迷つな。父さんをノックアウトした風邪だ。

一夏に移つたらとんでもないことになりそうな気がするな・・・う  
ーん・・・。

取り敢えず一夏には雑炊か何かを作るのを手伝つてもりおう。私は  
まだ、飯を炊くこととお湯を沸かすしかできないし。

・・・今情けないとか言つたやつ・・・斬り殺すぞ。

「ちふゆねえ?」

「む。なら一夏には雑炊を作つてもらおうかな?私は作れない・・・  
し・・・・」

自分で言つてなんだが地味に落ち込む。  
男である父さんは料理が得意で女である私は苦手で一夏は上達して  
いる途中・・・なぜか腹が立つてきた。

なぜ神は残酷なのだ!!--料理もだがなぜ私はむ、胸の成長が遅い!?  
束は私達の中では巨乳と崇められるほどでかいのになぜっ!!--

答える神ツ!!--貴様は私が嫌いかああああああつ!!--

・・・こほん。失礼、取り乱しました。

毎日朝に牛乳は飲むのだが束のようにたわわにはならん。

なぜだ。束は胸がでかくなる魔法でも使つてゐるのか？

千冬は同年代では大きい部類に入ります。  
束が異常なだけです。

「わかつたー！・・・でもちふゆねえ、りょうりできないんじゃ・・・  
・？」

「ぐはっー！」

一夏の何氣ない一言により、私は胸を押さえて蹲つた。

・・・父さんが言つていた無垢な子供のきつい、かつ何氣ない一言

こそ一番胸に突き刺される。これ、本当のようだ。

だつて一夏・・・首を捻つてなんで？みたいな顔してゐるもん。

「ど、とにかく！一夏は雑炊を作つてくれ！いいなー？」

「いえっさーー！」

わーい！と言わんばかりに一夏は走りながら台所に行き、手を洗う。  
それから鍋やら冷蔵庫から冷やご飯、卵、ネギを取り出すとまな板  
の上に置いた。

・・・はつー？しまつた！一夏はまだ一人で火は使つてはいけない  
んだつた！

私は慌てて台所に行くと一夏と卵雑炊を作ることにした。  
私はまだギリギリで火を使うことは許されているからな。

・・・だけど父さんがクイズミリ ネアの一千萬の問題みたいに私  
に火を使わせるのを悩んでいたのを思い出すと不安がある。

「（・・・以前に使って火事になりかけたのに気付けよ。どんだけ  
慌てたと思つてんだバカヤロー）」

「あれ、おとうさんのひきこもったよ？」

「・・・父さんは寝てこるんだぞ？ 声が聞こえるはずがないだろ？」

一夏の将来が心配になってきた。

何はともあれ、雑炊ができたので一夏と父さんの部屋に雑炊を持つ  
ていぐ。

父さんの部屋はマンションの一室の中でも一番大きく、そこにはキン  
グサイズのベッドがあつたりする。

・・・最初に聞いたら「寝やすいだろ」と言つてたが・・・でか  
いぞ父さん。

「おとうさんおとうさんどうぞすこしふくってくださいたがうべれるへ。」

「ふー、せーひー」

のやのやと起き上がり父ちゃんは向度も面つが普段とは違つ様子なので新鮮である。

なんか」「・・・保護欲をくすぐりたるよつな・・・。

“千尋は母性愛に田観めたー”

「まむまむ・・・

「おこしこへ」

「まあくはなこべ」

「・・・・や」は美味しいって言こなよ父ちゃん・・・

落ち着けー落ち着くんだ私の右手よー

父さんの食べる姿は小動物のそれに似てこるため、撫でたくて右手がつづつづしていた。

なんとか抑えて一夏が雑炊を父さんに食べさせるとまた布団へくるなり、爆睡し始めた。

「・・・めずらしこねちふゆねえ。おとつねがいこまでもわってるのでひてはじめてじやないかな?」

「確かに・・・だが今日は何がいいで寝なつか?」

一応、私達の部屋にもベッドはあるが、大半は一夏と父さんのベッドに潜り込んで寝ている。

だつて・・・いい匂いがするもん。

・・・この発言だけだったら私は変態だな。

いい匂いがするのもそうだが、父さんと寝ていると安心感があるし、朝起きたらストレスとかゼロって素晴らしいオプション付きなのだ。

だから私は父さんと寝ている! ファザコンとか言われても構わん!

「ねえねえちふゆねえ、こまからなにかしない? おとつわさねちゅ  
つたし」

「なら人生ゲームしよう! 束さんが持ってきたやつ!」

「・・・・・・・・・・・・・・待て。今なんかいたぞ」

声がした方を見ると束と妹の筹がいつの間にか部屋に侵入していた。

・・・鍵は?

「束さんが破つた！ オートロックなんぞ束さんの前では無意味無意味！」

「…………一夏、警察に通報しろ」

「ひじゅー！」

「わー！ 待つて待つて！ 束さんと篠ちゃんは呼ばれて来たんだよー…。  
・・そいつから」

「・・・は？ 父さんが一人を呼んだのか？」

「遊ばないか～？ みたいに言われたから来たんだぜー！ ぶいぶい」

「えーい！ ヒーヒースをする束、おどおどしながら束を止めようとする  
篠・・・。

どつちが姉かわからん。

それは兎も角。不法侵入した束を篠ノ之道場の柳韻さんから借りた竹刀で頭を叩いておいた。

痛みに悶える束を放置して父さんの脇にある体温計を抜いて見てみる。

・・・37・8?え？ 早くね？ まだ一時間くらいいしか経つてないの  
に下がるの早くない？

「……ちーちゃんちーちゃん！ 束さん達とゲームしよう！」

「だ、だが私は父さんを看病しなければならないし・・・」

「…………ちつ、イラつくねーい。ホルマリン漬けにして解

語しておきかえ

「ん? 何か言つたか東?」

「なんでもないよー わあわあかーかやんー遊ばつよー。」

「しかし、だな・・・ん? 父さん?」

「行つてこい。俺は大丈夫だから、な？」

「…………んー、わかつた。何かあつたら呼んでね？」

「ああ・・・東に篠ちゃん、悪いな。呼んだのに風邪ひいたわ。気  
にせずに遊んでいいってくれ」

「あ、はー…おじやめしまくねれん。」

卷之三

「アーニーがおもてなしをしてくれますよ。」

「・・・ちつ、お邪魔するよ。できたらずっと寝込んで私とちーちゃんの邪魔はしないでよ」

・・・父さん、さすがに怒つてもいいよね？止められてもいいでしょ  
までされたら我慢ならない。

束、父さんは私と一夏の父親であり、家族なんだ。侮辱されるのは  
許せないんだよ！

父さんもなんで反論したりしないんだ？

束の事は柳韻さんと総巣師匠と話して何とかするみたいだし・・・

「まわらわらやんー！」ハハハハーおとうさんからかりたゲームがい  
っぱこあるからー。」

「ハ、ハ、ハ、

「じやあ私達は行くよ。何かあつたら本当に呼んでよ。」

「うーー

父さんはまたひりひりと手を振って黙つて立ついた・・・。

「……なんだこれは……」  
「おーすげー！アニメのDVDがこいつぱいだーー！」  
「……す、じー」  
「これ、あいつのアニメとか見るんだ」

三十分後、趣旨はがらつと変わり、なぜか家の探検をすることになっていた。

父さんのお部屋に入るトマーメや特撮のロボやワニギュアやらなにやらいろいろありました。

・・・あ。ガンダムがあるな。

他にもゲームやら色々あったのだが・・・さすがにエロ本はないか。

「ちつー江口本があれば脅せたのに・・・」

「…………いいな」

ボツリと呴く。

工口本を盾に普段はしてくれない“ちゅー”とかを要求するのもあ

…そこで日本を深しつか。

二十分後

「……ないな」

「おー！ ガンダムのフレミアのついたやつがあつた！ スターウォーズとかもある！」

「う、わ……“かたなめいかん”ってのもあつた

「すゞいねこれ……どれだけ金をかけたんだろ？」

結果、工口本はなかつたようだ。

その代わり、見たことない図鑑とか漫画とかが大量に見つかった。

それになにこれ？“きんぴらごはんの歴史”って誰が読むのだろうか？

・・・せひめひ。あんぴ、ひじめひて・・・<・・・・・。

「うーん、なんか厳重だねー。」

۷

束を見ると本棚の裏に鎖と南京錠が掛けられた細長い木の箱が見え  
た。

ならば開けなければ！えっと・・・まずは南京錠を破壊「なにして  
んだてめーら」し・・・て・・・?

「ナニ...おどりやん...?」

「物音がするから見に来てみれば・・・なにしてんだ?あん?」

ま、まずい！父さんにこの部屋には入るなって言われてるから・・・死んだ。

ガツン・ゴツン・

「 「~~~~~」 」

「入るなって言つたよな？入りたければ許可を取れとも言つたよな？」

父さんに拳骨をもりい、一夏と私は頭を押される。

父さんは右手を握り拳にしたまま私と一夏を睨むように見下ろす。

「・・・はあ・・・なんで入つたのかはわかるが・・・あまり荒らすなよ。俺の刀まで持ち出しあがつて・・・」

「・・・かたな、ですか？」

「ん？ 篠ちゃん、気になるのか？」

「はーーーうちうつえのかたなもですがわたしはかたなを見るのが好きですか」「ーーー」

「・・・ううだけは柳韻の遺伝か・・・」

父さんは篠の頭を撫でながら南京錠と鎖の掛かつた木の箱を触り、鍵を外した。

中から出てきたのは黒いボロ布に覆われた棒状の物体。

布を剥ぐと出てきたのは黒い鞘。刀の鞘だった。

「これは俺が親父と爺さんから引き継いだ俺の刀……“緋桜”だ」

「……あかい、かたな……」

父さんがそれを抜くと現れたのは赤い刀身。血のように鮮やかで、桜のように綺麗な色をしていた。

・・・自然と目を奪われる美しさがある・・・なんで父さんは大業物とも言える刀を？

「あん？ 親父が爺さんからもらつたものを俺がもらつただけだ。ちなみに俺は春樹だから“春”的刀をもらい受けた」

・・・とにかく風邪治つたのか？ いくらなんでも早い気が・・・。

「他にもあつてな。夏の“蒼燕”秋の“紅葉”、そして冬の……“雪片”。それが織斑家、四季組の伝統ある刀だ」

父さんはそう言つと緋桜、だつたか？ 刀を納めると厳重に仕舞い、本棚も戻した。

・・・雪片・・・なんか惹かれる感があるな。

「あ、罰として今日はお前ひの嫌になペーマン頑へしだ」

「え～～～～～」

「黙れ。部屋に入った罰だと呟つてゐだひづが」

そう言つた父さんはすごいいい笑顔をしていた。  
・・・いじめつ子の顔だ・・・。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

束達が帰つた後、夕食はピーマンだけだつた。まる。

## 第九話、娘（後書き）

千冬が変態化。 といふか重度のファザコンになつたな。

「どうやって治していくべきか……。

さて。 今回は緋桜って刀が出ました。

織斑家、四季組には四本の刀があり、冬はもつフлагです。 がつち  
りフлагでつせ。

おまけ

「と、うか父さん？ なんで風邪治るのが早いの？」

「気合いだ」

「…………」

「だけど鈍つたなあ……昔は一時間くらいで治つたのにな

このバグキャラぬ。 と千冬は思つたらしく。

父さんの知りたくない新しい一面を知った田だつた。（千々の田記  
より抜粋）

## 第十話、親父（前書き）

八十万アクセス突破。

すげー。ハロウインの日のアクセスなんか十三万アクセス行つてた  
し。

最近は春樹の工事をどうするか迷つてますね。

・・・いらないか WWW

## 第十話、親父

本日は晴天なり。

夏が近付いてるのに今口は過(い)しやすい環境である。  
そんな中、俺は・・・。

「わーい！ ゆうえんちー！」

「おおきこ・・・」

「・・・人が多いな・・・」

「ちーちゃん！ちーちゃん！あれに乗ろうあれ！」

「少しは静かにしゃがれ」

遊園地に来ている。

千冬＆束の卒業＆中学入学祝いに無理矢理休みをもらつて来ている  
わけである。

いやー、早いものだね。千冬と一緒に引き取つてから三年近くか・  
・長いよつで短かつたな。

・・・あ。ちなみに時期が飛んだといつシツコノハナシだぜ？別に  
報告する事はないからな。

あえて言つならば千冬を鍛え（いじめ）たり、千冬を鍛え（いじめ）たり、一夏が料理の準鉄人になつたり、篠ちゃんの師匠になつたり、千冬を鍛え（いじめ）たりしたくらいいだな。

「（・・・ああ・・・私は生きてるんだな・・・）」

「・・・ちーちやん、ドンマイだよ。後で束さんが慰めてあげるか  
う」

「・・・・・・あー、いや、すまんな。つい・・・・・

今まで弟子を持ったことも自分の子供に教えた事がなかつたから嬉しくてつい・・・・すまん千冬。

後は束との関係くらいいかな？

以前に束と篠ちゃんを家に呼んだ時にお宝部屋を見たろ？なんか気になるものがあつて好感度が少しだけ上がつたのだ。  
呼び方は“それ”から“お前”に変わり、ちょくちょく遊びに来ては荒らしまくつてる。

ちなみにお前って言つたんびに拳銃で指導をしているが。

「おとうさんーあれこのつたいー」

「・・・・・私は待つてるから行つてらっしゃー

「まあまあ、楽しもづぎ」

ガシツ、ズルズル・・・

「い、嫌！あれだけは嫌なんだ父さん！」

「」

「まあまあちーちゃん・・・諦めるのも肝心だよ？」

「い、嫌だああああああつ！－」

嫌がる千冬の手を引いて引き摺りながら遊園地の定番・・・ジェットコースターに乗ることにした。

むつふつふつふ・・・いい声で鳴けよ？

千冬

「キャ一」

「うわああああい！一夏

卷之三

結果。

גַּעֲמָנִי . . . .

「こ、怖かつた・・・！」

「・・・泣くほどか?」

千葉マジ泣き。

篠ちゃん、ガタガタ震えて俺にしがみつく。

ちなみに一夏と束ははしゃいで疲れなんざまつたく見えなかつた。

ううむ・・・少し反省せねば・・・。

しがみつすべりちゃんと背中を擦り、マジ泣きする千冬の頭を撫でた。

「すまんすまん。次はあれな？あれなら怖くないだろ？」

「・・・父さんのいじわる・・・」

「悪い悪い」

まったく悪びれずに千冬の頭を乱暴に撫でた。  
千冬はムスッとしていたが仕方がないみたいに笑うと座っていた  
ベンチから立ち上がった。

・・・なんか見られてるな・・・そんなに気になるかバカヤロー。

「なあ、あの子可愛くね？」

「むしろ俺ほどの子の方がいいな」

「ねえねえ！あの入力ツコよくない！？モデルさんみたいだよ！」

みたいな会話は春樹達には聞こえなかつた。

といふか聞いていたら間違いなくその遊園地は血でまみれた地獄となつてしまつだらつ。

だつて・・・親バカだもの。みつを。

「ねえ

「ん? なんだ?」

「また本、貸してよ」

「いいぞ・・・ってかもう読んだのか? タウンページ並みに分厚い  
はずだが?」

「・・・学校、面白くないもん」

そう言つた束は少し拗ねた様な顔をしてそっぽを向いた。  
うーん・・・まだ心を完全に開いてくれないな・・・。

千冬も束と同じ中学校に行かせたがやはり馴染めない様子。  
あそこまで早熟してゐる上に世界が羨むような頭脳を持つから普通の  
人間では付き合えないだろう。

・・・心配だ。

「やつほー!」

「い、いちかー! まつてよー!」

「走ると転けるぞー! ・・・で? 中学校はどうだ? 一人共。 馴染んだ  
か?」

「まあ、私は……うん。慣れた……よ?」

「なんで疑問形なんだよ」

「ちーちゃん、眞に気に入られたけや思やされてるもんねー」

「た、束…」

「なぬ・・・まさか千冬、彼氏か? 彼氏ができたのか? ん? 言え。  
早く吐け。そいつをコンクリート漬けにして東京湾に沈めてやるか  
」

「ち、違つ! 違つよ父さん! (私が好きなのは父さんだし・・・何  
を言つてるんだ私はああああああつ….)」

「むしろ鮫の餌にしたら?ちーちゃんに手を出す奴は見敵必殺サーチアンドデストロイでい  
いんじゃない?」

「・・・束」

ガシツ!

俺と束は同時にガッシリと握手をした。  
ここに千冬を守る会の設立した!

「これ、ちーちゃんに好意を寄せてるやつ、厭らしく田で見るやつ  
のリストだよ」

「ぶつ血ケユニー」

「いや、でも私達は親子だし……」

中学生にはありえない大きさの胸から紙の束を出す束、その紙の束をイイ笑顔で読む春樹、なんか自分の世界に入った千冬……。遊園地の一角がかなりのカオスになっていた。

そこに新たな火種が……。

「ねえ坊や達、おじわん達といい『アシ』しないか?」

「なあああ! 息子に手を出してんじや! ハハハアアアアアツ……」

「けつぱ! ?」

いかにも誘拐するぜー! と言わんばかりに一夏と篠ちやんに声をかける変態をドロップキックで蹴り飛ばした。

……そして。現在、春樹達のいる場所はメリー「パー」ランドの上である。

そこに春樹の脚力で蹴り飛ばされた変態はどうなるでしょう。

「ふむあああああああああ……」

模擬回答。地平線の彼方まで飛び。

遠心力も僅かに加わり、変態は星となつた・・・。

参考。春樹のキック力はダンプカーが時速65?でぶつかる時に生じる力と同じである。

無論、手加減はあるが・・・。

南無。

「Jの如月つてあのクソガキか?」

「うん。入学した時に馴れ馴れしく声をかけられたよ・・・目が気持ち悪かつた」

「・・・うむ。慰めてやろう。我輩に抱きつきたまえ」

「断る。ちーちゃんの胸に埋まる方が・・・ちーちゃんの愛が痛いい〜〜!」

ギリギリと頭を掴まれる束はバタバタと暴れるがアイアンクローラーをする千冬は真っ赤になりながら極めていた。

・・・なんだかんだでいいコンビだよな。二人は。

ちーちゃん痛い〜!とか黙れ!お前の胸に自分で埋まつてろ!つてやりとりは聞かないフリしてメリー・ゴーランドの馬に乗る一夏と篠ちゃんを下ろした。

「あの二人は無視して何か行こう。他人のフリを……無駄か。俺、顔は千冬に似てるからな……」

グルッと周りを見ると目、目、目。すげー見られてるな。

取り敢えず千冬と束の首根っこを掴んでズルズルと引き摺り、一夏と篠ちゃんとその場から離れた。

・・・え？ナンパ？丁重にお帰り願つたら急に手の骨が砕けていな  
くなりましたがなにか？

一時間後

「うつ・・・・・気持ち悪い・・・・」

・・・まさか絶叫系のオンパレードとは予想だにしなかつたな・  
・ほら千冬。水飲んどけ」

「……………ありがとうございます、父さん」

・・・はあ。俺は絶叫系のアトラクションは好きだがまさか千冬がここまで苦手とは思わなかつたな。

グロッキーになつてベンチで死んでる千冬にペットボトルのミニラ  
ルウォーターを渡す。

うーん、一夏と束はピンポンしているが篠ちゃんはギリでアウトか。  
なんか疲れてるし。

「・・・大丈夫?なんか悪いな篠ちゃん」

「だ、だいひょうぶでふ・・・」

「駄目だ」いや

「ふらりとすゐる雑巾に呆れた感じに田を向ける。  
「うむむ・・・・・これから飯食しようとしたんだが・・・」  
「えへこむへ。

「たべるーーー

「食ひいひーーー

「お前ひて聞いた俺が馬鹿だつたな。千冬ひ雑巾をせめいひすねへー。

「・・・・お腹も空いたから食べる」

「わ、わたしも

一夏と束は即決。バイキングを希望。

千冬と雑巾ちゃんはグロッキーになりながらも空腹を抗議。

・・・よつて飯を食ひおひ。

「・・・バイキングに行きたいかー

「「おーーー」

「おーーー？」

「・・・いや、雑巾。真似しなくていいからな

ノリがよべておじさんほ嬉しいよ。

「、」の味はあああああああつー！

「・・・・今は宇宙からの交信か？カレー好きな料理人の顔が浮かんだんだが・・・」

「・・・・・頭、大丈夫？」

「んだと『リラ』」

「バイキング終了のお知らせ。

案の定、食いまくったのは一夏だけ（・・）だつた。束も暴飲暴食するかと思ったのだが俺が貸した“遺伝子工学の全て”を読むのに夢中だつたからほとんど食べてない。あんだけテンション高いくせにそれはないわー。と思つた俺はおかしくないはず。

千冬と篠ちゃんは和風コーナーの料理を手当たり次第食らい廻していた。

・・・千冬は兎も角、篠ちゃんは小さい体に入らないような量を食べていたのは気のせいか・・・？

・・・え？俺？珈琲とサンドイッチしか食べてませんが？  
だって腹減つてないもん。

なのに我が子達の陰謀により、かなりの料理を食わされた。

おのれ。俺を太らせたいのかてめーら。

「絶叫系逝く？今なら団の中をぶちまけひらねー」

「い・や・だー。」

「ちちがにそれはないよ」

断固拒否シ一と諱わんばかりに首を振る千冬、呆れた顔で見る束。  
ちよつとした冗談だらうがよ・・・。

絶叫系のアトランクションはバスしてジョーズに似たツアー式のアトラクションに搭乗。

・・・これがまた恐ろしい。本物のライオンとか使って説明していくんだが。

どこのサファリパークだコノヤロー。

バンバンとバスを叩くライオンに一同は怯えていたが、俺が一睨み  
するとあら不思議。全速で逃げた。

ふふん。ライオンとバトった事がある俺を讃めんなよ。実家にもワ  
イオングッてるんだよー。

・・・取り敢えず千冬と一緒に夏には黙つといつ。

あそこは動物の魔窟に加えて変態どもの城だからね。うふうふ。

「ねとうわさアイスクリーム・アイスクリームたべたい！」

「束さんもーー。」

「勝手に走り回るなーつて待てや」「アアアアアアツーー。」

「わわーー。」

「キヤーー。」

「・・・・・・束、父さんが嫌いじゃなかつたのか・・・・・篠、私達も行こつか」

「あ、はー。」

いくつかアトラクションを回ると一夏と束のテンションがランナーズハイみたいになつていた。

俺はそれを追い掛ける。その後ろを千冬と篠ちゃんが手を繋いで歩く。

・・・そのせいで周りから微笑ましい、生暖かい視線を向けられるはめになつた。

「ぜえ・・・ぜえ・・・勘弁しろよ。今の俺はおっさんなんだぞ・・・」

「・・・それ、全国のおっさんに喧嘩を売るよつたセリフだよね？  
父さんほどおっさんは似合わない気がするぞ」

「経験は取り戻しても体力は無いに等しいんだよ。知ってるだろ?」

千冬を鍛え（いじめ）る際に自分も鍛えてはいるが全盛期にはまだ  
まだ程遠い。

・・・だが一般人よりかは遙かに上だが。

リハビリがてらじジジイと柳韻とバトルをしているが引き分けが多い。

前までは瞬殺できたんだけどね~。

「あ、一夏!待て!」

「あ、いいよ父さん。私が捕まえるから休んでて」

「千冬?おい!」

また一夏が走り回り始めたので捕まえようとしたが千冬が手で制して千冬自身が一夏を追い掛ける。

・・・氣を使わせちまつたか・・・。

ため息をつくとポスンと隣に誰かが座った。

そちらを見てみると東がアイスクリームを舐めながら座っていた。

「・・・・・・・」

「……なんか喋れよ。ただ単に黙つてるだけじゃわかんねーぞ」

「……なんで私まで呼んだの?」

「……悪い。あんなにはしゃいで今更それか?」

「う、うぬやこよーいいから嘘うそよ」

束は少し顔を赤くして叫ぶが今更感があるから怖くもないな。

「なんでと聞かれてもなあ……ただ単にお前を楽しませたいだけ  
だけど?」

「え?」

「お前、たまにだけど“自分は何のために生まれたか?”って考  
てるだろ?」

「……」

「答えるひとつとして今日の遊園地だ。今日の一日を通してどうだ  
った? 楽しかつただろう? 一夏とはしゃいで楽しかつただろう? ん?」

「それは……」

「それでいいんだよ。“自分は何のために生まれたか?”なんて誰  
だって思つ。人生を通してそれを見つけるのが普通なんだよ……

今の子供であるお前が難しく考えなくていいんだよ。今はただ楽しめ。お前はまだこれからなんだぜ？「…

「…・・・束さんは・・・私は・・・」

「迷え。悩め。探せ。お前にも俺のよひこ“答え”を見つけられるはずだよ」

最後にガシガシと頭を撫でると持っていたアイスクリームのコーンを食べ飛ばした。

そして丁度、逃げ出した一夏を千冬と篠ヶ谷さんが連れてきた。

・・・一夏の頭にタンゴ<sup>ガ</sup>がある・・・千冬に殴られたのか。

「待つた？」

「いや。お疲れ、一夏は速かつただろ？」

「…・・・まあね

一夏を肩に担いと千冬と篠ヶ谷さん、そして束と観覧車に乗る」という話しかけてきた。

した。

その途中、束は俺に近付くと少し迷った感じで話しかけてきた。

「…・・・束さんも見つけられるかな？」

「望めばな……で。改めてはじめまして“篠ノ之束”。俺の名前  
は織斑春樹だ」

「……まだ完全に心を許した訳じゃないけど……よろしくね。  
私は篠ノ之束。あなたに興味が沸いてきたよ」

「はは。いいぜ？簡単に心を許すのは本当に信頼してる相手だけに  
しな」

一夏を肩車し直すと束と握手する。

観覧車に乗る俺達。束の顔は少し晴れやかになっていた。

織斑春樹、三十五歳。

織斑千冬、十三歳。

織斑一夏、四歳。

少しずつ束と近づき始めた。まる。

## 第十話、親父（後書き）

無理矢理すぎる気がするな。

ここにて束の研究者フラグ&IS作成フラグ。遺伝子工学っぽい感じがするもん。

束は少しデレましたがまだまだ先ですよ。ヤンデレ化がゴールです。

次回は時間が飛ぶかも。

## 第十一話、親父（前書き）

あとひょっとで百万アクセス。

IIS専用機はマジで悩む。いるかいらんか読者はどうやらか……。

とこつかIIS史上初のネタを使いそつなんだが……。

今回は日常編みたいな。IISには欠かせないあの方が出ます。

## 第十一話、親父

本日は晴天・・・なり?

まだ暗いからわからないが天気はいいと思つ。

現在の時刻は午前五時半。よい子の皆、サラリーウィー戦士の方々は夢の中だひつ。

「ふああああ～・・・ねみい・・・」

「ほひひ父さん、早く行くよ

「うこいこ・・・」

「おれもねむい・・・」

我らが織斑家は午前五時半に起床、支度をして朝のランニングに出掛けの前である。

千冬が剣道部に入ると鍛えるとスタイル維持の両立で規則正しい生活を強要された。

クソ眠い中、千冬に一夏と一緒に叩き起しきれ、ジャージに着替えるのは嫌にイライラする。

実際に一夏は二つくりこつくり船を漕ぎながら隣をゆったりとしたペースで走つてゐるし。

「あ、おはよひびきます」

「じいちゃん」

「おはよひびきまく」

「う～、おはよひびきましゅ」

すれ違ひランニングをする人に挨拶をしながら定番の川原を走る。微笑ましそうにおっさんは一夏を見ながら反対側に走つていった。

しばらく走ると後ろから誰かに頭を叩かれた。

「おはよう春樹。相変わらず眠そうだな」

「・・・・俺は夜行性なんだバカヤロー。てめーみたいな鶏じやねーんだよバカヤロー・・・バカヤロー」

「なぜ二回も言ひつい？お前、昔は朝型だつただろうが！」

「人は時間が過ぎれば変わるぞ柳韻。実際に煙草を吸わなくなつたし、テロリスト相手に暴れる」ともなくなつたし」

「・・・テロリスト相手に暴れるのはお前くらいだぞ」

「お前も昔はヤクザ相手に無双してたうが・・・ふああああ～・・・  
・あふつ」

欠伸をしながら隣に並んで走る柳韻を見る。

「いつ、毎朝ランニングしてるらしいがよくやるもんだな。俺なんか親父が死んでからはまったくしてないぞ。

その隣に篠ちゃんがジャージを着て走っているけど。

「で、お前さんはまたやったのか？」

ゴスツ

「は？何の事だ柳韻。俺が何かしたと？」

ゴスツ ゴスツ

「しだらー！また墮としやがつて！お前の体質フランメイカーは底無フランメイカーしか！」

ゴスツ ゴスツ ゴスツ

「はあ？フランメイカー体質フランメイカーだあ？親父みたいなリア充じゃねーよバカヤロー！」

ゴスツ ゴスツ ゴスツ ゴスツ

「こいつ・・・昔から鈍感は治らないのかー！？」

ゴスツ ゴスツ ゴスツ ゴスツ ゴスツ

「むしろ鋭いぞ俺は。半径4？以内ならスナイパーを見つけられる

ぜ？それに俺はモテないんだよクソヤロー！」

「ゴスツ、ゴスツ、ゴスツ、ゴスツ、ゴスツ、ゴスツ

「「・・・ やんのか？」」

「ゴスツ、ゴスツ、ゴスツ、ゴスツ、ゴスツ、ガスツ！！

「表出るやー、ぬつ殺してやんよーー！」

「上等だ春樹！今度こそ俺が勝つーー！」

「「篠ノ之流・無手奥義“居抜き”！」」

ズガアアアアン！！

「・・・ なんでこうなるんだ・・・」

千冬の呴きが静かな朝に響く爆撃音に打ち消されるのだった・・・。

ちなみに一夏と篠ちゃんは川原で石を集めてたり、竹刀を千冬と振つてたりしたそうだ。

時間は飛んで午前六時四十五分。帰宅すると朝飯の用意をする。

今日はスクランブルエッグにワインナー、ベーコンにサラダに食パンにした。

え？ 柳韻？ 俺の完封勝ちですか？

「「「いただれま」」」

「 いただきまーす！」

「・・・またお前が束・・・」

「おお！ 美味そうだね。さすがは一ちゃんの父親！ やるやん！」

・・・・・作ってせるから座ってろ」「

わい!

遊園地の時から朝飯時に束が乱入してきたりするのはデフォになつていた。

柳韻達の家では食べないらしいがなぜか織斑家では食べるのによく来たりする。

鼻歌を歌う束にも同じメニューを渡すと自分も食事再開。

「あ！やばい！時間が・・・束、早く行くぞ！」

「ああー待つてよひーひやん〜〜！」

「車に気を付けろよ～」

「行つてきま～す！」

「じゃあねいつくん！また夜に来るから（・・・・・）ー。」

「来んna」

現在の時刻、午前七時半。千冬、束、登校時間。  
千冬に弁当を渡すと千冬は食パンを口に加えながらバタバタとベタ  
な朝の風景を見せながら束と学校に向かつた。

・・・待て。ナチュラルに束に俺の弁当を取られたんだが・・・。

俺、飯抜き？

「おとうさんはやくはやくー！」

「それよりもお前は大丈夫か？ハンカチは？ティッシュは？弁当は  
？」

「だいじょうぶだよー。」

束に貸していた“ロボットとは”と“宇宙とはなんたるか”を本棚に仕舞いながら歯を磨き、準備をする。

「はー、後十五分か・・・少し急いづ。

・・・ふむふむ。束はまた何冊か本を持つていったみたいだな。何の本かはわからないが束はよくあんなの読めるな。親父の親友からもりつたものを保管しているだけだから俺は読んでないし。

「おーし。行こうか~」

「れつづじー!」

午前八時。俺、一夏、登園＆出勤。

ママチャヤリに乗って一夏の幼稚園にGO。一夏は後ろの席にじんまりと座っている。

これが朝の日常。

一夏を幼稚園の先生に渡すと俺はさうさと仕事に向かつたとえ、美弥先生（名前で呼べと言われた）がなんか熱っぽい視線を向けてたとしても。

「はよーいります」

「おや。今日は早かつたね春樹君」

「はは。一夏が準備が早かつたからですよ十蔵さん」

「はつはつは！父親してゐるね春樹君、私も子供が欲しくなつたよ」

「いやいや、子育ても辛いですよ。一夏なんか最初は夜に泣いては疲れましたからね・・・」

清掃員として働く会社に来ると先輩に当たる巒木十蔵さん<sup>くつきわきじゅうざうさん</sup>に挨拶する。

十蔵さんは笑いながら緑色の制服に着替えていたが本当に寝不足になるぞ。俺は働いてなかつたからよかつたものを。

「今日も頑張りましょうか春樹君

「うす

午前九時、仕事開始。

今日もいつもと変わらぬビル内部を清掃することになつた。

普段も変わらず、ビル内部を清掃したり、備品の補充したりするのが俺達の仕事。

たまにキャリアウーマンのお姉様方に食事に誘われたりするが全て断る。

千冬と一夏と食べるのが一番いいから。

「・・・春樹君、相変わらずモテるね」

「はい？十蔵さんまでそれを言いますか。俺はモテないですよ」

「（・・・ルックスも性格もいいのに勿体無いね。彼、自分に寄せられる好意にまったく気付いてないようだ）」

「・・・なんすか。俺、なんかしました？」

「春樹君。それを直さないと結婚はできませんよ？」

「結婚はしませんから。一人の子供が一人立ちできるようになつて、なおかつ余裕があつたらしますよ・・・たぶん」

トイレにてトイレットペーパーを投げながら補充すると十蔵さんがため息をついていた。

・・・本当になんかしたか俺？

「（つむ。頑張りたまえよ諸君。おそらくせ）の会社の未婚のベテランも新人の女性はみな春樹君を狙っているだらうしね。私は恋が実るのを祈るよ」

「えー、次は十七階の資料室の清掃っすね。十蔵さん、本業の方は（・・・・・）いいんですか？」

「妻に任せているから大丈夫だよ。で、早く行こ」つか

「うー」

実は十蔵さん、会社の清掃員なんてやつてるが実はこの会社の親会社の社長なのだ。

視察の名田で十蔵さんの經營する会社の子会社で清掃をしながら横領やら賄賂、セクハラについて調べてるのだ。

・・・最初に聞かされたのは昼休憩だつたな。  
十蔵さん、奥さんの愛妻弁当を食べながら

「実は私は社長なのだよ春樹君」

つて言われた時は飲んでいた珈琲を吐き出した。  
しかも親会社の社長と聞いてビビつて腰が抜けたりはしなかつたが逆に納得がいった。

だつて十蔵さん・・・清掃員なんて生温いオーラを纏つてるもん。それも人の上に立つ親父に似たオーラを。

それからは十蔵さんはたまに酒を飲み交わす仲になつた。  
奥さんとも会つたが若い。歳（奥さんのために伏せるよー）らしいが二十代にしか見えねーよ・・・。

「あーまた隠れて煙草を吸つてやがるなー」「アアアアアアアツー！ てめーうああああああつー！」

「あ、やべー春樹さんだー！」

「ヒイイイー許してください春樹さんー！」

十蔵さんからの頼みでたまに会社の規則を破るものを利用したりしている。

そのせいか会社の老若男女問わず “春樹君”とか“春樹さん”とか“アニキ”とか“親分”って呼ばれるハメになってしまったわけだ。

「煙草を吸うなら喫煙所で吸え！」など吸つたらヤー臭くなるだろ？がー！」

「すんませんしたー。」

「許してほしければ食堂の日替わり丼を奢れ。あ。後は口口ッケパンな

「・・・春樹君、それは中学校のパシリとなんら変わらないよ

これが会社で働く俺の仕事模様。

午前九時に始まり、正午に昼休憩、午後一時半に仕事再開。  
それからは午後五時半まで仕事をするのである。

「じゃあお疲れ春樹君。また明日もお願ひするよ

「十蔵さんも。また暇になりましたら行きましょうよ

私服に着替えながら飲むジエスチャーをすると十歳さんは満足気に頷いた。

十歳さんと飲む約束をすると外に出てママチャリで一夏を迎えて行く。

その途中に働いていた全員に声を掛けながら幼稚園に一直線。

「あ、おとうさん～～！」

「悪い。待たせたか？先生、いつもありがとうございます」

「あ、いえいえ！」

「ほひ美弥先生、アタックアタック！」ヒンヒン

「え、でもでも・・・私は・・・」

「じゃあ俺はこれで。一夏、乗った乗った」

「あ、ちよ、あのー」

聞こえない聞こえないーーー美弥先生の熱っぽい視線と慌てた感じの声は知らない！

・・・最近は他の先生方の田も肉食獣のそれだからジ怖い。

とこうわけで退散。あんな空氣の中にいたら死ぬ。  
ママチャリを漕ぎながらチャリンチャリン家に向かつ。

「今日の飯、餃子アルヨー」

「えー、おれはとんかつがいいな~」

「つべこべ言ひと飯抜き、アルヨー」

「『めんなさ』……といつかおとつせん、そのしゃべりかたなに?」

「似非中国人アルヨー……やめよ。なんかイライラする」

「ふーん……」

ママチャリを走らせながら一夏と恒例の幼稚園で何があつたかを話す。

前までは先生方の目が怖いとか言っていたが今は篠ちゃんや同年代の友達の事を話している。

取り敢えず先生方の話はスルー。俺も怖いもんよ。

「あ。おとうせん、ちふゆねえがいる」

「はい?千冬……いたわ。何してんのあいつら?」

「ちーちゃんちーちゃん、あの人の写真いらない?前に盗みビ・・・  
げふんげふん!撮ったものがあるよ」

「全部寄越せ。ネガもメモリーもだ」

「毎度！報酬はちーちゃんの愛・・・いだだだだだつ！」

「・・・ほお・・・シャワーの最中の写真があるのか・・・」

千冬がなんかデジカメや一眼レフの写真を見ながら束にアイアンクローしてるんだが・・・。

周りからかなり浮いているが話しかけるとじょつか。

「おい千冬」

「・・・なんだ父さんか・・・何をしてるの？」ダラダラ

「・・・一夏を迎えて帰る途中なだけだが・・・千冬、鼻血出てるだ」

「おつと。私としたことが・・・」

「ちーちゃん痛い〜〜！！天才の束さんの頭が割れる〜〜〜！」

「むしろ天災だな」

「・・・妙にしつづくるなそれ。ほりほり、わっと帰るわ」

学校帰りの千冬と束を加えて家に帰宅。

束は違和感なく我が物顔してソファーにふんぞり返っていた。

「こっくんいつくん！ゲームやひつゲーム！束さんと勝負しよう！」

「いいよーー！」

「帰ってきたら手洗いうがいだバカども。わざと洗面所に行け」

「ぶー。いいじゃんそん」「絞め殺すぞ」こっくん行こうか！」

うむ。素直なのはいい事だな。

ちょっと右手をバキバキ鳴らしながら笑いかけたら顔を真っ青にして洗面所に行つたよ。

え？ 酷い？ そんなのは俺の辞書にはない。

「といつかおい。篠ちゃんとかと一緒にいるくていいのか？」

「束さんはあんなのよりちーちゃんやこっくん、貴方と一緒にいる方がいいよ。篠ちゃんはあれに気に入られてるし・・・」

PS3でアーマード「アやりながら束は寂しそうに呟いた。

取り敢えず柳韻、ジジイ。てめーら死刑。

束となるべく話したり付き合つよつて言つたのにあの馬鹿一人は・・・  
・頭が痛い。

「・・・今日は泊まつてけ。お前の事だから着替えとかあるんだろ」

「・・・いいの?」

「普段から遠慮なんかしてないから今更だな。千冬、お前の部屋・  
・喰われないよう気に気を付ける」

「・・・ちーちゃんの・・・部屋・・・でへへへ・・・」

「父ちゃん、部屋の変更を提案する。ベランダだ、ベランダにするん  
だ父さん!私はまだ乙女を散らしたくない!!」

「・・・・・・・・・・難題にぶち当たつたな」

この変態たばねをどこに寝かせようか。

一夏は俺と寝るのが当たり前だから却下。千冬は一人で寝ているか  
らやつしきしたら・・・千冬、泣くな。

「なら皆で寝るのは・・・死ねつーーのポンコツが一束さんの道  
を阻むでねえ!」

「それだー束、たまにはいこ」と叫びやないか!」

「えへへへ、ちーちゃんに褒められたよ」

「・・・俺、確かお前が俺の布団に潜り込むの禁止にしたよな?千  
冬、貴様は約束を破るのか?」

「父さん成分が足りなくなつたから補充するだけだ」

「…………なんだその未知なる元素は」

「というわけで今日は久しぶりに、本当に久しぶりに父さんのベッドで寝かせてもらおう」

「束さんはち一ちゃんに抱きつい〜！」

「おれはおとうさんとねる〜！」

脳内会議・・・会議・・・会議・・・終了。

結論。諦めよ。

「もうやだ・・・どこで育て方を間違えたんだ・・・」

「大丈夫だ父さん。父さんの愛が強かつたから今の私がいるんだ」

・・・今日の千冬、なんか壊れてる気がするな・・・。

なぜだ。俺は育て方を間違えたのか？いやいや、ちゃんと愛情を適度、過剰に注いでそれはもう、親バカレベルに育てたんだが間違えたのか？

ふと目を向ければ束と一緒にゲームに夢中。千冬はそれを見ながら自分も参加しているがイマイチの様子。

「ふははははーー束さんのマカイルを食ひついーー！」

「なつーくわつー近接武器はないのかつー！」

「ちふゆねえがんばれーーー！」

・・・まあいいか。不自由なく、不便なく暮らせるなら何も言ひつ事はないな。

台所に向かつ途中にリビングにあるテーブルに乗るパソコンが皿についた。

「・・・ロボット？」

束のパソコンいらじぐ、そこには何かの設計図が書かれていた。

インハイニッシュストラトス

・・・“IS”？

駄目だ。わからん。アーマードコアの設計図やガンダムとかならまだしも、こんなのわかるわけがない。

昔は頭はよかつたんだがなあ・・・老いは敵だな。うん。

織斑春樹、三十五歳。

織斑千冬、十三歳。

織斑一夏、四歳。

寝るときに抱きつく千冬と束の母性の象徴に成長したなあと感じた。まる。



## 第十一話、親父（後書き）

轡木十蔵登場。IS学園フラグが建ちました。

その他諸々ですけど。

ちなみに、原作一夏ラヴァーズにフラグは建たないことにしました。

誤解されてる方もいますが春樹は義理の父親です。近親相姦？見た目だけだろって思いますね。

実際に世界の富豪は30年下と結婚なんてあり得るし。

愚痴るのはこれだけにして。次回からちょくちょく時間が飛びます。

## 第十一話、親父（前書き）

これ、たぶんエリの一次作初のネタじゃね？

ちよつと悶こよー。

今回は一年ぶりの時間が飛びます。

だつて・・・書くことないもん。

## 第十一話、親父

本日、晴天なり。

時間が流れるのは早いもので一夏は小学生になり、千冬は受験生、生徒会長になつていた。束や篠ちゃんもすくすく成長し、篠ちゃんは僅かながら一夏に恋をしていくようだ。

「…………他人の色恋沙汰は気付くのになぜ自分のは気付かないのか……」

「なんか言つたか？」

「いや、なんでもない。父さん、早く束の所に行こう」

「あいよ」

千冬は生徒会長になつたせいか、かなりクールになり、口調もピシツー…とした感じになつていて。

髪型も昔はセミロングだったが、今では俺の真似をして長く伸ばしてポニー テールにしている。

なのに千冬は髪とか手入れしないから俺が櫛を使つたりしている。

・・・さうに悪いことに千冬、かなり俺に依存して前に俺のシャツを盗んだことがあつたりする。

最初は間違えたのかと思ったがサイズも違つし、洗濯物は分けてるからおかしいと思ったわけである。

「……悪いですか？私は父さんの匂いに包まれて眠りにつくのが一番いいんですよ。最近はまつまつとベッドに入れてもらえないから我慢してるんだ」

「うん。やめて。そのセーフは勘違こられるから、な？」

十蔵さんに相談したらなんか暖かい田で頑張りなさいって言われた。いわゆるファザコンらしく、かなりの重度だと十蔵さんが言つてた。

・・・第一の姉さんになりそつだな。貞操、無くなるんかな・・・。

親父との約束？で貞操を捧げる相手は婚約も考えられてるから簡単にやつたりできませんよ俺。

なのに姉さんや姉さんや姉さんが昔、毎晩毎晩毎晩夜這いをしてくるからな・・・。

「・・・・・・・・・鬱だ」

「何がだ？父さん」

「なんでもない・・・なんでもなことよ。うん」

中学三年生になつた千冬はもう大人の女性の体つきになり、ナイス

バディーなスタイルになつてゐる。

・・・つまり、千冬はそれを惜しみ無くぐいぐいと俺に押し付けるわけだ。特に胸。

頼むからやめよう千冬。周りも怪訝かつ不思議で見てるから。

「発情したのなら私はびぶつかると・・・、いやぴりーへ・・・

ガツン！パタン・・・。

「・・・・・何見てんだ」「アハ・・・・

ササササツ！

「・・・・・はあ・・・・なんでこなんになつたのだろうか・・・」

変態発言をする千冬にヘットバットをかますと千冬は氣絶し、周囲にいる野次馬？の連中を睨んで黙らせた。

それからため息をついて千冬をおんぶして篠ノ之神社、篠ノ之家へと向かう。

千冬、今こそ剣道部は引退しているが中一で全国大会に出場、優勝して日本一になった経歴がある。

新聞にも取り上げられ、類い稀なる剣の才に目を付けられて剣道部

が強い高校にスカウトされている。

だが千冬はスカウトを断り、家に近い高校を受験する事になつている。

本人曰く、父さんと一緒にいたいから。剣道部が強い高校に行くと寮に入るかもしれないから嫌だ。だそうだ。

「おーい来たぞ~」

「ふはははははーよひこりこりしあいました束さんの秘密基地へーさあ入つて入つてー!」

「・・・相変わらずでかい上に散らかってるな。掃除くらいはしたりどうだ?」

「めんどくさいからやだよ。はーくんが掃除してくれたら束さんは嬉しいな!」

「却下、だ。千冬や一夏の世話に忙しいんでな・・・で?何の用で俺達を呼び出した?」

篠ノ之家・・・正確には篠ノ之家の庭にあるプレハブの中にある本棚をすりして中に入ると束が高笑いしながら待っていた。

テンション高すぎでうぜえ・・・と思つた俺は悪くないはず。

背負う千冬を下ろして(篠ノ之家に着く前に起きてた)束の後を追い掛ける。

ちなみに現在地はプレハブの地下、束曰く、秘密基地の通路を歩い

ている。

以前に物置小屋として使っていたプレハブを改造して秘密基地を造つたと聞いた時は睡然としたぞ。

「いやー、まさかちーちゃんだけでなくはーくんも来てくれるとは思わなかつたよ」

「暇だからな。今日は仕事はないし」

「父さんこの人に我はあり、だ」

「もつお前黙れ千冬」

アホな発言をする千冬を呆れた田で見るとなぜか威張る千冬。拳骨を食らわせた。

踞る千冬から束に目を移すと束は視線に気付き、二口二口笑いながら新しい目印、機械仕掛けのウサ耳をピロピロ動かしていた。

実はこれ、俺がプレゼントしたものだ。

前に家で部屋を片付けていたら昔にマッシュド科学者しゃていがプレゼントしてくれた超高性能多機能の力チュー・シャが出てきたのだ。

せつかくだからそれを弄くつてドックタグにしようかと思つたら束に強奪され、ウサ耳に進化を遂げたのだ。

それから束はそのウサ耳を気に入り、防水加工、新機能追加などをして入浴、寝る時も外さなくなつたのである。

ちなみにはーくんとは束が勝手に付けた俺のあだ名?である。毎回毎回束に飯を作つてやつていたらなんか呼び始めたのである。

・・・これって餌付けか?

「さあさあ」覧あれ!これが束さんの史上初、最高傑作となる“インハイ”<sup>インハイ</sup>トスマトラトスS”なのだー!」

「・・・おこおこマジかよ・・・」

「ついに完成したのか・・・」

「ん?千冬は知っていたのか?」

「つむーちーちゃんにはこの子(HU)の試作運転の手伝いをしてもらつたことがあるから知つているのだよーくん!」

「・・・・・・へー、つまりは勉強もせずにサボつてこんな事をしてたど・・・?千冬・・・今なら言い訳聞くぜ?」

「・・・あー、いや、そのー、なんといつか・・・」

束に案内されたのは秘密基地でも広い空間、束の研究室のような場所。

そこには白い甲冑のような物体がスポットライトに当たられて輝いてる。

ていた。

駄菓子菓子。

千冬が最近帰るのが遅い理由が束の言つTISインフィニッシュ・ストライプスだとしたら話は別。勉強サボつて遊んでいたのは許さん。

・・・成績は優秀だからあまりキツい事は言わないつもりだが。

「はーくん、ちーちゃんは束さんの手伝いをしてくれただけ。ちーちゃんは悪くない、悪いのは束さんだよ」

「ほほほつ・・・なりば千冬の代わりに“オハナシ”してもいいってことだよな?」

「・・・・・わーて束さんせ」の子の最終調整をしないと

「束、貴様裏切つたな!—」

「だつてだつて!はーくんの“オハナシ”は束さんでも耐えられないとだよー?ならちーちゃんを生け贋に出しかないじゃん!—」

「貴様あーー・・・手伝つてやつたのにそれはないだらつー底づか何かをしりー!—」

・・・え?一人はなんで慌てるかつて?

簡単な話が“オハナシ”的内容だな。

正座をさせてから膝に重しを乗せて延々と説教するだけだ。  
まあ、最短で七時間だから完全にトラウマになるだろ？

・・・・・親父にやられたことあるじ。その時は剣山の上に正座させられて重しを百キロ分乗せてニヤニヤ笑いながら親父はそれを見てた。

氣で足を強化してなきゃ今頃あの世逝きか足が穴だらけになつていただろ？

やられたのは一回だけ、俺が親父の身長を抜いた時だな。

「取り敢えずそのインフィニットストラトク<sup>ス</sup>を説明しろよ

「インフィニットストラトス。インフィニットストラトスだよはーくん！」

「・・・・“Infinite Stratos”ねえ・・・」

束によれば前に俺が貸した“宇宙とはなんたるか”シリーズ三作品を読んだ時にビビッときてISOを造ることにしたらしき。

宇宙空間での活動を想定して作った（造った）マルチフォームスース。

束にスペックの説明を受けたがかなり半端ない。

宇宙空間での活動を可能にする皮膜装甲。<sup>スキンバリヤー</sup>

無重力の宇宙空間での移動に使われる推進機。<sup>スラスター</sup>

広い宇宙空間を見渡すためのハイパー・センサー・・・。

どれも画期的な発明であり、おやじくせ世紀の発明となつたHS  
である。だが。

これだけのスペックを見て不安要素がある。

皮膜装甲スキンバリアはあらゆる攻撃を防ぎ、推進機スラスターは現存する戦闘機を遙かに凌ぐ高速機動を可能にし、ハイパーセンサーは隠れる敵を探し出すことができる……。

間違いなくそこいら（・・・・）はHSを軍用兵器として使うだろうな・・・だとしたら発明した束は世界から狙われるだろ。

「・・・は？欠陥があるのか？」

「うん。ちーちゃんは問題なく使えたんだけどね、なぜか実験してみたら女性にしか反応しない（・・・・・・・・）んだよ」

「・・・・・まこつたな。いつや世界は変わる（・・・・・）ぞ」

男性や女性など性別が問われないならばいい方に世界が変わることはあるが、女性にしか反応しないならば間違いなく男尊女卑の“理”は崩壊する。

HSはあらゆる兵器の頂点に立つ。ならば使える女性が優遇されるのは目に見えてくる。

新たな世界……“女尊男卑”的世界が出来上がる。

「・・・束、絶対に世界には知らせるな。これはもう世界の新たな火種になる」

「・・・あの~、はーくん?」

「まずは情報規制をしてからあそこでやられるとか?いや、まずは情報が漏れないように・・・ブツブツ」

「い~ん。束さん、もう世界に知らせちゃったんだ・・・」

瞬間、時が凍る。

ダイブしていた思考から抜け出して束を見ると申し訳なさそうに俺を見ていた。

まずい・・・どうにせよ束は狙われる可能性が・・・。

「NASAとか世界各国に見せたんだけど一蹴されちゃったよ

「セーフ!~」

たははと笑う束を見て俺は両手を広げてセーフの形を取った。  
助かった・・・馬鹿ばっかで助かった。

そもそも束は宇宙の謎ほど興味が惹かれるものがなかつたからEISを作つた。

なうひまつひの会社で好きにEISを作らせる方が最善の方法かもな。

。 。 。 。 。 「いやだ。あの魔物の巣窟に帰らなきゃならんのか・・・

「いいか？俺の実家が経営する会社でEISを好きに作つていいから世界には余計に情報を流すなよ？頭のこいつお前ならわかるはずだ」

「・・・うん。この子達は宇宙空間での活動を想定したマルチフォームスーシュだけどあらゆる兵器の代用になるからね・・・覚悟はしてたけど」

「・・・とこつか父ちゃん、実家が経営する会社つてなんだ？」

まあ、またそれは話すとして。

束はEISの調整をしながらもうひとつの灰色の甲冑を見せてきた。個人的にはガンダムとかマクロスとかACとかがよかつたな。

「わあわあはーくん、これに触つてみてよー。」

「・・・俺、EISよりもアーマードコアとかのがいいんだけど。ロジマリサイルとか撃ちたいんだけど。」

「贅沢言わない。束さんでもまだロジマ粒子作るのが難しいんだか

「うーん！GN粒子とかミノフスキーパーティクルとかもだよ？ミノフスキーパーティクル子は時間をかければまだわからないけどね」

「えー・・・ならマクロスは？バルキリーとかは？ミサイル撃ちたいんだけど？」

「・・・父さん、ミサイル好きだな・・・」

とくにVF-25のスーパーパックでミサイル無双したい。  
宇宙だと青い光が出て綺麗じやん。

束曰く、バルキリーは作れるが変形機能が難しいんだと。変形機能がないバルキリーはバルキリーではないと断言できるからね！だそ  
うだ。

他にもガンダムとかは設計図が無いらしいから無理。とか言われた。

・・・お前、俺の部屋に“モビルスーツ大集会”裏・設計図”が  
あるのに気付かなかつたのか？他にもアーマードコアの攻略本と一緒にあつただろ。

「なぬ！束さん、気付かなかつたよ！」

「作るならまずはザクかグフをお願いします。最終的にはガデラー  
ザがいい」

「任せたまえはーくん！束さんの腕を信じるがよいー！」

「なんかワクワクしてきた！束、触ればいいのか？」

「女性にしか動かせないけどーくんのバグつぱりなら使えるかも  
しないね！」

「つむ。父さんの理不尽のスキルならエスが使えるかもしねいな」

「普段なら許さないが特別に許す。取り敢えず触るわ」

ピタッと白い甲冑のよこにある灰色の甲冑、試作型のエスに触れる  
と何かが頭に流れてきた。

これは・・・来たのか！？

灰色の甲冑と俺を光が包むと研究室が一瞬だけ真っ白に染まる。  
そして・・・。

「　　・・・・・・・・・え？」

一同、啞然。

俺、千冬、束は田を見開いてそれを見る。

普段はそんな顔をしないはずなのにそれを見ると絶対にアホみたい  
な顔をするだろ？  
だつて・・・

・・・うん。  
なんで？

灰色の甲冑、  
ISが土下座して  
るもん。

「……あー、たぶんはーくんの生体情報が工Sの処理領域を大きくオーバーしたんだらうわ」

「……つまりなんだ？ 父さんが強すぎるから工Sが拒絶したという事か？」

「だらうね……アラシ、はーくんは工Sにもバグ扱いされるんだねー」

「……俺は徐に研究室にあった工S用であらうハングマーを手に取つた。

「え？ ちよつとはーくん？ なんでハングマーを持つてるのかな？」

「ふつ、ふふふふふふ・・・ぶつ壊す」

「つああああああつーせめてーせめてまはーくん！ 束やさんの工Sを壊さないでー！」

「ええー…離せー…A Z A S E…！」

「わーちゃんもはーくんを止めー…」

「・・・・・・父さん・・・」

ハンマーを掲げて工Sの前に立つ俺、俺の腰に涙目でじがみつく束、

頭を押さえながら俺達を見る千冬とかなりカオスになっていた。

取り敢えず、これ、ぶつ壊そう。

塵すら残さん。

三十分後

「ああ・・・よかつた、よかつたよお・・・」

「うひ

「ほり束、無事だつたんだからさうと説明の続きをしる。父さん  
がまた暴れる前に」

結局、EISは破壊しなかった。

カンベンシテクダサイ。

つてEIS側の通信が入った時は氣を込めたゴルディンハンマーで  
研究室ごと破壊しようとしたのは余談である。  
ところがで俺は絶賛不機嫌中。

「・・・でね。もう少ししたらEISは宇宙空間での活動が完全にで  
きるようになるんだよー。」

「・・・ふーん。前から木星には行つてみたかつたが少し聞いてい  
いか?」

「なんでも聞きたまえ!」

わつわからずつと氣になつてたんだが・・・。

このHISのスペックと材料とか見てるとび～～しても氣になるんだが。

「INのヒビロイカネ？みたいな鉱石とかHISのコアのパートとかどうやって調達したんだ？」

「注文したんだよー」

「くー・・・なり・・・」

「その金、どうから出したんだ？篠ノ之家は銀行に金を預けてないから使つのは無理だろ？」

すると束は・・・。

「な、な、なんのことかな？束さん、よく聞こえなかつたな！」

ものつそい冷や汗ダラダラで口笛吹きながら明後日の方向を向いていた。

・・・確定だな。

「・・・束・・・貴様ハッキングでやりやがつたな？」

「ビクッ！」

「ああ・・・そうだそうだ・・・最近、妙に俺の銀行口座から金が無くなつてゐるんだが・・・」

「・・・ダラダラ」

「最初は詐欺辺りで銀行側に相談したら戻つたんだが・・・と言え。いつたいいくら使つた（・・・・・・・・）？」

「・・・すいませんでしたあ！――」

ちょうど千冬の帰りが遅くなつた時期から銀行にある金が少しだけ減つて戻つた事がある。

最初はハッキングでやられたのかと思つたが違和感があつたから気にも止めなかつたのだが・・・。

「――」の馬鹿野郎がああああああああああああ――

「――やああああああああああああ――はーくん、頭が割れる！束さんの天才の頭が割れちゃうよ――！」

束に問い合わせたところ・・・HS開発費用、百億円也。

つまり、俺の銀行口座全額。銀行の数字はただの数字になり果てたのである・・・。

織斑春樹、三十七歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、六歳。

親父の遺産である金が全部なくなつた。まる



## 第十一話、親父（後書き）

IS士下座事件。

・・・ w w w w w

実はこれが書きたくてこの一次作を始めたりしたり w w w

前にガンネクのアッガイ見てたらふと思い付いた。  
体操座りするなら・・・みたいな感じで浮かんだ。

そして織斑家の全財産、消失。妙にバカ高い親父の遺産はこのため  
の布石でした。

なんかIS作る模様は書かれても材料を調達する模様は書かれてな  
かつたからね。  
世界各国もかなり金をかけてやつてたから莫大な金がいるんじゃね  
？みたいに思つた。

次回はIS歴史初の事件です。というかIS士下座事件が初の気が  
w w w

第十二話、親父（前書き）

今回から四季組帰還編。

かなりネタだらけの場面になりますがよひじく・・・。

たぶん四話くらいで終わるんじやね？

## 第十二話、親父

本日は・・・微妙。

天気はすげー晴れだが俺の心情は曇り。  
IS土下座事件（黒歴史）から一週間、俺はあらゆる場所に走つて  
たりする。

「・・・つてわけなんすよ。だから一時的にやめさせてくれないつ  
すか？」

「それまた・・・君も苦労しますね、春樹君」

「ははは・・・しかも織斑家の全財産とはいきまでも、俺の銀  
行口座、ゼロになりましたし・・・」

「うん、わかったよ。もし君の言つてうが世に出たら私からも何と  
かしよう。春樹君はどうするんだい？」

「実家に戻ろうと思つます。もう・・・来るべき時が来たと腹をく  
くるしありませんよ」

「・・・・・・日本最大の任侠、四季組か・・・“霸王”と呼ばれ  
た前組長の息子である君が戻れば波乱が起きるかもしれないね」

「覚悟してます。俺は千冬に一夏、束、篠ちやん達を守るならばな  
んでもしますよ」

「うううん。じゃあ君が四季組のトップに立つなら私は私と同盟を結ぼうか。私の会社は少なくともイギリス、フランスにも置いてあるからね」

「はい。その時はお願ひします十蔵さん」

「怪我や病気はないようですね。今まで楽しかったよ春樹君」

「俺もです。今までありがとうございました」

そう締めくくると俺は十蔵さんが経営する企業の本社の社長室から退室する。

現在地は十蔵さんの会社の社長室。束がEISを生み出してからこいつして働いていた場所や世話をなった場所を回っている。  
だがEISを話したのは十蔵さんだけ。他はかなりまずいので話していない。

銀行口座はギリギリで一五十七万あつたため、生活はできるが束の身の安全のために実家に戻るつと決意した。

「…………うわあ……」

「で、でかい……」

「はーくん、じいがはーくんの実家なの?」

「ああ。柳韻、悪いな。車を出してもうひとつよ。前に使つてたのは  
敵対するヤクザに壊されたからな」

「取り敢えず束と篠を頼むぞ。俺は今から神社に戻つて父上と話す  
から」

「任せろ」

やつぱりと柳韻は車を走らせて去つていった。

ところが十蔵さんと話してから一日、準備をしてから十冬と一  
夏、篠ノ之家から束と篠ちゃんがついてきて実家、四季組の總本山

にやつてきた。

・・・昔とは変わらんがさうにカオスになつてゐる氣があるや・・・。

昔は確か東京ドーム一個並みの広さを持つ武家屋敷を中心に周りには山があり、山を越えた先には動物園擬きと四季組が経営する会社があつたりしたんだが・・・。

「・・・お城?」

「あいつら・・・またこつもせずに大阪城みたいなを作りやがつたな・・・!」

城が建つてた。

四季組管轄の土地の入り口に入るとまずは大阪城並みの城が建ち、千冬達は啞然として見ていた。

束ははしゃいでいたが。

しばらく歩く」と一十分。懐かしの実家の武家屋敷の門の前に来た。懐かしい・・・四季組の看板もある頃のままだ・・・。

「お父さん、なんでこんなにでかいの?」

「お父さん、なんでこんなにでかいの?」

「俺のじいさん、初代四季組組長が昔からあつた武家屋敷を改装して建て直したらしいんだよ。だからどつかの名のある武家の住んで

た屋敷かもしけないぞ」

「すゞい・・・私の家より大きい・・・」

「まあ、日本最大の任侠の総本山だからな。それより入らつか」

ビックリする篠ちゃんに言いながらその門に手をかけて押す。  
ギイイ・・・と鳴りながら門が開くと・・・。

『お帰りなさい春樹さんー!』

「うわあー!?

「さやつー?」

「おねー!ちーちゃんちーちゃん、時代劇みたいだよー!」

「これはまた・・・」

「おひ帰つたぜ。組長はいるか?」

門を開けると見えたのは人、人、人、人。

四季組の舎弟達がズラツと並んで出迎えてくれたのである。

含ませて声をかけてきたもんだから、一夏と篠ちやんはかなりビックリしていた。

・・・とこりか出迎えはこらなこと言つてゐるのにな・・・。

「奥でお待ちです春樹さん。いやー、久しぶりですね！」

「親父が死んでからだから・・・十三年か。長かったな」

親父が老衰で亡くなる前に少しだけだが、親父と小さな一軒家で暮らした時間も含めたら十三年になる。最後の時間・・・親父は嬉しそうに、楽しそうに過ごしていたのは今でもはっきりと覚えてい。

・・・俺は親父が亡くなると辛くなつて引きこもつたから実家からは顔も出していなかつた。

だからか、四季組総本山の組員達は本当に懐かしそうに笑つていた。

「・・・もういいんですかい春樹さん。まだ親父の死から立ち直れてないんじや・・・」

「吹つけれたよ。いつまでもくよくよしてたら親父に殴られるし、あいつらにも情けない顔を見せるからな」

「・・・一夏、でしたか？本当に親父に似てますね」

「ああ。だろ？瓜一つだ」

ふと武家屋敷の中を歩きながら後ろを見てみると若い組員達が一夏や千冬と話していたりしていた。

一夏は少し怯えていたが千冬に庇われながら何かを話しながら広い廊下を歩いていた。

・・・まああの顔を見たら怯えるのは仕方がないだろうな。

後でシバぐ。一夏を怖がらせた罰だ。

「おや。春樹さん、『緋桜』も持ってきたんですかい？」

「親父からもらったプレゼントはこれだけだからな。後は親父とおふくろの形見の結婚指輪しかないし」

「そのネックレスですかい？確かに親父はあんまり形のあるプレゼントはしなかつたですよね？『緋桜』とそれ、シルバーのペンダントルくらいですよね」

先代四季組組長の親父は四季組組員達に“親父”と呼ばれていた。組長、と呼ぶものはいたがほとんど親父と呼んでいたな。

四季組組員のほとんどは世から外れたもの、口口ソッキや不良、親に捨てられたものである。

親父はそんな奴等を助けて四季組の孤児院や総本山に迎え入れて育てたりしていたのである。

そのため、組員達は親父は第一の父親、尊敬できる偉大な父親と見ている。

だからか、俺も世話をよく可愛がってくれた。

親父からの恩を親父と若（春樹セイ）「返したい」という一心で。

「や、着きましたよ。」ソリの待りです

「・・・親父の部屋、か・・・」

案内された場所は生前、親父が使っていた部屋だった。

そこに立つと自然と首に掛けられた親父とおふくろの形見である結婚指輪を触る。

一つあり、ただ単にチャーンで通じているだけである。

「（・・・親父・・・おふくろ・・・あんたらの息子は・・・いま  
ここに帰ってきたぜ）失礼す・・・」

「は～～ぬ～～くう～～ん～～ー。」

「ひゃや あああああああああああああああああつーー。」

ススス・・・と開けると田の前が黒に染まり、聞き覚えのある声が  
すると叫んだ。

つい、殴りかかつた。それも本氣で。

だが、受け流されるように床の畳に叩きつけられる。そして倒れた俺の上に誰かが乗るとぐいっと顔を掴まれる。

「や  
久しぶりだね春君？」

「やだなあ・・・昔みたいにお姉ちゃんとかなじみさんとかママとかお前とか呼んでくれてもいいんだよ?」

「後半の一一つは嘘だろー。お姉ちゃんは言つた氣はするがママとか言つた覚えはないわー！ー！」

「それじゃあ、再会のひめーを・・・」

がつちりと顔を固定されると、姉さん・・・安心院なじみは少しだけ顔を赤くしてゆつくりと俺の唇を狙つて・・・。

ガッキイイイン!!

「……おやおや。いきなり斬りかかるとは物騒だね……」

「父ちゃんから離れる。父さんにキスをしていいのは私だけだ」

「後は束さんもだね……お前、はーくんに手を出すから嫌い。死ねば?」

「…………あれま。春君、この一人は君の子供かい?」

「千冬は俺の子で束は柳韻の娘だ」

「ほほお……篠ノ家の……あのへタレ君からこんな子が生まれるとはね」

「というか姉さん姉さん、重いからどういて」

「女性に重いは言つてはいけないぞ春君」

ふふふと笑いながら姉さんは千冬の日本刀を扇子で防ぎながら俺の上からどいた。

・・・この人の化け物つ<sup>チート</sup>ぶりは健在か・・・。

「あー、紹介するな。この人は安心院なじみさん。昔に世話になつた母親代わりみたいな人だ」

「よろしく、親しみを込めてなじみさんと呼びなさい」

「……母親代わり?」

「前にも話したがおふくろが死んでから塞ぎこんでた俺の面倒を見てくれた人なんだよ千冬。それに・・・覚えてるか?ロシアで湖の上を走る女性のニュース」

「あー、あの時は麻薬密売グループを叩き潰した時のだね。懐かしいなあ・・・」

「いやいや姉さん。あんまり見られないよつて親父に言われてた  
う?」

うんうんと頭を振る姉さんを呆れた目で見る。  
千冬は何か思い出したかのようにポンと手を片方の手に軽く当てる。

束はジトーッと姉さんを見てるし、一夏と篠ちゃんは・・・おい。  
その虎の巻物をむやみやたらに触らないで。親父の気に入つてたや  
つだから。

取り敢えず軽く手を叩いて場を納めると改めて姐さんと向き合つ。

「本当に久しぶりだね春君。お姉さんは君が心配でたまらなかつたよ」

「それは・・・すんません。親父が死んでからはどうも・・・ね」

「いいよいよ。君は冬君を尊敬して、愛していたから当たり前だ

よその感情は。それで？春君はなぜまたここ（四季組）に戻つたんだい？」

「……実はそれについて話したい事があるですよなじみさん」

「……聞こう。ボクが力になるならいくらでも貸そう。大事な弟分の頼みだからね。あ、旦那様がいい？」

「…………それで束なんですけど……」

姐さんの言葉を華麗にスルーするとウサ耳をつけた束を引っ張つて隣に座らせると口について話す。

最初は姐さんも二口二口していたが次第に真剣な表情になり、何かを考えながら頷いていた。

千冬と束は姐さんのそんな変化に驚きながらも俺と姐さんの会話を横で聞いていた。

「…………それはまずいね……それだけの性能があれば世界の兵器は変わり、使える女性が優遇される世界になる」

「はい。ですからEISは秘匿しようかと思います。さらにカモフラージュに束を四季組が経営する会社の社員として保護し、あくまでもバレたら会社の研究部門が開発したという風にしようかと」

「それもいいけどこの子の頭脳は世界に狙われるよ。もしかしたらアメリカ辺りが束ちゃんを寄せせと言つてきそうだし、それは最善とは言えないな」

「・・・む、・・・やはり俺が四季組組長として戻つても意味はありませんか？」

頭を捻りながら姉さんを見ると真剣な表情から一転、笑顔になる。

「むふふ。簡単な話だよ春君・・・ISが現存する兵器の中でも最強だと思わないようにすればいいんだよ」

「・・・・・つまりあれか。姉さん、あなたは俺に暴れろと?」

「うんうん。冬君の血を継ぐ春君ならエレガントと隕石だと破壊できるでしょ?かつて、君のお父さんはアメリカが保有する軍艦を行動不能にした上に戦闘機を全て生身で叩き落としたんだから」

「・・・・・」

千冬、束、絶句。

まあ、そつなるわな。生身で軍艦を落としたりするのは現実味がないからな。

漫画の世界だと魔法とかで潰すが親父はほとんど自分が持つ“気”でたたか・・・ある意味あれ、魔法だな。ビームとか普通に出てたし。

「じゃあ春君。まずはうちの研究部門に行こつか・・・どうしたんだい?そんな嫌そうな顔をして?」

「……わかつて言つてゐるでしょ」

姉さんは「タータと笑いながら扇子を開くと口を隠した。

・・・あんた俺が苦労したり苦しむ姿を見るの、好きだろ・・・。

「むしろボクを虐めたらどうだい？新しい自分が見つかるよ」

「心を読まないでくれます？プライバシーなんか関係ねえ！みたい  
な顔もやめて」

「ふふふ・・・」

「変わらないですね。貴女も・・・その性格の悪さが」

「よせよ。照れるじやないか春君」

褒めてねえ」と叫びたかったが、これ以上付けていたり収拾が  
つかなくなるからやめておいた。痛くなる頭を押さえながら親父の部屋から出ると姉さんが千冬、末、  
篠ちゃんを留めて俺と一夏だけをあの魔窟に行うことになった。

「え？ ちよ、姉さん！？ 俺一人であそこに行かなきゃなんないの！

？」

「うん。皆、君を待ってるからね。特に女性陣は楽しみにしてるぜ

？」

「へ、父さん、なんでそんなに嫌そうな顔をするんだ？」

「ほらほら行きなさい。この子達はボクが見ておくから。話したいこともあるからね」

「姐ちゃんああああああああんつーーー！」

ドゲシッ、シュー、バタン！－

むつふつふつふ・・・わわわわ。春君の事を聞くと同時に少し春君の事を話す。

「・・・わい。少し話すつか

「えりと・・・なじみさんでいいんですか?」

「こにせ千冬ちゃん。春君はもう浮き立てくれないかな?ね・・・

はあ・・・春君が中学生になるとあのボケが春君にこらん知識を『えたせいで姐さんだなんて・・・。

冬君の部屋に千冬ちゃん、東ちゃん、篠りちゃんと向かい合ひ扇子で口を隠しながら静かに笑う。

「・・・まずは千冬ちゃん、君が小学生の時に春君の養子になつたんだよね?」

「・・・はい」

「春君から聞いたよ。秋ちゃんの子供を引き取つて可愛がつてるぜ!みたいにいつも聞いていたよ」

延々と一夏ちゃんや千冬ちゃんの自慢話をしていたしね。

あんなに楽しむには話すのは冬君が死ぬ前以来かな?明るくなつたのはよくわかつたよ。

・・・だからね。ボクは君達一人の姉弟には感謝してるんだ。

「え？ ちーちゃんってはーくんの実の子じゃないの？」

「・・・まだ話してなかつたか？ 私がまだ小学生の頃に捨てられて父さんの家に行つたらすぐに受け入れてくれたよ。一夏はまだこの事は知らない、知つてはいけないんだ・・・」

それはボクも春君から聞いたな。あんな身も心も幼い子に実の親に捨てられた事を知られてしまつと下手したら人間不信になるかもだからね。

だからか。春君は実家に来るのを拒み、四季組との通信手段を断つていたのだ。

一夏ちゃんがまだ赤ん坊の頃はまだ意識はなかつたから大丈夫だが幼稚園に入る頃にはまずくなつていた。  
幸い、春君の美貌に夢中で母親の事は触れられなかつたが、そろそろ小学生になるといじめもあるかもしれないね・・・。

「ところで君達、春君は好きかい？ あ、ライクではなくラヴだぜ？」

「もちろん。私は父さんを異性として愛している」

「束さんも！ ・・・ 貴女にはーくんは渡さない・・・」

取り敢えず束ちゃんにはこれを渡しておいた。

「お姉様と呼ばせてください」

「なじみやんと囂ぶといいよ妹ちゃん」

「おのづくお願ひおすなじわん」

・・・ふふふ。春君の中学生の秘蔵写真を渡せばこんなものだね。中学生でかなりラフな格好、少しほだけた感じでゴリゴリ君を食べらる姿だね。中々にエロいから一発でノックアウトだ。

束ちゃんを買収すると残る篠ちゃんを見ると少し顔を赤くして照っていた。

「・・・といふか千冬ちゃん、それは近親相姦だぜ?」「

「関係ありません。私と父さんの恋路を邪魔するやつは蹴散らすだけです」

・・・ああ、これは重症だね。ファザコンよりもひどいよこれは。

死にやがれ」こんのマッドがあああああああああつ・・・!

ドッゴオオオオーン！！

ウボオアアアアアアアアアアアアアア・・・！

ギヤー！春樹さんがご乱心だー！止める止めるー・・・！

父ちゃんやねー・・・！

「 一夏？」

「またやつてね。ねむのやつとつも癪かしいもんだ」

春君が高校生になるとのやうどりは日常茶飯事だつたからね。たぶんあの子がまた春君にちよつかいを出したんだろ？

「・・・あの、なじみさん・・・」

「あ。あれはいつものことだから気にしなくていいよ。昔は冬君も  
加わってかなりカオスだったから」

「冬君つてなに？」

「春君の父親、つまりは千冬ひやんと一夏ちやんの祖父だぜ。言つておくれど春君よりも強いよ。冬君が死ぬまで全盛期の春君をボロ

ボロにしてたからね

あー、なんか聞いたことがあるーみたいな顔をする千冬ちゃんがあり飲み込めてない束ちゃんと篠ちゃん。

いまだに研究部門がある研究所から爆撃音や怒鳴り声が響く中、ボクは千冬ちゃん、束ちゃん、篠ちゃんと話すこととした。

うーん・・・束ちゃん、どうしようかな・・・春君が返り咲くのは嬉しいけどあんまり苦労はしてほしくないんだけどな・・・。

織斑春樹、三十七歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、六歳。

次回に続くよ。おひ。

## 第十二話、親父（後書き）

束、買収。

そういうや、年の差結婚してんじやねーよーって書いてくれやがった（送った？）方がいますが最近は芸能界でも年の差結婚、ありますせ？

はつかりしておきますが、修正とかしないのは時間がなくなってきたからです。

なのにメッセージでわざわざ教えてやったのになんでやらねーんだバカヤローーって送る奴もいますがやめてください。

更新停滞するから。

最近はやる気が出ない。メッセージで中傷コメントばっか送られるし。

次回は春樹視点で爆撃音の正体と叫んだ奴等を書きます。

あー、鬱だ。

## 第十四話、親父（前書き）

いやー、みんなの感想に勇気付けられて立ち直りました。

感想を返すので待つてください。

あ、ちなみにリクエストがあつて・・・

“春樹が原作のHJ世界に入るどうなるの？”

・・・知りません。間違いなくカオスになりますwww

今回はかなりオリキャラ出ます。嫌な方はリターンリターン！

## 第十四話、親父

あー、嫌だ。あんなどこには行きたくないよ親父。

「…………」

「父さんどうしたの？疲れたの？」

「一夏ああ～～俺を癒してくれ～～」

「わきや～～！」

憂鬱な気分を少しでも晴らすために一夏に抱きついてグリグリと頬擦りをした。

あー、たぶん姉さんの言つ事を信じればまだあのマッド変態痴女チーフがいるんだよな。

会いたくない。めつを会こたくない。

「父さん、今からどこに行くの？」

「四季組管轄研究施設“春夏秋冬”だ。もしかしたらガンダムとかありそうだな、マゼラトップとかタンクとか」

「え～～！俺はズゴックとかがいい～～！」

「グフだろ。もしくはシャア専用ザク？だ。それ以外は認めん」

「ダブルオー！ダブルオーランタ！」

「バカを言え。ダブルオーならスサノオかソルブレイヴ隊かガーデラ  
ーザだろ」

「むしろ俺はサバーニャですね。乱れ撃つぜーみたいに言いたいっ  
す」

「むーならストフリ！ストフリはどうだ！」

「種ならフリーダム原型でおー。グフィグナイティッドも捨てがたい

「何を言つんですか春樹さん！種ならシグーでしょー。地球連合なら  
レイダー、カラミティ、フォビドゥンですよー。」

「・・・ほほおう・・・貴様は死にたいようだな・・・」

「・・・勝ち皿はない。ですが春樹さん！これだけは俺も譲れませ  
ん！たとえ・・・たとえ死んでばらぶしつー？」

一発KO。

一夏を肩車したまま黄金の右ストレートで気絶した。

ふん。ガンダムならザクが最強だろ。全シリーズでもザクの原型が  
多いんだぜ？

今ぶん殴つたのは「」（四季組総本山屋敷）に来てから案内役をしていた強面のおじいさんである（妻子持つ。四十一歳）。

「さすがにMS<sup>モビルスーツ</sup>はないとは思つが、VF<sup>バルキリーファイター</sup>擬<sup>シル</sup>きはありそつだな……戦闘機を改造してそうだ」

「え？ 本当？」

「マジマジ。あやこ、世界最高峰の技術を持つてるし」

四季組管轄研究施設“春夏秋冬”、それは親父が生前にザクを作りたいとアホな事を言い出したのがきっかけでできたものである。さすがにいきなりザクは作れないため、まず親父は戦車を完膚なきまで破壊してから解体させたりしたりと最初は何をしてるかわからぬ団体だった。

が。

先程話したマッド変態痴女チーフが“春夏秋冬”に入つたことにより研究施設は急加速。

表向きはWT<sup>モビルスーツバルキリーファイター</sup>つて車の会社みたいなもんだが裏じゃあ親父の欲望とも言えるMS<sup>モビルスーツバルキリーファイター</sup>やVFを作るために日々暴走している。

何がしたいんだてめーら。と当時は思ったが親父と最後に過ごした時の影響か、ロボットオタクになつてしまい、なんか見たくなつた。

親父と暮らす前には時速250km/hを叩き出す化け物戦車を造り出してたしな。

なんで戦車、そんなに出るわけ？とか思つたけど下手に探ると取り

返しのつかないことになりそうだから諦めた。

・・・ムウ ルウの戦術機造つてそーだな・・・。

「・・・でかい・・・父さん、ここが?」

「春 夏 秋 冬<sup>しづんかしづんとう</sup>」、別名・・・“変態施設”・・・うあああ・・・嫌  
だ!入りたくない!」

「諦めましょいや春樹さん。ドタキヤンしたら姉御にやられますぜ  
?」おにいさん復活。

「リアルにあるからやめろ!それは死と言つ名のフラグだ!」

復活したおにいさん、本名は安室<sup>あむろ</sup>怜<sup>れい</sup>。

ちなみにだが、別にユータイプさん似てる訳じゃないよ?親が  
付けたらこうなつたつて言つてた。

他にも四季組には斜阿<sup>しゃあ</sup>安須<sup>あすなぶる</sup>南部流とか乱場羅瑠<sup>らばら</sup>とかいるよ?・

全員、親父がつけた名前だけど。

個人的にはジーンとか頑張つてつけてもらいたかった。

小さい頃にいじめられたらしいが親父が（いじめた側を）ぶん殴つ

たりしたよつだ。

お前のせいだろクソ親父が。

「で？ 暗証番号は？」

「知らないつす」

「・・・お前、なんで来たんだ？」

「姉御から見張つていろつて言われただけなんで。自分にそんな事言  
われても困るつす」

若干じや顔がムカついたからまたもや黄金の右ストレートで沈めた。

暗証番号知らないなら・・・またあれか。適当に入れたらできると  
かつてパターンか？

ピッピッピッピッ、カチヤツ、ウイイイーン

「・・・マジか。セキュリティ問題ありますぜだら

「むしろ春樹さんが規格外すぎるんですよ 再びお亡くなりさん復活。

「おー！なんかスパイ映画みたい！」

俺、呆れる。

安室怜、けろりとした顔で入ろうとする。

一夏、自動ドアに大はしゃぎ。

・・・よし。十三年ぶりだがあの変態痴女も治つてゐるだろ。いきなり飛びついて襲おうとはしない・・・はず・・・なのに不安になってきた。

「チーフ? まったく変わつてませんよ。むしろ悪化して発情期に入ります」

「・・・アムロ、生け贋になれ」

「無理です。俺、嫁さんと子供がいるんで」

ちつ、冷たい奴め。昔は何かあれば助けてくれたのにな。

屋敷から少し離れたショッカーとか悪の科学者がいそ uglia うな研究施設の中を歩きながら目的地、マッド変態痴女チーフの部屋に向かう。まあ、所長室なんだけどね。

一夏は研究施設を見て田をキラキラさせながら走つていたが一秒で捕獲、手を繋いで歩く。

トラップがある可能性があるからね。たぶんR指定されそうなトラップが。

「ところでアムロ、組長はどうしたんだ？代理だが」

「ああ、姉御が追い出したんすよ。あの組長、親父の遺言を無視して四季組を牛耳ろうとしましたからね、春樹さんに連絡したのは秋枝さんの子である一人を手に入れようとしたからでしょう。たぶん、なんか才能があるんでしょ？」

「・・・千冬はわかつたが一夏はまだわからん。たぶん禁断の“H”と“R”の片鱗は見えるが・・・」

「・・・バ、バカな・・・！すぐに恒例会を開ないと・・・！春樹さん、少し外しますね！」

「あ、おいアムロ！」

なんなんだあいつ？姉さんが禁断の“H”と“R”って言つたから伝えただけなんだがな？

というかなんだこれ？親父とか幹部達が皆知つてるようだが俺は知らされてないんだが？

俺も“H”と“R”があるみたいだが・・・。  
才能の略称みたいなんだがよくわからん。

聞いたのは“M（無双体质）”“K（王の素質）”くらいだな。

「・・・・ついに来たか。ショッカーの首領がいる部屋・・・

！」

「わあ！なんかフリーーダム復活のあれみたいーほらほら鍵六もあるしー鍵はどこー！？」

「お前黙れ」

『おおー珍しいお客様なんだなー』

「・・・その声・・・スーパー死神博士か！？」

『・・・いやいや春樹。私はメスだぞ？むしろショックカーなら蜂女とかだる』

「帰つていい？」

『ところがギッ チヨン！捕獲アーム射出ー』

「だが甘い！！」

でかい扉、研究施設“春夏秋冬”しゅんかしじゅんとう 最大の部屋の前である。

一夏の言つように種死のフリーーダム復活みたいなイメージがある。

はしゃぐ一夏を宥めると扉から声が響き、扉の両側から赤いロボットのアームが飛び出してきた。

それを壊そようと構えるとアームが俺ではなく、一夏を掴む。

「・・・え？うわあああああああー！？」

「い、一夏ああああああああつー!?」

『はつはつはつはーーー・シヨタツ子一名』案内ーーー!..』

ギュイイイーンと引っ張られる一夏を追い掛けで扉の中に飛び込んだ。

しまった・・・!あのマッド変態痴女チーフはシヨタの属性もつたのを忘れてた!

引っ張られる一夏をせりて追い掛け奥に進むとこの施設の格納庫に向かってる事に気が付いた。

「・・・?」

「父さん助けてー(棒読み)」

「待つてろ一夏ああああああああつー!..」

ちなみに一夏は完全に棒読みであつたが、親バカである春樹にはまったく気付かなかつた。

廊下を爆走、爆走。

「ウイイイハアー!..」

『ふはははー引っ掛けたな春樹ー!..』

「「」あん父さん

「は？」

ガシャゴーン！

「へ？ へぶつー？」

音にするならビターん！  
顔面を床にぶつけた。

赤くなつた鼻を押さえながら後ろを見ると両足首を赤いロボットアームが 握んでいた。

『ふあーっははははははー春樹、見事に引っ掛けたなーあつは  
つはつはつはつはー』

「父さん、ごめん。あの人に頼まれてつい・・・」

「いたたた・・・トランプとか人をおちよぐるところも直つてない  
とか最悪だろ・・・」

『あつはつはつはつはつはーあつはつはつはつはーあつはつ・  
・・ゲホゴホー』

「そして高笑いしてむせるところも変わりなし・・・まったく成長

してねーな

赤いロボットアームを叩き壊すと一夏とその部屋の扉を開ける。中には白衣を着た不健康そうな美女がモーターを見ながら爆笑し、むせていた。

・・・うーん。ずぼらな部分もまた変化なし・・・。  
周りを見てみるとビーカーや書類やらなんやらと散らかりまくつていた。

定型的な片付けられない女だな。うん。

「おこなにしてんだ」

「ゲホゴホ！・・・おお、春樹！相変わらずイケメンだなー・じうだ  
？私と一発やらなーいか？」

「死ね」

「チーフ！小やこ子もいるんですからアダルトな発言はやめてくださいよー！」

「気にするな。気にしてたら禿げるぞ坊や」

そう言うと美女はモーターを消して煙草を口にくわえる。  
だが俺はそれを止めるために口にくわえられた煙草を取る。

「やめろ。一夏の健康に悪い」

「ねや？春樹、煙草をやめたのか？」

「親父と暮らす前からやめてるぜ？それより見ない顔がいるな？」

「ああ、そいつらは冬樹が拾つてきた奴等だ。もしかしたらお前が知る奴もいるんじゃないかな？」

「…………いた。ちょっとだけ来いや」

言われて周りをぐるつと見渡すと見慣れた、懐かしい顔がこそりそと逃げようとしていた。

「……や、やあ？久しぶりだな春樹？」

「天誅うううううううううつ！！」

ズバシイイイン！！

「へふつ！？」

「てんめえ・・・よくも俺の仕事を増やしてくれたな?」

「な、なんの」とだ?

「じりぱつくれるか……篠ノ之束。」の名前を言えばわかるだろ

「…………（冷や汗ダラダラ）」

「まず第一。束が俺を嫌ってる時に不良やらヤクザを仕向けてきた  
が中にもよーくな奴等がいたんだよね」

「…………（顔面蒼白）」

「四季組に対抗する組織の名前がちらほら出たり、潰した中には四季組に少なからず関係がある組織だったり……まあ、何か、言つことは？」

「すいませんでしたあああああああああっ！」

「最初から謝れヴォケが」

以前に束に刺客を向けられた時に妙な違和感があつたのに気になり、束本人から聞いたたら手紙か何かでこういう奴等がいいよ。みたいな事を言われてたらしい。

パソコンのメールならば束がハッキングして見つけられたが紙の手紙相手ではそれは無意味。

気になつて俺も調べてみたらあら不思議。四季組に因縁があるものばかり並んでるではないか。

こんな事をする奴はあいつしかいない……つまりは田の前に正座させた馬鹿である。

「後はあれだ。束のレアメタル輸入の際に手を回したる」

「・・・あ、はは・・・全部バレてるか」

「 “幻影” <sup>ファンタム</sup> お前のコードだろ？ 束のメールにそれが残されるのを見たからな」

「・・・はあ・・・最後の最後に油断したな・・・お前の勘も衰え知らずだな」

正座をしながらため息をつく、ヴォケをペシペシと叩く。

こいつは親父が一番気に入っていた元孤児である。  
昔に扮装地帯で一人でいるところを親父が助けて養子として育てられたのだ。

年も近いため、俺とこいつ・・・大和は兄弟当然に育つた。

名前は織斑大和。  
おりむら やまと

詳しい話を聞いた時、大和は両親が医者のため日本から来たらしい。  
本名は高山大和たかやま やまと と言い、高山は日本でも有名な医者だつたらしい。

「にしてもお前が姿を見せなかつたのに珍しいな」

「・・・まあ、あんたが帰つてくるのを聞いてな・・・久しぶりに会いたかつたんだよ」

「キモい」

「こやは こうして私三人が揃うのは冬樹が死んでからだな？」

「・・・あなたも組長を呼び捨てにするなんて命知らずだよな」

このずぼらな格好をした白衣の美女の名前は織斑響。おりむかびひびき

こいつは生まれながらにして天才とも言える頭脳を持つていたため、両親が殺され、誘拐されていた。

それを助けたのが親父である。こうして振り返つてみると親父って世界中を飛び回つてたんだな・・・。

大和は日本人離れした赤い髪のショートカット、目は青い色であり、日本人の両親を持つ。

扮装地帯にて争いに巻き込まれた時に大量の血を浴びて変色したらしいがよくわからん。

響は茶髪のロングストレートで目は青っぽい色であり、日本とフランスのハーフらしい。

ある意味束と境遇が似ており、天災と呼ばれる頭脳を持つ。

春樹<sup>オレ</sup>、大和、響・・・当時に“四季組デルタ”とか呼ばれてた。

戦闘面で最強の俺、情報収集のエキスペートの大和、世纪の頭脳を持つ響。

「んで、響。お前はまたなんか作ったのか？」

「おうよ。今度はザク?ができるぜ」

「・・・あのね。間違いなく戦争の火種になるからやめられて言わなかつたつける？」

「こしちゃあ、春樹もノリノリだつたよな？」

「うぐひ

それを言われたらおしまいだ。

俺も実際に楽しみだつたから強くて言えない。

「あー、で？ 私と同じような子がいるって聞いたんだが？」

「姐さんといふ。たぶんお前と同じくらい頭がいいんじゃないのか？」

カクカクシカジカアイエスコンナナー。

「・・・ほほお・・・それは面白い」

「あ、バカ春樹！ なんことを話したら轟<sup>クラッシュ</sup>が暴走して・・・」

「ふは、ふははははは！ インフィニットストラトスか！ まさか私が考えたものより優秀なものを作るとは！」

「いいんじゃね？ どうせバレるし・・・ 一夏、見てみる。伸びるぞ

「これ

「おおーー..」

「話を聞け春樹イイイイイイイイー..」

そんな冗談は置いといて・・・響に束が作ったインフィニッシュトストラトスIJDを話すと過剰に反応した。

目をギラギラさせて涎をたらしながら手をワキワキさせる姿は誰が見ても変態にしか見えないだろう。

といふか大和もそつだがなぜ親父に関わった奴等はなんでみんな変態化してんだ?

「「春樹、お前が一番おかしいから」」

「んだと」ラアー..変態痴女にストッキングを被る馬鹿には言われたくないわヴォケがーー!」

「おらあつー・ストッキングの何が悪いんじゃーー!」

「さやーー..また暴れだしたぞーー!」

「お、落ち着いてーー!」

大和と殴り合つと古株の研究者達はなんとか止めよつとし、新入りは事態についていけなくておろおろしていた。

ちなみにこれ、よくあることだぜ・・・？

### 閑話休題（TAKE2）

「・・・へー、そんな事があつたんか」

「死ぬかと思ったがな。特にドイツ軍に追い掛けられた時は死ぬか  
と・・・」

「大和、お前は何がしたいんだ？」

「いやーーー、ドイツ軍の国家機密を調べたら追いかけられてさー。」

「アホか」

大和のキャッチフレーズは“気になるあの子のプロフィールから國家機密まで全て教えます”ってヤバイ匂いがビンビンするものである。

前にイギリスの国家機密をメールで送られた時は焦った。なんか特殊部隊なんが襲ってきたし。

まあ、ボコボコにしてイギリスのお偉いさん方を脅したけどね！

「えー、大和は高山、響は兵藤を名乗つてんのか？」

「ああ。組長には世話になつたが父さんと母さんの名前を引き継ぎたいからな」

「私は織斑を名乗るぞ？お前とけっこ」「ないから」ぶー！相変わらずつれないなお前は！

口を膨らませる響の類をつつきながら一夏を探してみる。  
少し離れた場所で他の研究者とゲームしてる・・・。しかもガンダムかよ。

「まあ、うちはガンダムとマクロスにアーマードコア、マジンガーZとかロボットはなんでもいざれだからな」

「組長の影響だな」

「いつそ洗脳だろ。前にジークジオン！って言わせてたじゃん」

あー、あつたなー。 みたいな顔をする一人を見るとかなり苦労したのを思い出した。

だ。  
俺らは洗脳されていなかつたが大半がザク中毒になつてしまつたの  
親父、ジオンが好きで拾つてきた孤児とかにジークジオンを刷り込  
ませてたからな。

願わくは一夏はああならないように・・・ん?

「ハアハアショタつ子ハアハア」

ふっちゃん プリン

「てんめええええええ！」

「あ、おい春樹！」

一夏を見ると後ろでハアハア言いながら近づく男の研究者が見えた。女ならまだしも男なら一夏が間違った道を爆進するだろう。

だから・・・ぶん殴るー駅のシヨタロンなんか需要がない！

「死ね！このマジドがああああああああああ！」

ドッゴオオオオン！！

わりと本気でそいつを蹴り飛ばした。

普通なら肉片すら残らないほどの戻力になるのだから、ギヤグ補正”のせいで形は保つたままだった。

「ギャー！春樹さんがご乱心だー！止める止めるー！」

「父ちゃんやねーーー！」

暴れ始めると周りの科学者が止めようとするがあのショタコンを殴り飛ばしたいので止められない。

なんかさせねーぞー！

追伸。四季組管轄研究施設“春夏秋冬”には総勢百五十人の優秀な科学者がおり、全員が全員・・・ショタコン予備軍である。理由は後々にわかるだろう。

まだまだ次回に続く。まる。



## 第十四話、親父（後書き）

次回に続く。

春樹の親父、冬樹はガンダム好きでジオン派です。

高山大和、兵藤響は適当なオリキャラではなく、前々から考えていたキャラクターです。

原作前に簡単なプロフィールを書くんで。

次回はマッド変態痴女と天災ウサ耳が邂逅・・・間違いなくヤバくなるな。

## 第十五話、娘（前書き）

かなりカオスになってしまった・・・。

タグにて追加したものはまた変えるかもです。

それとや。メッセージでこんなのは送ってきた方がいるんだが？

“春樹をF a t e / Z E R O に介入させて”

・・・俺に死ねと申すか？百万アクセス記念にとかも書かれてるし。  
原作はまだアニメしか見てないからワカンナイヨ。

今は・・・百五十万アクセスだから二百万アクセスの記念にリクエ  
スト受けるべきなのか？

ないとと思うけどwww

ちなみに作者、ダブルオーのフラッグとスサノオが好きです。

## 第十五話、娘

「ほー、なら春君はまた暴れたと?」

「そりなんすよなじみさん。なんか男のショタコンなんぞ需要はねえ!つて叫びながら第一兵器部門を半壊させました」

「そーそー。私のデスクまで破壊されたからザクとかガンダムのデータは消えたよ」

・・・なじみさんに案内されて研究施設“春夏秋冬”という場所に着いた。

そこで見たのは半壊した研究室とボロボロになつた研究者の男女、鎖で縛られた父さんとそれを棒でつつく一夏だつた。

それを見た時に我を忘れそうになつたがなじみさんに扇子で頭を叩かれて正気に戻つた。

「え? 春樹さんかい? 対象用の麻酔銃で眠らせてから鎖で縛つたんだ。ああでもしないと鎮圧できないからね・・・親父がいなくなつてからはかなり苦労したよ・・・」

「そ、そうですか・・・父が迷惑をかけました」

「いやいやいいよ。僕も春樹さんが帰ってきたからそんなに嫌じやないから。おっと、僕は修理をしないと」

いそいそと残骸が散らばる研究室を片付けに行く男性の研究者（名前は知らん）を見送る。

「どうか父さん、昔に何やってたんだ?他の人達にも聞いたが暴れ  
た話しか聞いてないぞ?」  
やれ屋敷を破壊しただの、やれ試作型の戦車をスクランプにしただ  
の、やれヤクザの事務所をビルごと破壊しただの・・・碌なもんじ  
やない。

でもここにいる皆さんは誰もが父さんを信頼し、家族のよみうな印象が持てた。

昔から父さんは人には優しかったがまさかここまでとは……

「すいねぢーちゃん。はーくん、皆から愛されているね」

「・・・少し妬けるがな」

「ここに来てから父さんは普段は見せないような表情を見せてる。私がそんな表情を見せたことがないのに・・・と思つと嫉妬してしまつ。

ああ・・・やつぱり私は父さんがないと駄目だな・・・。

「ほれほれ春樹さん。肉だよ肉〜〜」

「てめえらぶつ殺すぞ！俺は犬じやねえんだよバカヤローー！」

「…………田を覚ますの早くないか？」

「す」「いねー。普通ならあんな酔銃撃たら死んでるよ？なのに一時間も経たない内に目を覚ますとは……さすがはーくん！束さんの旦那様！」

束が嫁発言をすると研究室が固まるような音がした。  
な、なんだ？ 急に肌寒くなつてきただぞ……？

ぐるりんと女性の研究者だけ（・・）が「ひらりを見ると後ろにいた  
篝が小さく悲鳴をあげた。

・・・軽くホラーだな。一斉にタイミングもバツチリで振り向くん  
だもの。

「貴女・・・お名前は？」

「お前に名乗るような名前は「束」いいから血口紹介くらにはましろ。  
もう料理作つてやんないぞ」篠ノ之束です！みしへー！」

「束。キャラが違つ

押忍！…と言わんばかりに血口紹介した束は束じゃなかつた……。  
うん。よくわかるぞ束。父さんの料理が食べられないなら首を吊る  
ぞ私は。

束が自己紹介すると研究者のおねーさま方は篠ノ之・・・?とか考  
えているようだ。

父さんは・・・肉を差し出した研究者の頭に噛みついてる・・・。  
声にならない悲鳴が聞こえてきそうだが敢えてスルー。だつて他の  
人達も気にしてないもん。

「・・・・・ああ！あのヘタレ君のー」

「「「「あ！篠ノ之のヘタレ柳韻かー」「」「」「」

「・・・・師範代、貴方は何をしてたんですか・・・」

「今こそ結婚してるが柳韻は昔はヘタレでな。好意を寄せる女性を  
捌けなくてなおかつ、俺にボコボコにされてたから付けられた不名  
誉な称号だ。それにジジイも似たようなもんだけどな」

貴方がそれを言いますか父さん。似たようなものじゃないか？

貴方も複数の女性に好意を寄せられてる上に気付いてないなんて師  
範代（柳韻）より酷いんじゃないかな？

それに歩く度に女性にフラグを建てまくるのもあれだぞ。

「へ・ビうした千冬、そんな目をして」

・・・うん。なんかイラつかな。

父さんは何を言つてるんだ?という顔をして縛られていた鎖を玩ん

でいた。

「はーくん? それ、匕つやつて抜け出したの? あ、これは匕つした  
ら……」

「力付くでぶち破ったんだよ。」んなのは障害にはならないぜ?」

「相変わらずバグだな春樹。少しは自重したら匕つだ。」

「だが断る」

うーん……父さんって何で縛れるんだろうか?あの鎖、かなりで  
かいから大型の動物の動きをかなり制限できるはず……。  
あんなので制限できないなら何ができるんだ?既成事実ができない  
じゃないげふんげふん!

父さんにそれを聞いた束はかなりナイススタイルな茶髪の女性とパ  
ソコンを見ながら何かを話して意氣投合していた。

「ほおほお? 中々面白いシステムだな。」の「アのエネルギーであ  
らゆる事を可能にするのか……ハイパーセンサーもかなり優れて  
いる」

「でしょ? 束さんにかかるば楽勝なのだ!」

「「れはす」」……世紀の発明じゃないか!」

「だけど女性にしか反応しないのはまずいんじゃないかな？こんな  
じゃあ私達のモビルスーツよりもかなり危険だぞ？」

「んー、だから俺はここに帰ってきたんだ。お前にも何かアイデ  
アはないかな？ つてな」

いつの間にか束とナイススタイルな茶髪おねーさま、何人かの科学  
者と父さんが束のHISの設計図とスペックを見ながら何かを話して  
いた。

これが今回の目的だと父さんは言つていただがうまくこくかな？

しばらく話す父さん達を置いて、私と一夏と篝は待つてゐる間に  
また色々な事を聞いた。

「え？ 春樹さんかい？ なんだらつ……昔は兄貴肌でよく面倒とか  
見てくれたよ」

## 二十代の男性研究員の証言

「春樹さん？ んー……組長とよべ喧嘩をしては本殿や研究室を破  
壊してたわね……」

見た目三十路のねぎらわの証言。

「父さん？・・・あ、春樹さんのことね？一言で言えば天真爛漫かな？昔も今も変わらないと思つよ」

三十代の顔に傷がある強面の男性の証言。

「いい意味では人に好かれる、悪い意味ではリア充かつハーレム野郎」

四季組幹部を名乗る五十代のダンディーなおじさまの証言。言つた後にどこからか鉄の塊が飛んできて氣絶した。

「・・・え？誰の」と？」

「あの茶髪の女性です。父と親しいようですがあの人は？」

「ああ、はいはいチーフね！あの人春樹さんの義理の妹みたいなもんだよ」

「ど、慌てますと？」

話を聞くと彼女の名前は兵藤響。だけど昔は私達と同じ織斑を名乗っていたらしい。

響さんは父さんの父さん・・・私の祖父が父さんが中学生の時に捨てられてからずっと父さんと暮らしてきたらしい。

・・・くつー見れば見るほど出るといは出て引っ込むといは引っ込  
んでるからなぜか負けた気になる・・・！

「・・・ちなみにだけどチーフは春樹さんの嫁候補だからね？組長  
が決めてたらしいんだがよくわからないんだ」

「なん・・・だと・・・？」

「あ、一番の候補は姉御だね。組長もやれば？みたいに言つてたし。  
・・しかも重婚おくみみたいな感じで決めてたな。いやー、なつかし  
ぐほおー！」

「・・・クワシク、キカセロ」

「ひーー？（は、春樹さんだ！後ろのスタンドが春樹さんまんまだ  
！ーー）」

ガシッと首を掴むと少しづつ力を入れてきよつは・・・げふんげふ  
ん！聞か出すことにした。

・・・ふむふむ。なじみさんは昔は父さんを弟のように見ていたが  
だんだん恋をして・・・みたいな感じなのか。

どこのギャルゲーだ。

「違う！ まずはザクからだ！ ガンダムなにが後だ！ 初代もザクが先だつただろ？ が！」

「まずはガンダムでしょう！ それからガンキヤノンに、ガンタンクからホワイトベースですよ春樹さん！ ザクなんざ後でできるでしょうが！」

「僕はマゼラトップとかタンク、ビルドルブとかがいいです！ ビバ戦車です！」

「私はザクはザクでも種死のザクがいいです！ あわよくばキラ様のフリーダムを！」

「束さんはまーくんとおんなじ～～！」

「どう思つ？ 私はまずアーマードコアのネクストがいいんだが？」

「いいね。 でも俺はＷのデスサイズヘルのジャマーが欲しいな。 あれなら見つからずに済むし」

・・・かなりカオスになってるな。

IJSをどうするか話し合つてたはずなのになんか話題がMSをIJSに転換しちゃう。 みたいになつてるんだが？

秘匿は？ 父さん、 秘匿は？

駄目だ。 かなりヒートアップして聞いてないな・・・。

ギヤーギヤー叫ぶ父さんと束に研究員数名、 それを傍観する響さん

に赤い髪をした男性。

あ。父さんが我慢できなくて誰かを殴り飛ばした。

「昔からああだからね。春君は」

「あ・・・なじみわん・・・」

「や。十々/ちやん」

後ろを見るとき心院なじみわんが扇子で口を隠しながら父さん達の乱闘を見ていた。  
いやいや。止めないんですかあれ。

「めんべくわいからね。時間が経てば収まるよ。たぶん」

「曖昧ですね」

「それがボクだよ?」

少しだけだがなじみわんの事がわかつた気がする。

基本的には中立なのだが父さんには“テレテレ”みたいな印象なのだ  
れつ（四季組の皆様からの提供）。

父さんを見ればぱりに暴れてなんかクリアファイルみたいなので他の研究員の方々を叩きまくつてる。

・・・なぜだ。あれが黒く輝く伝説の武器“SHUSSERIBO

”に見えるのは？

なんか、いいかも。

「だらあああつーザク？の黒い三連星仕様が第一だろつがーーー」

「ガンダムですよー黒いプロトタイプが第一だ春樹さんー！」

「よろしい・・・なりば聖戦ジハーネだーかかるときやがれクソどもがあああああああつーーー！」

「うんうん。千冬ちゃん、一夏ちゃん、篠ちゃん、こーから離れてボクの部屋に行ひつか?よかつたら春君の昔の写真を見せてあげよ

う

「できたらすぐださー」

私はギヤーギヤー騒ぐ外野を傍田に六十下座する勢いでなじみせんこ頭を下づた。

プライド?父さんのショタ時代の写真を手に入れられるならぼ安いものだ!

「ほひ。 ひるが昔にボクが住んでいた場所だよ。 春君の部屋はあれ  
こだぜ？」

「ひるが父さんの・・・ねえねえなじみさん。 父さん、昔はヒーロー  
特撮とか見てたらしいけど何か残つてる？」

「それらは冬君にブックオフに売り飛ばされたよ。 変わりに春君の  
中学生、高校生に着ていた制服とか私服があるよ・・・ああ、千冬  
ちゃん。 鍵が閉まってるから入れないよ？ 君、見た目が変質者だか  
ら氣を付けなさい？」

「ひつ」

私は舌打ちしながら父さんの部屋の扉から手を離した。  
あわよくば父さんの制服を着てみようだなんて思つてないからな？  
勘違いはしないよう。

なじみさんの部屋に入るとまず田口ひろいたのが白。白い和服のようなものが飾るよつこかけてあつた。

「ん？ これかい？」これは春君が特注で注文してくれたものだよ。嬉しくて襲いかかりそうになつたのはあれだけど

「なん・・・だと・・・？ 馬鹿な！ 私は父さんからは日本刀とか木刀とかアクセサリーとか服とかプレゼントしてもらつたがそんな和服は貰つたことがないッ！！」

「・・・いやいや千冬ちゃん。それ、十分だぜ？ ボクなんかこれと髪飾りしかプレゼント貰つてないよ」

「千冬姉・・・なんか怖い」

「お、落ち着いてください千冬さん！」

父さんも人が悪い！ 茜と比べるとプレゼントの数は少なくなつたし、ベッドで一緒に添い寝してくれないし、抱き締めてくれない！

実際は千冬にあげるプレゼントが思いつかないだけです。  
ベッドで添い寝は道徳的に駄目だとなじみに言われたから（なじみの計画的犯行）。

抱き締めないのは千冬が体を押し付けてくるからである。  
これだけ聞けば自業自得だらう。

「さて。それは置いといて……」

「?.なじみさん?」

悶々としているとなじみさんが箪笥を開けて何かをゴソゴソと探していた。

たまに飛び出すものの中にはクナイとかいわゆるドスマみたいなのがあつたが。さすがは極道一家の一員。

「いやいや、これは昔に冬君からもらったものだよ。それに仕事で使うから仕舞つてあるんだ」

「へー」

「お。あつたあつた・・・だけど高校生以上しかないか・・・」

そう言つたなじみさんが出したのは赤いアルバム。かなり大きめで二冊ほど出てきた。

「あー、「めんね? 本当は冬君から幼少期、小学生、中学生、高校生、大人とあつたんだけど春君に取られたみたい・・・たぶん母親が忘れられないんだろうね。羨ましいなあ」

なじみさんからアルバムを受け取ると中を開いて見てみた。

するとまことに高校生になつたばかりなのか、入学式と書かれたページ  
が出てきた。

この頃の父さんはまだ幼さが残る顔立ちで横になじみさんと小さな  
少年が立つていて少年と父さんはいがみ合つように睨み合つていた。  
なじみさんは苦笑いしながら一人を見ていたけど。

次のページも入学式で色々な場所で撮られたであろう写真が大量に  
あつた。

「…………父さん、昔と変わらないな。なじみさんも」

「代々織斑家は不老じゃね? って言われてるくらい変わらないから  
ね。ボクはある事をしてるけど春君は素だよ」

「えっと……文化祭、体育祭、修学旅行、部活の助つ人……色々  
あるね。父さんって昔からすこしかつたの?」

「インターハイに出るくらいオールラウンドな子でね、助つ人として  
様々な大会に出ではタイトルを総なめにしてるよ。前にも剣道で  
日本一三連覇したことあるし」

だからか。私が剣道で日本一になると神童織斑の再来だなんて言わ  
れたのか。

うーん。父さんと同じような日本一になれたのは嬉しいが三連覇は  
したかつたな……。

生憎、師範代に言われて大会には出では駄目と言われたからな。二  
連覇しかしてない。

「あ、正確には中学生からだから六連覇かな？剣道だけは柳韻ちゃんと一緒に出てたからね」

「どんだけチートなんだ・・・」

「当時は暁学園からオファーが来てたほどだからね」

暁学園つて確かに・・・スポーツの特待生を受け入れる全国でも屈指のスポーツ進学校だつたか？

スポーツで言えばあらゆる面で秀でている場所だつたな。

私も特待生としてオファーはもらつたが蹴つた。

だって・・・父さんと離れたくないから！！

「春君は暁学園のオファーを蹴り飛ばして別の高校に進学、暁学園とあらゆるスポーツで戦つて全部勝つてね？暁学園から“悪魔の織斑”だなんて言われてたんだよ」

「あ、それは父上から聞いたことがあります。なんか父上と春樹さんが「暁学園の鼻をへし折つたゼヒヤッハー！」みたいなことを言ってました」

「・・・それは父さん？それとも師範代？どちらにせよ算。その言い方はやめた方がいいぞ。」

それからなじみさんが持っていたアルバムを一夏と算と眺めた。

所々になじみさんと入学式に出た少年が出てるが誰なのだろう? 父さんに弟なんかいたのか?

「ああ、義理の弟はいるよ。ほら、赤い髪をした子がいたでしょ?」

「あ。あの人か・・・でも赤くないですよね? むしろ父さんと似たような色だし・・・」

「ふふふつ、実はね。その子は君達の「ナニイイイイイイ! ?」  
騒がしいね」

お、おま! 大和貴様、結婚するのか! ?

ま、まあ・・・まだだけど結婚を前提にお付き合いはしてるが。  
・・・

ぐあああああああああつ!! 顔か! 顔がいいのかよ! 死ねり  
ア充め!!

くせう! 春樹さんといい、組長といい、なんでイケメソはモテ  
るんだ! 潤いが欲しい

「・・・・・・負け犬の遠吠えだね」

「あ、はは、はははは・・・」

無論、生きたことを後悔させながらじわじわとなぶり殺す。

ああああ！！また春樹さんが暴れ始めたー！止めろ止めろー！

な、何が起きてるんだ・・・」**じやあ**これは日常茶飯事なのか?

！まさか浮気！？

「・・・親が親なら子も子だね」

「はい？」

「なんでもないよ。さ、春君を迎えて行こつか? それそり終わる頃  
だしね」

え、でもなじみさん。まだ春樹さん暴れてるんじや……」

「大丈夫」

なじみさんは誰もが見惚れるような笑顔をしながら私達を見るが・

・なんか黒い気配がチラチラ見えるぞ？

ほらー、一夏と篠も怯えてるからやめたげてなじみさん！

「ボクが鎮圧するから」

・・・その日、私達は父さん以外で理不尽な存在を知つた。  
あれはない。父さんが簡単に土下座するなんてなじみさん、何者?  
といつか・・・高校生の父さんも・・・凜々しい・・・（ダバダバ）  
。

「千冬ちゃん鼻血鼻血」

## 第十五話、娘（後書き）

次回からほまた日常編で春樹のショタ時代を語りたいと思います。  
え？聞きたくない？

というか千冬、変態ファザコンの道を爆走してゐるな。親がいたら  
んな感じなのか？

リクエスト、一応受けます。あんま無理なのは勘弁してね？

## アンケート（追記あつ）

「どうせ。最近は寒くなつてきましたね。

「とこりかてめーは炬燵で猫みたいに寝てんだ。メタルギアやりながらよ」

「ちらり、織斑春樹。ご存知、最強親バカ親父です。

「どーも。といつかなにこれ？後書きコーナーみたいになつてるんだが？」

・・まあ、気紛れ？

「何も考えてないだろてめー」

んなことは置いといて。今回ほこの小説初のアンケートをしたいと思ひます。

「は？アンケート？」

うむ。内容はこれだ。

ワン

ツー

スリー

「なんでパクるんだ？」

“一夏の嫁といえば？一夏ラヴァーズの誰？”

ですね。

「ナニイイイイイイ！？一夏が結婚だとオオオオオオ！？」

ああ、黙つて。皆さんの好みとかでシャルタンは俺の嫁。とかラウラさんは俺の嫁。って言う方もいますけどどうかは知らん。

「・・・シャルタン？ラウラタン？なにそれ？」

お前もいはずれは関わるよ春樹。ってなわけでアンケートは“一夏の嫁は誰？”です。

候補は原作と同じ、一夏ラヴァーズからです。

一夏嫁候補

・篠ノ之箒（ファース党）

・セシリア・オルコット（オルコッ党）

・鳳鈴音（セカン党）

- ・シャルロット・テュノア（シャルロッ党）
  - ・ラウラ・ボーデヴィッヒ（ブラックラビッ党）
  - ・更識簪（更識いもう党）
  - ・その他
- ですかね？
- 「ほ、篠ちゃんが一夏の・・・あれ？よくね？娘当然だし」
- 「・・・篠も可哀想だな。元はお前に恋して・・・おっと。ネタバレだな。うむ。
- 「？」
- そして春樹ハーレムは大体決まつてます。
- 春樹ハーレム（嫁？） 確定
- 織斑千冬
- 篠ノ之束
- 安心院なじみ

・織斑（兵藤）響

・更識楯無

・とあるオリキャラ（まだ秘密だよ）

「おい貴様。なんか嫌な予感がするぞ」

ふははははーお前の女難はさうに加速するーせこぜこ苦しみたまえ！

「よし死ね。今から殺してやる」

A フィールドー！

「なぜHヴァ？」

他にも大人の女性がいますがそれはまだわからないかな？ブラックラビットとかマヤマヤ党とかミヤミヤ党とかはね～。

「なんだその妙な派閥はー？といつかまだ増えるのかー？」

こいつはアンケートじょつか迷うな。あんまり増えると駄文になるし。

クラリッサとかナターシャは仕事上の関係にしようかな？

「誰だよー？クラリッサとかナターシャとかってー？おい聞いているのかー？」

期限は原作開始の一夏が藍越学園受験時まで。一人一ポイントで一夏ラヴァーズの誰かを選択してください。

いたらだけど。できたら入れてくれると嬉しいですが、メッセージは勘弁してください。

「・・・もうやだこいつ・・・なんで無視するんだ?」

もしその他を選ぶなら名前もお願いします。

ちなみに一夏ラヴァーズは絶対に春樹にはフラグは建ちませんよ。

感想にてお待ちしてまーす!

あ。ちなみに一夏ラヴァーズはハーレムですが最終的に誰と結ばれるかを問つものです。

ですから嫁とはそーゆー意味です。

そこに書かれてる候補しか応募は受けないのであしからず。

笄か鈴か。とかは無効にいたします。必ず一人だけをお願いします。

閑話休題。(前書き)

完全なる悪ふざけ www

気に入らなければ消します。

アンケート、かなりすげーことになつて数えるのがめんどくさげふんげふん!

某年某月某日某曜日某所

「集まつたかね？」

力ッ！

「ではゼー 恒例会議を始める」

スポットライトだけが照らす部屋・・・そこには仮面を被った男達が碇ゲ ドウスタイルに組んだ手の上に顎を乗せていた。数は七。周りには誰かがいるのか、かなりの人の気配がする。

「今回の議題は安室氏からの提供だ・・・安室氏」

「はい」

安室、と呼ばれた男性が前に出るとモニターに何かを映し出した。

「まず、先日帰ってきた若こと、春樹さんの息子である織斑一夏を」覗く下さい」

おお・・・組長にそつくりではないか・・・。

可愛い子ですね。さすがは秋枝お嬢の子。

ショタツ子ハアハア。

それがどうしたんだ?別におかしいことはないはずだが・・・。

一部、目がヤバイ奴がいるが男達はモニターに映る織斑一夏を見ていた。

それは父親である春樹と手を繋ぎながらアイスクリームを舐めてるところをどうぞ、げふんげふん!撮影したものである(写真提供四季組パパラッチ)。

「実は・・・一夏君、若是“H”と“R”的素質を持つ可能性が確認されました!」

ザワワツ!

ば、馬鹿な・・・ー!の子に禁断の要素が・・・!

嘘だ・・・嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だあああああああああああああああ

ああつ!~

g m t p . j u a g o m t w . p . j a a d n t g . j u a m g a ! - .

メーディイイイイック！！

さながらトレイインマンの毒男並みに錯乱する男達。

彼らが「」なる“H”と“R”とはいったいなんなのだろつか・・・？

「落ち着け！・・・安室氏、説明を」

「」の情報はケースレッド、H A R U K I自身から聞いたのですが、姉御にも確認したところ、眞実である可能性が濃厚です

「馬鹿な！姉御がもたらした情報ならば疑う余地はない！眞実であるところのか！」

だんつ！と机を叩く仮面を被る男性は狼狽えており、前に置かれた

“ものりす”と書かれたネームプレートが落ちた。

さらに、他の仮面を被る男性達は仮面に隠れてわからないが、苦い顔をしていた。

そして・・・。

「よろしい。これよりケースレッド、H A R U K Iに続く織斑一夏をケースイエローと認定、観察することにする。」

「 「 「 「 「 イエス！ イエス！ イエス！ イエス！ イエス！」

「 なお、会員ナンバー 2078 の密告により、会員ナンバー 12 の  
高山大和を追放、ケースレッドと断定する！」

「 「 「 「 「 リア充は死ね！ リア充は死ね！ リア充は死ね！」

「」

「 ではこれにて第七千三百八十七回目の恒例会議を終るー我らが  
目的は・・・！」

『リア充の撲滅！！』

リア充撲滅の会。

会員は四季組の男性陣のほとんどであり、総本山で二三千人、会長は  
四季組幹部の行き遅れのクソジジイ。

会員になるためには非リア充であること、未婚、モテないなど厳し  
い選抜があるようだ。

ちなみに、“H”と“R”は“ハーレム体質”と“リア充を送る怨  
敵”的略らしい。

無論、春樹は二つを装備し、リア充撲滅の会の最大の敵ではあるが  
開いてるのがバレる度に制裁されてるとかされてないとか・・・。

所変わらまして四季組総本山屋敷内

「ほつほつ。春君のシャワー姿じゃないか」

途端、キヤーと黄色い声が部屋に響き渡ると中心人物である安心院なじみはその写真を見ながら周りを見る。

屋で行われてたりする。

「いやー、春君が帰ってきたからボクはまだ戦えるよ！」

「H（春樹様）成分を補給したからですか？」

「やつはいい匂いがするじゃない春君は。もうジラックの類いだね

「那我——」，我說：「——」

「まあまあ。春君の着ていた服はもらつたから後で堪能しなさい」

もはや変態の集まりである。

そこにはいるほとんどの女性が目を血走らせ、捕喰者の目をし、手を

安心院なじみは少し苦笑いをしながら置いてあつた水を飲むと一息ついた。

「さて。今回は他でもない、春君の身柄の保障についてだ」

「まさか・・・奴等ですか！？」

「忌々しいー私達の春樹様に手を出すなんてー。」

恐怖の館。それが一番似合いそうな単語である。ギリギリと歯軋りするもの、呪詛を唱えるもの、釘を藁人形に打つものとかなり怖い。

「“リア充撲滅の会”、彼等が春君をまた狙うみたいだよ」

「奴等を殺！許してはおけぬ！」

彼女等とリア充撲滅の会はいわゆる水と油の存在。たったひとつの存在を巡って争うのだ。

それは織斑春樹。四季組組長の息子にして次期組長の最強なお父さんである。

「では彼等を撲殺しようつか。全員、あれを持つよつて云ふ

**「全員！聖剣を持って！」**

じょせいたちはエクカリボルグをそうびした！

こうべきがカンストした。

めいたゆニカア000あか二た

卷之三

三才圖會

きごん固まどか方シキトシ

いさかにがハサカはなた

「じゃあ、行こうか」

「おー、お姉ちゃん。」「うーん、お姉ちゃん。」

「一〇〇四年季組最大の一〇〇の派閥がぶつかつ合つ。

被害は四季組総本山屋敷の本殿及び中庭が半壊したようだ。

「春樹様に手を出す不届きものがああああああああああああつ！－」

「くそオオオオオオ！あんなリア充のどこがいいんだあああああ

あああつーーー

「

同時期某所

「へつくちー・・・風邪か?」

「せり父さん。豚肉と白菜に豆腐だよ」

「おひー。一夏もわかつてあたな」

「えつくん」

「くつーなぜ私には家事スキルがないのだ！スキルがあれば父さんとキャシキャー！ウツフフー！な料理模様を繰り広げられたのにー！」

「はーくん。今日は鍋かな？ 束さんも行つていー？」

「いいだ。籌りやんも呼んじけ」

「やつたーーはーくんの！」はんーーー」

「す、すこません。またお世話になります・・・」

・・・親父とその子供、その親友は今日も平和であつた・・・。

“リア充撲滅の会”

会員、三七百一十一人（男性のみ）。

会長、四季組直系ゼー 組組長及び四季組幹部、コードネーム“ものつす”

活動内容、リア充撲滅及び織斑春樹に対する敵対行動（笑）

“織斑春樹とヤりた【運営】により削除されました”

会員、千二百二人（女性のみ）。

会長、四季組直系安心院組組長及び四季組副組長、安心院なじみ。

活動内容、織斑春樹を崇拜し、影から見守り、あわよくば貞操をく  
【運営】により削除されました。

閑話休題。 (後書き)

どうでしたか？ www

ふと浮かんだんで書きました。

## 第十六話、息子（前書き）

タイトル変えました。

べ、別につけるのがめんどくさくなつたわけじゃないんだからね！

活動報告にてアンケート途中経過書いてます。

セカン党、ファース党、シャルロッ党の人気がパネエ！

今回からシリアスっぽい感じ。

なんでこうなつたかは知らん。

## 第十六話、息子

今日の天気は晴れ。

父さんの実家、四季組に行ってから一週間が経りました。  
そこの人達はみんな親切で父さんをどれだけ信頼して愛しているか  
がよくわかった。

そこどころかねーさん達の田が怖かつたけど。

「おーい…それは一階の東側の部屋に頼むわー…」

「 」「 」「 」「 」「 」「 」

「父さん、これは？」

「それは一階の和室に置こう。後は簾笥などありますか？」

「春樹さんーの机はどうしますかー？」

「一階の前から一番田の部屋に頼むわー…できたら窓側の横になー…」

「わかりやしたー…」

「うーん。暇だね篠ちゃん」

「私も手伝いたいけどあまり持てないから…・・・一夏の部屋はど

「一階のあの窓の部屋だよ！本当は父ちゃんと一緒によかつたけど俺

の部屋を用意してくれたんだ！」

今、俺と父ちゃんと千冬姉は四季組のみんなに協力してもりつて引っ越しをしている。

以前にタバ姉（タバ姉に呼べと言われた）がいんふりにいつとすとらとす？を造った時に父さんの銀行の口座から引き出してしまったため、あのマンションから引っ越しした・・・でいいの？

引っ越し先は父さんがじいちゃんと最後に住んだ普通より少し大きめの一軒家で安心院さん（なじみさん）に呼べと（ゝゞ）が管理していたのを返してもらつたみたい。

その時に安心院さんが父さんにキスをねだつた時に千冬姉とタバ姉が騒いでいたけどね。

「はーくん！」の部屋を束さんがもりつていい！？

「家賃払え。一日三万な」

「な、なんですかー？一ヶ月ではなく一日・・・！アメリカの銀行をハッキングせねきやぴー！？」

「やめい。ですがにそれは駄目だ。お前の立場がさらに悪くなるから・・・たまに遊びに来るならいいが住み込みはノーだ」

「ぶー。でもシンナーはーくんもいけ・・・すいません謝ります

のでその握られた拳を下ろして貰下さい」

「束。悪いが！」は私と父さんの新たな愛の巣だ。邪魔をするならお前といえども・・・」

「・・・・なんでこいつなったんだ？俺は育て方を間違えたのか・・・？」

父さんは。「状態（安心院さんから聞いたことがある）になると四季組のみんなに慰められるように肩に手を置かれていた。千冬姉ってなんか間違ってるの？ただ単に父さんが好きただけじゃない？」

大人はよくわからないな～。

「む～～」

「へ.どうしたの篠ちゃん？」

「あ、いや、なんでもないぞ一夏？それよつそのちやん付けをやめてくれないか？なんか嫌なんだが・・・」

えー、でも父さんもちゃんと付けをしてるし、今から変えても違和感があると思うんだけどなー。

たぶんだけど篠ちゃんは父さんに恋をしてるんじゃないかな？たまに父さんを見るときに熱っぽい視線を送るし。

そういうえば前に父さんが授業参観に来たときはすごかつたな。すごい目立つてたし、クラスメイトから質問責めをされたし。父さんってカッコいいもんなー。髪も乙女の敵?とか担任の先生( )が言つてたもん。

「やつほー春君。調子はどうだい?」

「あ。姐さん。まあ大体は終わりましたね。後は小さな物だけですし」

「なるほどなるほど・・・それより昔みたいにおねーちゃんとか言ってくれないのかい?ボク、なんか寂しいよ。みみみ・・・」

「嘘泣きははいですかからね?おーい!そろそろ休憩しようかー!」

「「「「うーーすーーーーー」」

「今日はボクが昼食を作つてきたからね?まあ食べて食べて

「・・・ねえ父さん・・・安心院さんの飯つて・・・大丈夫?」

「・・・おー一夏。なぜ私を見る?なぜそんな目で私を見るんだ?」

残念。千冬姉にバレてしまつたようだ。

だって千冬姉・・・家事は壊滅的だし、料理を作れば父さんを殺す最終兵器になあいたたたつ!

千冬姉に頭を脇に挟まれてグリグリされると痛みに悶える。

や、やめて一千冬姉のそれはもつ凶器なの！対男性用の最終兵器なんだよ！？

「それなら大丈夫だ。俺に料理を教えてくれた一人が姐さんだから  
まず死ぬことはない」

「〇二二」

「あー！お嬢！しつかり氣をもつてくだせー！」

「衛生兵！衛生兵！衛生兵！！」

「わーーーちーちゃんしつかりしてーー！」

「・・・あ。悪い。言いすぎたわ」

「君の何気ない発言は時に人を傷つける鋭利な刃になるから氣を付  
けなよ春君」

父さんが言つた何気ない発言に千冬姉が（物理的にも精神的にも）  
沈んだ。

仕方がないよ千冬姉。前に父さんが千冬姉の料理を食べたら死にかけたじやん。

無敵の父さんをああするつて千冬姉ってなんなの？

「あ、ねえ父さん。ちょっと遊んできていー！俺と篠むりやんはやる

「」といから

「ん？ いいぞ。ただし千冬と東と一緒にな。俺はまだこれをやりこ  
やならんし」

父さんは荷物を入れたトラックを指差しながら口に棒状の何かをく  
わえた。

あれ？ あれってチュツパチャツプスかな？

それから四季組の手伝いのみんなと安心院さんの弁当を食べると、  
篠ちゃんと千冬姉、タバ姉と近くの町を歩いて見ることにした。  
父さんとの約束であまり遠くへは行かないように、スーパーや本屋  
とかゲームセンターの場所を確認しておぐ。

「ば、馬鹿な・・・この本は・・・“禁じられた親子愛”私の好き  
なお父様～”ではないか！ 発売禁止になつたはずなのに・・・！」

「おーー！ ちは“愛しのあの人は親友の父親～略奪愛編～”だよ  
篠ちゃん！ これは買わないと！ ！」

・・・うん。まあ、いつもの事だから俺は気にしてない。

父さん、また胃を痛めるんだろうな・・・前に胃薬を飲んでたのを  
見たことあるし。

色々な場所を歩きながら千冬姉達と探索をする。

この町、風景、匂い、活気は父さんがじこひやんと最後に暮らした  
ときに感じたものらしこ。

確かにここはいい所だ。さつきの本屋にいた店員やスーパー、八百屋とかにもいたおばちゃんも優しかった。

聞けば昔に父さんと知り合ってたから、じこちゃんをよく買つ物に来ていた事を楽しそうに話していたのを俺達は何度も聞いた。でもなんか違和感があるんだよね。親子のように見えていたのはいいんだが・・・逆親子ってなんなんだ？

「じゃあ帰ろうか。それから父さんも心配してたからな」

「わかった！」

「おひけーだぜちーちゃんー！」

引っ越し途中の父さんとじこちゃんが住んでいた家から出て四時間が過ぎた頃なので、少しずつ空も暗くなってきた。

夕焼けに染まる空を背景に俺と千冬姉、タバ姉、篠ちゃんと一緒に新しい我が家に帰る。

うーん。今日の父さんの晩御飯はなんだらか、父さんの料理は美味しいからまた楽しみだな！

でも・・・なんか父さんは何かを隠してる気がするな。なんかいつも千冬姉と何かを隠してる感じが・・・。

今思えば父さんは俺と千冬姉を可愛がってくれてるけど、母親がいなこのはおかしいと薄々感じている。

皆は父さんに夢中で誰も聞かないが母親がいないのは気にならぬ。家でも母親の話題になるとはぐらかされるし。

母親が死んだとか父さんの奥さんの話も四季組に来た時にはまつたく聞かない上に、何かを隠してる感じがここでもあった。

「・・・じつした一夏? そんな難しそうな顔をして」

「え? な、なんでもないよ千冬姉!」

「大丈夫いっくん? なんか辛そつな感じがするよ」

「なんでもないってタバ姉!」

千冬姉とタバ姉が心配そうにするがやはり気になる。父さんは何かを隠してる。それもかなり重要な、俺と千冬姉に関する何かを。

自分でもなぜ気になるかはわからないけどじつしても俺の家だけ母親がないのかが知りたい。

「(・・・前に四季組に行つてから一夏の様子が変だ)」

「(だね。上辺だけでじつに上の空みたいな感じだよねいっくんは)

」

「(何も起じられないといいが・・・父さんとももう一度話した方がいいな)」

」

でも父さんは俺をよく可愛がってくれている。  
欲しいと思ったものは買ってくれるし、忙しくても俺との時間を作  
ってくれるし、美味しいご飯も作ってくれる。

・・・本当の・・・親子だといいな・・・。

「む？」

「どうしたのちーちゃん」

「誰かが来る」

ネギとかが飛び出している買い物袋を持つ千冬姉が曲がり角の壁を見ながら少し警戒する。

「き、貴様は・・・! なんで・・・!」

「ようやく見つけたぜクソガキ」

曲がり角から少し柄が悪い男が歪んだような笑いをしながら出てきた。

千冬姉の様子がおかしいな? の人と知り合いか何かかな?  
なんでそんなどこまでも憎いみたいな見るような目で見るんだよ?

「なんで貴様がここにいるんだ！」

「かつ、あのクソ女がお前らを逃がしたから今までずっと探しでたんだよ千冬」

「お前、なんなの？ちーちゃんの名前を気安く呼ぶなんて」

「束、今からすぐここへ一夏と篠を連れて早く逃げるんだ！早く！？」

「ち、千冬姉……どうしたの……？」

千冬姉は俺と篠ちゃんを後ろに庇いながらタバ姉に押し付けていた。  
なんでそんなに慌てながらあの人から逃げようとするんだよ！？

「おじおじ冷たいな……せっかくお前らの親父様が迎えに来てやつたのによ

「黙れ……」

・・・え・・・？ちー、おや・・・？

「おお、一夏はまだ小さだからわからぬか。俺は……」

「喋るな！それだけは言わないでくれ……」

「ちー……ちーん……？」

千冬姉は今までに見たことがないくらい慌てながら叫んでいた。

ダメダメ……コレヲキイテハイケナイ……。

キイタラ……イママデノスベテガクズレル……。

「俺は……お前らの父親だよ。遺伝子上でも血もお前らと繋がった正真正銘の父親ってことだ

「あ・・・」

「一夏ー!？」

それを聞くと何かが崩れる音がし始めた。

体に力が入らなくなつて倒れそうになると千冬姉に支えられる。

「ちつ、道具!」ときが俺の傍から離れるなんて嘗めた真似をしてくれる。まあ、いい・・・今まで父親だと思つていた奴は偽物で本当はお前達を疎ましく思つていただろうよ。ハハハツ!」

「黙れえええええええ!!」

「おつと。殴つたら傷害罪で訴えるぜ? そしたらお前らの慕うお父様に迷惑がかかるんじゃないのか? けひひつ!」

父さんが・・・偽物?

じゃあ今まで俺を愛してくれたのは?

本当はただ単に育てただけで愛情がなかつたんじゃ?

わからない。父さんは・・・誰なの?

「一夏、千冬。お前らはあの組長息子から金をもらつたためのただの道具だ。本当の父親は俺だ。あいつは偽物の父親で本当はお前らが嫌いだ。戻れ。俺ならお前らを愛してやるよ、今ならな」

「あの人を虐待してたくせにそれはなんだ！？私達の父親は織斑春樹ただ一人！貴様なんか知らない！」

「ちつ、余計な知恵を持ちやがつて……だが一夏はどうだ？混乱してるんじゃないのか千冬？」

「ツ！一夏？」

わからない。何もわからないよ。

母親がいなのは偽物の父親だから？

ならこの人は本当の父親？

父さんは……父さんはいない……誰が父さん……？

「一夏ー！しつかりしるーあんなやつの言ひ事を真に受けるなー！」

「けひやひやひやーまさかあんな生意気なクソガキがお前らの場所を教えてくれるとほな……これでまたあの組長息子から金を貰えるな！」

「お前、ウザこよ。やつたと死んだらどう？！」

「あ、?なんなんだてめえは?」  
「これは俺達家族の問題だ。よそが勝手に口出しそるな」の×××が!」

「貴様!束を貶すな!貴様に束の何がわかる!?」

「おお、怖い怖い!ま。今日は「れぐら」にしてやるよ。一夏・・・  
お前はあの父親から、誰からも愛されない事を覚えておけよ・・・  
アハツ、アハハハハハ!!」

「殺す!?!」

我慢の限界がきた千冬が本気で殴りかかるがひりつと避けるとそのまま男は曲がり角に消える。

千冬が追い掛けるが逃げ足が早いのか、曲がり角を覗いても誰もいなかった。

「くそつーなんで今」「うになつてあいつが!」

「あれがちーちゃんといつくんの父親?あり得ないよ。二人の父親  
ははーくんしかいないよ」

「おい一夏?大丈夫なのか?」

「・・・・・千冬姉・・・・どつこつ」となの?」

「・・・すまない。今まで隠してきて。取り敢えず帰り!。父さん  
とも話さないと」

「でも偽物の父親なんでしょう千冬姉？」

「違うーーあんなやつが父ちゃんがよっぽど父親だ！一夏、騙されるなよ。あいりは父親なんかじゃないんだ！」

千冬姉はいつが俺の心はモヤモヤしたまま晴れるいつになかった。

「おー。お帰り

「ただいま父さん。これ、買い物したやつだよ」

「カンキョ。今から飯を・・・ん？どうした？なんか辛そうな顔をじるなー夏ー」

家に帰ると父をひきこつてのよつに黒いHプロンをつけて出迎えてくれた。

そしていつものように頭を撫でながら笑いかけてくる。

・・・これも・・・偽物、なのか・・・。

「父さん」

「ん?」

「父さんって・・・偽物の父親なの?」

撫で続けられた手がピタリと止まるといふの表情が固まった。

「・・・な、なにを」

「父親を名乗る変な奴が現れて聞いたんだ・・・どうなの父さん? 母親がないのも偽物の父親だからなんでしょうー?」

「そ、それは・・・」

「もう俺・・・誰を信じればいいかわかんないよー。」

「あ、おこー夏ー。」

頭に乗せられた手を乱暴に払い除けると俺にあてられた部屋に閉じ

籠つた。

千冬姉とタバ姉が叫んでいたがもう誰の声も聞きたくなかった。

あの優しい父さんも、なにもかもが偽物なんて・・・。

「一夏・・・」

部屋にいるはずなのに父さんの呆然としたような咳きが聞こえてきた。

織斑春樹、三十七歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、六歳。

来るべき時が来てしまった。まる。

## 第十六話、息子（後書き）

本当の父親登場。

捨てられた二人と伯父である親父の行方は・・・。

的な感じ。

もちろん、最低下劣な父親にしたいです。

春樹の妹、秋枝と結婚したのもある理由があります。

うまくカケルカナー。

## 第十七話、親父（前書き）

わいつやだ・・・なんでこんな鬱展開書いたんだわいつか？

まあ、春樹の過去を少し書けたからいいけど。

アンケート、まだまだ募集しています。

## 第十七話、親父

今日の天気は曇り。

まさに俺の心も曇っている。

なぜなら一夏がついに画してきた事、秋枝の息子で俺が本当の父親ではない事を知ってしまったからだ。

「はあああ～～～」

思いつきりため息をつくと畳に顔を押し付けてふて寝する。  
なんかやる気が出ない。一夏に半分嫌われてしまったから自己嫌悪  
で意気消沈。

憂さ晴らしに四季組総本山で変態どもをタコ殴りにしたがストレス  
とこづかイライラ感は徐々に上がっている。

「ちーちゃん、はーくんは大丈夫なの？」

「駄目だ。一日前のあれからあんな感じだ。何をしようともせずに  
あんな風にただ寝ず食わぬの一日だ・・・私も父さん成分が足りな  
くてやる気が出ない」

「お姉ちゃん、春樹さん、なんとかできないかな？一夏も部屋にい  
て学校も休んでるもん」

「んー、束さんの頭脳でもいい方法は浮かばないなー。師匠も考えるって言つてたけどね」

「あんな春君、はじめて見たよ。冬君が死んだ時はあんなんじゃなかつたんだけどな・・・それより千冬ちゃん、間違いなくあのクズなんだね?一夏ちゃんにあんな事を言つたのは」

「はい。忘れもしません。あの人・・・母さんを虐待してる時からずっと忘れません。間違いなくあいつの顔でした」

一夏の本当の父親を名乗るボケは秋枝と駆け落ちしたクソガキで間違いないと千冬から聞いた。

んで、ブチキれて殺そうとしたが姉さん一同、四季組に抑えられて止められた。

現在は大和を中心にクソガキの捜索を四季組一同でやつてるようなので俺は完全にノックアウトして家の居間の横の和室で死んでる。

「あー・・・死にたくなつてきた」

全員に全力で止められた。

三回経過

「いちかイチカ一夏一夏イチカ一夏一夏一夏いちか一夏イチカ一夏  
一夏イチカイチカイチカイチカイチカイチカイチカイチカイ  
チカイチカイチカイチカイチカイチカイチカ」

「父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さ  
ん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん」

「わきやーーはーくんとちーちゃんが壊れたあああーー」

「・・・まさか三日でいりなるなんてどんだけ親バカなんだ春樹・・・」

「ふむ。おそらくHICHIKA成分とHARUKI成分の枯渇による拒絶反応だな。千冬は春樹に抱きつかせれば治るぞ」

「おーい春樹。田を覚ましなよー」

三日後、春樹と千冬はまさに覚醒剤の禁断症状の「J」とく、和室の畳の上でぶつぶつと虚ろな田で横たわっていた。

春樹は一夏と仲直り、もとい会話ができていないため、千冬は春樹の料理を食べていない、抱きついていないのが原因である。

新しい、古巣の家に来た束、大和、響、なじみは現状に呆然としていた。

束は慌てながら千冬を揺さぶり、大和はパソコンを持ちながら春樹を蹴つて殴られ、響は煙草を吸いながら二人の現状を冷静に（？）見極め、なじみは春樹の頭を撫でたり頬を叩いたりつねつたりしていた。

「いたたた・・・姉御、これはどうするんだ?話ができないぞ」

「取り敢えず千冬ちゃんは春君に抱きつかせよ。春君は【優しく起こすから】

「・・・なんか安心できないんですけど」

「大丈夫大丈夫。じゃあ・・・」

ああ・・・なんか、癒されハアハア

「ぐおおおお・・・腰がバキバキ鳴るううう・・・」

なんか綺麗な花畠と美しい川を見ていたら姉さんにバックブリーカー食らって腰の骨が一部砕けかけた。姉さんはいつもの扇子で口を隠しながら笑つてはいるが、絶対楽しんでるだろ。

「なんかちーちゃん艶々してない？」

「HARUKI成分にはリラックス効果、リフレッシュ効果などがあるからな。定期的に採取すれば髪の艶マックス、肌もつるつるでテカテカになれるぞ」

「これでまた戦えるー父さんへの愛は止まらないー！」

「へー」

「・・・なんか父さんが冷たひ・・・」

二時間くらい抱きついた千冬はテンションマックスーと言わんばかりにノつており、なんか輝いている。

だが。一夏に嫌われた今じゃジーでもよくなつてきたよバーイー・・・

深く、深一いため息を再びつくと畳に顔を押し付けて頃垂れる。

「・・・これは重症だね。一夏ちゃんもだが春君も色々バイぜ」

「取り敢えずビタミン剤打つとこ」

ザスッと首の横に注射器で打たれるとやる気が妙に出る気も・・・しない。

畠に死んだまま寝ていると姉さんと大和、響が何かを取り出して和室にあるパソコンに繋げた。

それはUSBメモリらしく、パソコンの画面に何かの情報が出るが無気力ハイな俺には見る気が出ない。

「ここにはあのクソガキの情報と秋枝さんの居場所が書いてある。探すのに苦労したぞマジでそー」

「いやいやー、成長したね大和ちゃん。ボクより早く見つけられるなんてね」

「おうおう。さすがだな大和。ファンタム幻影だなんて厨一的な名前を持つてるくせに」

「やめて! それは俺じゃないんだよ! なんか勝手に付けられただけだからよおー!」

なんか姉さんと大和と響が騒いでるが無気力ハイな俺には(「ゆ

千冬と束がまた抱きついて頬擦りしているがどうでもなれ。むづびうでもよくなつてきた・・・。

一夏あ・・・」めんよお・・・俺の事を許してくれよ・・・。

「おひるーん

「うわあ・・・漫画みたいな涙をはじめて見たな」

「もう病気つてレベルだぜこれ」

だばーっと涙を流す俺は一夏に嫌われたダメージに耐えられずに悲しみにうちひしがれている。

一夏に嫌われたら俺はもう生きる意味もない・・・。

「もう死にたい」

なぜかあつたロープで輪を作ると首を吊るひつとする。

もちろん、全員に全力で止められる事になるのだが。

「ぬああああつー春樹、さすがにそれは駄目だーー。」

「よせー死んでもいい事はないぞーー。」

「あははは～、なんか綺麗な花畠が見えてきた～・・・あ。川の向  
こうで親父が手を振つてる～」

「三途の川アアアアアアアアアア！～それは三途の川だ～渡るな春樹イ  
イイイイイイ！～」

「黙田だよはーくん！死んじや束せんは悲しいよー泣こちやうかー」

「そうだぞ父さんー父さんが死んだら私は何に抱きついて生きてい  
けばいいんだー!?」

「え？なんだよ親父？早くこひちに来い？わかつたよ」

「取り敢えず寝ていなさい春君

ズドムツー！

「ゲフウー！」

パタン。ちーん。

「「「「「・・・・・」」」」

「や。早く本題に入ろうつか

視点チェンジー！」からボクの時代だぜ！」

「うむ。ではまず、あのクズについて話しえぬつか」

「いや、あの。なじみで、父親がどうかなんですか？」

「しげりへしたら田を覚ますから大丈夫だよ千冬ちゃん」

首吊り自殺をしようとした春君の腹をぶん殴つて氣絶わせると和室で縛つてリビングにある椅子に座らせた。

それからボク、千冬ちゃん、束ちゃん、大和ちゃん、響ちゃんと座ると話し合ひをする事にした。

篠ちゃんも来たいみたいだけど学校があるから学校に行つてこる。千冬ちゃんと束ちゃんは今日は建立記念日なので休みである。

まあ春君があれだから無理矢理休むだろ？！などね。

「束ちゃんはどうまで知つてるかな？ボクや大和ちゃん、響ちゃんに千冬ちゃんは知つてるけど」

「んー。ちーちゃんといつくんがはーくんの所に来たくらいは聞いたよ。詳しくはわからないけどね」

「ん。了解。簡単に説明するから聞こいてね？」

「うううーー」

んー・・・と。春君がまだ四季組にいた頃だから・・・十六年前、かな？

十六年前、四季組総本山

『駄目だ！あんなクソガキと結婚するなんざ俺も親父も認めねえぞ！』

『嫌よ！私はあの人と結婚したいのよ兄さん…』

『いい加減に目を覚ませ秋枝！あのクソガキの本性を知らないんだ！あいつはクズなんだよ！』

当時の四季組総本山でボクと春君は秋ちゃんがあのクズと結婚すると言った。

春君は勿論、大反対。春君の直感が彼がろくでもない奴だと感じたからだろう。

無論、ボクも反対。妹みたいな秋ちゃんをあんな奴に嫁がせる気はまったくないからね。

この頃から冬君は体が弱り始めて寝ていたから春君が実質、組長代理をしていたね。

『なんですよ兄さん！あの人はそんな人じゃないわ！』

『ふざけるな！あいつの過去を知らないからそう思うだけだ！大和から聞いたなら奴は昔に覚醒剤やら拳銃保持で補導されたり、ムシヨにいた事があるんだぞ！？』

『でも今は真っ当に生きてるわ！』

『ただのフリだ！いい加減に口を覚ませ馬鹿野郎が！』

春君はあの時、組長が座るべき場所で憤慨しながら秋ちゃんに怒鳴つていたな。

秋ちゃん、春君と少なからず似たような顔をしてたからね。見たら同じ顔が怒鳴りあつていて見えたな。

秋ちゃんは春君の愛した母親が最後に生み残した春君と血が繋がつ

た冬君以外の唯一の家族。

母親を失った春君は秋ちゃんを溺愛していたからな。あんなにキレるのは仕方がないと思つよ。

『もひいいー兄さんもお父さんも認めてくれないなら私はここから出ていくー。』

『待て秋枝！お前、絶対に後悔するぞー頼むから親父に心配はかけさせないでくれ！』

倒れた冬君を気遣う春君は秋ちゃんが出ていつて冬君に心労をかけさせたくないなかつたんだろうね。自分のためでもあるけど必死に秋ちゃんを止めようとしたんだ。

でも結果は止められなかつた。

今まで我儘を言わなかつた秋ちゃんがあそこまで反抗したから戸惑つていたせいでもあつたんだろうね。

秋ちゃんはあのクズと駆け落ちして四季組、織斑家から出ていつた。

実は後から知つたんだけど秋ちゃんのお腹の中には赤ん坊がいたんだよ。

・・・そう。君だよ千冬ちゃん。

「私が・・・？」

うん。本当は秋ちゃんはあのクズの本性を知っていたんだ。  
最初は愛し合っていたんだけどあのクズは秋ちゃんじゃなくて後ろ  
にいる四季組を見ていたんだ。

当時、今もだけど四季組は莫大な富を持っていた。あのクズはそれを手に入れるために秋ちゃんに近付いたんだ。

秋ちゃんもそれがわかつて離れようとしたけどクズに脅されてお腹の中の子供を守るためにわざと四季組から離れたんだ。

尊敬する冬君、今まで優しくしてくれた春君には迷惑をかけたくはなかつたんだううね・・・。  
後は大体は察しの通りだよ。それから一夏ちゃんが生まれ、春君の元に来たというわけだ。

「まあ、こんな感じかな？春君に千冬ちゃんと一緒に夏ちゃんを預けたら秋ちゃんはクズから逃げてビニカで暮らしてゐみたいだけだ」

「そしてあのクズはまた現れた。まさしくゴキブリみたいにしつこいな」

だね。前に春君が一回、全力全壊無慈悲魔王<sup>すたーらいとぶれいが</sup>破壊砲撃を氣でぶつ放したのに生きていたからね。

ギヤグパートだったのかね？

すると千冬ちゃんはやはりビニカで惑つた感じで座つていた。

まあ、捨てられたと思つたら本物は譲るために春君に預けたとは思わなかつたのだろう。

前に春君から秋ちゃんの手紙を読ませてもうつたけどあの仕掛けは気付かなかつたんだろうね。千冬ちゃんは。

『・・・はあ。まさか昔と変わらない炎り出しで新しい文字を出す仕掛けとはね・・・』

『懐かしいね。春君が自慢したら秋ちゃんも真似したんだったね』

実は秋ちゃんからの手紙を火で炙ると本命の手紙が出たため、春君は全ての真実を知った。

レイプまがいで一夏ちゃんを孕んだこと、虐待から一人を護るために春君に預けたこと、本当はずつと春君といたかつたと誰にも話せなかつたことが書かれていた。

春君はすぐに秋ちゃんを探そうとしたみたいだが、まだ幼い一夏ちゃんと千冬ちゃんを置いていくわけにもいかなかつたみたいだ。

「・・・あの人は・・・私を護るために・・・」

「秋ちゃんは昔から春君と同じで誰に対しても優しかつたからね。だからそこにつけこまれたんだろう。ぐなきやよつぽど馬鹿な奴しかクズとは付き合わないよ」

それくらい酷かつたからね。

今までボクも仕事で色々な人間を見てきたけどあそこまでは中々見ないよ。

・・・まあ、春君も人間の汚さを知ってしまったから秋ちゃんをあんなに気にかけたんだよね。

母親の件もあるし。

「兎に角。まずは一夏ちゃんと春君をなんとかしないと解決とはいきないでしょ？」

「せっかく東と春樹が喜びそうなT-Sのシステムを開発したのにな」「それに気が狂う。春樹があんなつてみんなもなんかピリピリしてるし」

「その件はボクら、樋無家も動こう。どうも裏がある気がしてならないからね」

今まで知られなかつたのに急に現れたのも気になるからね。  
対暗部用暗部である更識家の力を使えばすぐにわかるだろう。

んー。春君つて何かとトラブルに巻き込まれるよね。

昔なんかバカنسに行けば飛行機ハイジャック、現地でテロリスト。ご飯を行けば銀行強盗の人質になつたりとか・・・。

「一夏～一夏～」

「ね、寝言まで一夏つて言つてゐるぞ・・・」

「愛されてるな。できたら私にその愛をぶちこんでほしいんだがな？」

「下ネタ禁止……」

話は春君に最低限の情報を与え、ボクらはクズの背景を調べながら断罪をすみました。

春君はキレからはずしておいて、四季組総力戦と洒落むじりと決めた。

ローラー作戦で見つけたらじっくりと話して近付かなことひきかわるか、もしくは地獄を見せて送るか。

どうせ元気よ、春君と一緒に夏けやんを搔き回した罪は重いよ。

「はあ～・・・父さんの料理が食べたい・・・」

「・・・待ちなさい。春君、またかとは思つたけど何も食べてないのかい？」

「は、はい。私は出前とかで食べてますが父さんは食べるびいのか寝ていません。一夏にはハンバーガーとかを与えていますが・・・」

「・・・また悪い癖か・・・。

春君、落ち込んだりすると断食、睡眠をしなくなるからな・・・。

取り敢えず無理矢理何かを食べさせよう。

「はーい。口を大きく開けてね~」

「はがががつ!」

口を無理矢理開けて大和ちゃんと響ちゃんに固定させてもらつと激辛キムチ雑炊を食べさせた。

春君、嬉しそうに叫ぶから作つたかいはあつたものだ。

そしてその一日後・・・あいつが四季組総本山に姿を現した。

## 第十七話、親父（後書き）

金曜サスペンスとかに moyo あるよね？ 母親が護るために捨てる的なやつ。

次回はあのクズが四季組に現れます。無論、春樹がブチキれます。

あー、早く番外編を投稿したい。原作 I S ワールドを書きたい！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7710x/>

織斑家の最強お父さん！

2011年11月24日09時18分発行